

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (84)

県道黒石串良線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ふ た ご づ か
二 子 塚 A 遺 跡

(曾於郡大崎町)

2005年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は県道黒石串良線改良工事に伴って、平成9年度及び平成11年度に実施した曾於郡大崎町に所在する二子塚A遺跡発掘調査の記録です。

大崎町は国指定史跡横瀬古墳をはじめとして多くの古墳があり、古墳時代には九州でも有力な地位を占める地のひとつとして知られています。そうした時期にやや奥まった地にある山間部の人々はどうのような生活をしていたかということは非常に興味深いものがあります。

二子塚A遺跡の調査はこうした問題を解く上で重要な意味を持つ調査でした。この調査によって、このあたりは南九州の中でも宮崎平野と薩摩・大隅地方との境界にあたっていたことがわかりました。それは住居形態、土器の形態、組み合わせなどに表れています。この調査の結果をおさめた本書が郷土の文化財保護や学術的研究の資料として広く活用されれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり御協力いただいた鹿児島県土木部、大崎町教育委員会ならびに発掘調査に従事された地元の方々に厚くお礼申し上げます。

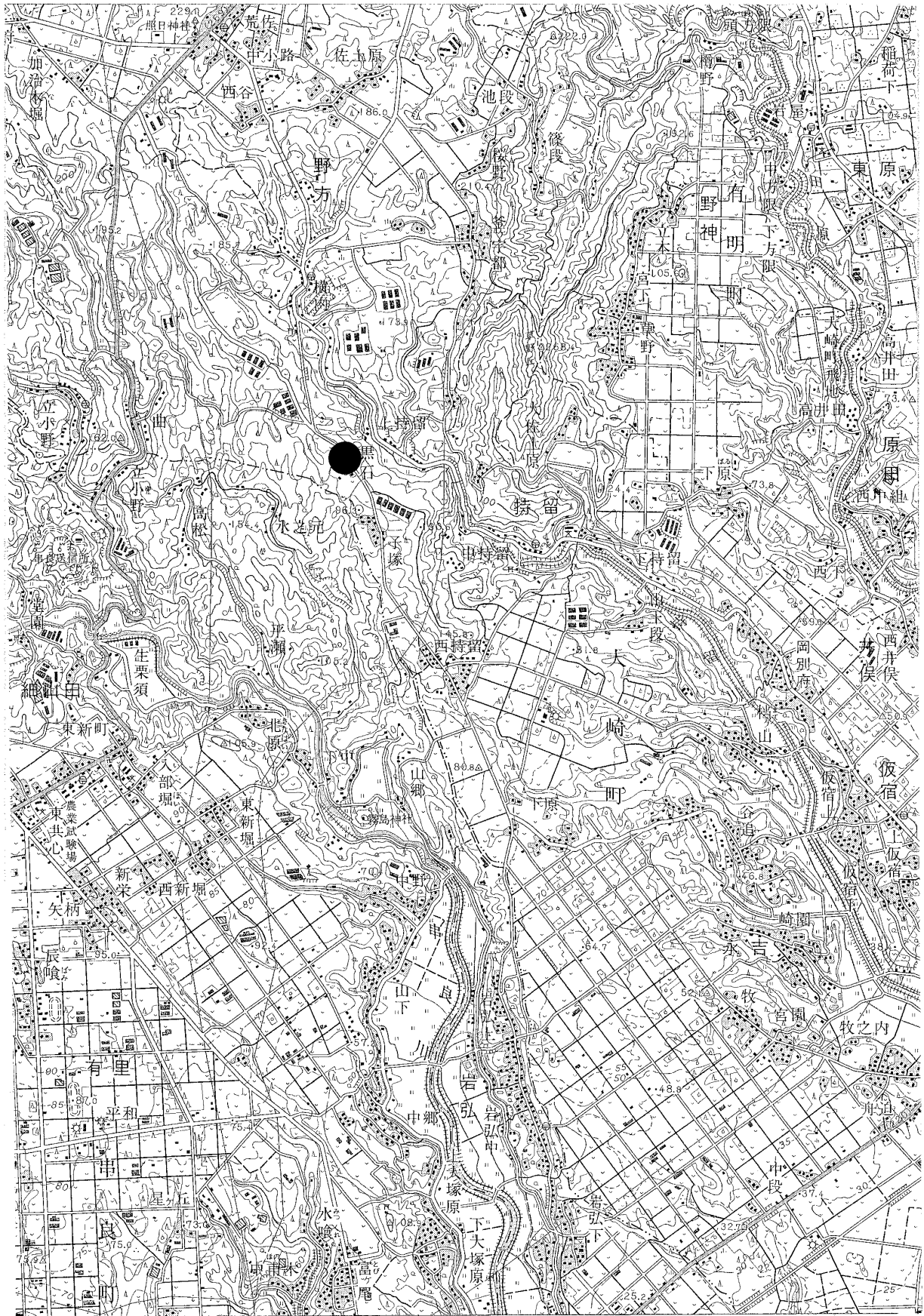
平成17年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 木 原 俊 孝

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふたごづかえーいせき							
書名	二子塚 A 遺跡							
副書名	県道黒石串良線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第84集							
編集者名	池畑耕一・西園勝彦							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1 TEL0995-48-5811							
発行年月日	西暦2005年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふたごづかえーいせき 二子塚A遺跡	かごしまけん 鹿児島県 ぞおぐんおおさきちよう 曾於郡大崎町 のがたあざふたごづか 野方字二子塚	46468	70-6	31度 28分	130度 56分	確認調査 19970917 ～ 19970930	110	県道改良 事業
						本調査 19991012 ～ 19991210		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
二子塚A遺跡	集落	旧石器時代 縄文時代早期	集石	1基	フレイク 吉田式土器・石坂式土器・桑 ノ丸式土器・押型文土器 ・妙見式土器・塞ノ神式土器・ 石鏃・石匙・スクレイパー・ 挟入石器・磨製石斧・礫器			
		縄文時代晚期	土坑	1基	入佐式土器・打製石斧・敲石・ 磨石・石皿			
		弥生時代			弥生土器			
		古墳時代	竪穴住居跡	3軒	土師器・成川式土器・砥石			
			土坑	1基				
		近世以降	溝状遺構	2条				
			古道	7条				



遺跡位置図

例 言

- 1 本報告書は鹿児島県土木部（道路維持課）が行う県道黒石串良線改良工事に伴う二子塚A遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、鹿児島県土木部道路維持課から鹿児島県教育委員会が受託し実施した。
- 3 発掘調査は平成9年9月17日～9月30日（確認調査）と、平成11年10月12日～12月10日（本調査）に実施し、整理作業及び報告書作成は平成16年度に実施した。
- 4 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。
- 5 挿図の縮尺は、各図面にスケールで示した。
- 6 現場での実測・写真撮影、遺物の実測・浄書・写真撮影等は西村・西園・池畑が分担して行った。
- 7 本書の執筆・編集は池畑が行ったが、図版編集は西園が行った。
- 8 出土した遺物は、県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、本遺跡の遺物注記の略号は「二子」である。

序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言

本文目次

第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織（発掘調査）	1
第3節 調査の経過	2
1 確認調査	2
2 本調査	2
第4節 整理作業と、その組織	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理・自然的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第Ⅲ章 層位	10
第Ⅳ章 発掘調査の概要	12
第1節 確認調査の概要	12
1 1・2トレンチ	12
2 5・6トレンチ	12
3 9・10トレンチ	13
第2節 本調査の概要	13
第3節 旧石器時代	14
第4節 縄文時代	14
1 遺構	14
2 出土遺物	14
第5節 弥生時代	41
1 甕形土器	41
2 壺形土器	41
第6節 古墳時代	42
1 遺構	42
2 出土遺物	52
第7節 近世以降	58
第Ⅴ章 まとめ	61
第1節 縄文時代の二子塚A遺跡	61
第2節 古墳時代における二子塚A遺跡の特質	62
1 竪穴住居跡の構造	62
2 成川式土器と宮崎平野の土師器	62
3 独自性と他地域の影響	63

挿 図 目 次

第 1 図 周辺採集の石器 …………… 7	第24図 石器(6) …………… 34
第 2 図 周辺の遺跡 …………… 8	第25図 石器(7) …………… 35
第 3 図 基本地層図 …………… 10	第26図 石器(8) …………… 36
第 4 図 地層断面図 …………… 11	第27図 石器(9) …………… 37
第 5 図 確認トレンチ配置図 …………… 12	第28図 石器(10) …………… 38
第 6 図 調査区域図 …………… 13	第29図 石製品 …………… 39
第 7 図 縄文時代の集石と土坑 …………… 14	第30図 弥生土器 …………… 41
第 8 図 縄文土器の分布状況 …………… 15	第31図 1号竪穴住居跡 …………… 43
第 9 図 縄文土器(1) …………… 16	第32図 1号竪穴住居跡出土の土器 …… 44
第10図 縄文土器(2) …………… 18	第33図 2号竪穴住居跡 …………… 45
第11図 縄文土器(3) …………… 20	第34図 2号竪穴住居跡出土の土器(1) … 46
第12図 縄文土器(4) …………… 21	第35図 2号竪穴住居跡出土の土器(2) … 47
第13図 縄文土器(5) …………… 22	第36図 2号竪穴住居跡出土の土器(3) … 48
第14図 縄文土器(6) …………… 23	第37図 2号竪穴住居跡出土の土器(4) … 49
第15図 縄文土器(7) …………… 24	第38図 3号竪穴住居跡と出土遺物 …… 50
第16図 縄文土器(8) …………… 25	第39図 土坑とその出土土器 …………… 51
第17図 縄文土器(9) …………… 26	第40図 B地点出土の土器(1) …………… 52
第18図 縄文土器(10) …………… 27	第41図 B地点出土の土器(2) …………… 53
第19図 石器(1) …………… 29	第42図 C地点出土の土器(1) …………… 54
第20図 石器(2) …………… 30	第43図 C地点出土の土器(2) …………… 55
第21図 石器(3) …………… 31	第44図 溝状遺構と古道 (A地点) …… 59
第22図 石器(4) …………… 32	第45図 溝状遺構と古道 (B・C地点) … 60
第23図 石器(5) …………… 33	

表 目 次

第 1 表 周辺の遺跡地名表 …………… 9	第 4 表 古墳時代の土器観察表(1) …… 56
第 2 表 縄文時代晩期の土器観察表 …… 28	第 5 表 古墳時代の土器観察表(2) …… 57
第 3 表 石器観察表 …………… 40	

図 版 目 次

1 調査前全景	12 縄文土器(1)
2 C地点の調査	13 縄文土器(2)
3 縄文時代の遺物出土状況	14 縄文土器(3)
4 縄文時代の土坑	15 縄文土器(4)
5 1号竪穴住居跡	16 石器(1)
6 1号竪穴住居跡と成川式土器出土状況	17 石器(2)
7 2号竪穴住居跡	18 石器(3)
8 3号竪穴住居跡	19 1号竪穴住居跡出土遺物
9 古墳時代の土坑	20 2号竪穴住居跡出土遺物
10 古道 2 と土器出土状況	21 2号竪穴住居跡出土遺物
11 古道 6 と B 地点の地層	22 3号竪穴住居跡出土遺物とミニチュア土器

第3節 調査の経過

1 確認調査

確認調査は平成9年9月17日（水）から9月30日（火）まで（実働8日間）である。

（日誌抄）

- 17日（水） オリエンテーションのあとトレンチ設定，重機による表土剥ぎ。
1～5トレンチを掘り下げる。大崎町教委笠木社会教育課長補佐来訪。
- 18日（木） 1トレンチ調査終了。2～6トレンチ掘り下げ。4トレンチで古道跡発見。
- 19日（金） 2・3・6～8・11・12トレンチ掘り下げ。11・12トレンチで落ち込み発見。
笠木補佐来訪。
- 22日（月） 1・2トレンチ埋め戻し。11～13トレンチ掘り下げ。
雨のため午後作業中止。
- 24日（水） 12・13トレンチ掘り下げ。3・8・11トレンチ出土状況写真撮影，遺物取り上げ。
9・10トレンチ埋め戻し。12トレンチに竪穴住居跡・土坑などの落ち込みがある。
- 25日（木） 4・7トレンチ掘り下げ。縄文時代早期の土器出土。11～13トレンチ精査・出土状況写真撮影・遺物取り上げ。
- 26日（金） 雨のため作業中止。
- 29日（月） 4・7・8・12・13トレンチ掘り下げ，出土状況写真撮影・遺物取り上げ。
3～6トレンチ埋め戻し。所長来訪。
- 30日（火） 7～13トレンチ埋め戻し。作業道具洗い・搬出。
町教委へ終了あいさつ。

2 本調査

本調査は平成11年10月12日（火）から12月10日（金）までの実働36日間である。

（日誌抄）

◎10月12日（火）～15日（金）

発掘用具を搬入し，調査開始。

A地点：アカホヤ層から掘り下げ。溝状遺構・古道検出，掘り下げ，写真撮影，平板実測。

B地点：Ⅱ層掘り下げ。遺物出土状況の写真撮影。竪穴住居跡などが確認された。

C地点：表土剥ぎ。遺物の出土量が多い。

◎10月18日（月）～22日（金）

A地点：遺物は少ないが，溝状遺構を検出。掘り下げ，写真撮影，平板実測。

B地点：アカホヤ層の掘り下げ。Ⅱ層・Ⅲa層から縄文時代・古墳時代の土器が多く出土している。出土状況の写真撮影。

C地点：アカホヤ層の掘り下げ。遺物が多い。出土状況の写真撮影。1号竪穴住居跡を確認。

◎10月25日（月）～28日（木）

A地点：Ⅳ層掘り下げ。完掘状況の写真撮影。出土状況の平板実測，遺物取り上げ。

B地点：Ⅲ層掘り下げ。出土状況の写真撮影・平板実測，遺物取り上げ。古道を1条検出。Ⅳ層掘り下げ。出土量は少なく，遺構なし。

C地点：Ⅲ層掘り下げ。出土状況の平板実測，遺物取り上げ。地形測量を実施。

◎11月1日（月）・2日（火）

A地点：薩摩火山灰層上面まで掘り下げ。地形測量。

B地点：縄文時代早期包含層掘り下げ。出土品は少ない。Ⅱ層・Ⅲa層の出土状況実測，遺物取り上げ。

C地点：1号竪穴住居跡掘り下げ。攪乱により平面形がはっきりしない。Ⅲa層の出土状況実測，遺物取り上げ。

◎11月4日（木）・5日（金）

A地点：地層断面清掃，写真撮影，実測。薩摩火山灰層上面の地形測量。

B地点：古道の平面図作成，Ⅳ層掘り下げ，出土品は少ない。旧石器時代の層から石器出土。

C地点：Ⅲa層掘り下げ。出土状況実測，遺物取り上げ。1号竪穴住居跡掘り下げ。

◎11月8日（月）～12日（金）

A地点：溝状遺構掘り下げ。地層断面図作成。

B地点：Ⅳ層掘り下げ。地層断面清掃，写真撮影，実測。Ⅲ～Ⅶ層の出土状況実測，遺物取り上げ。拡幅部の調査を終了し，埋め戻し。迂回路工事。現道部分の掘り下げ準備。

C地点：1号竪穴住居跡の掘り下げ。Ⅳ層掘り下げ。出土状況実測，遺物取り上げ。

◎11月15日（月）～19日（金）

A地点：溝状遺構実測図作成。

B地点：現道下の掘り下げを開始。Ⅱ～Ⅳ層掘り下げ。出土量は少ない。竪穴住居跡を検出。Ⅲ層の溝状遺構実測。Ⅲa層の出土状況実測，遺物取り上げ。

C地点：1号竪穴住居跡掘り下げ。

17日（水）に繁昌正幸・今村孝一郎が安全・衛生パトロール。

◎11月24日（水）～26日（金）

A地点：調査終了。

B地点：Ⅱ～Ⅳ層掘り下げ。溝状遺構完掘，遺物出土状況作成，取り上げ。竪穴住居跡を検出。陥し穴実測。現道の半分は調査終了し，埋め戻し。

C地点：1号竪穴住居跡の実測。Ⅱ～Ⅲa層出土状況実測，遺物取り上げ。土坑実測。Ⅳ層の集石実測。

◎12月1日（水）～3日（金）

B地点：Ⅲ層からⅣ層掘り下げ。2号竪穴住居跡掘り下げ。3号竪穴住居跡掘り下げ。

C地点：Ⅳ層掘り下げ。礫が多く，集石の可能性はある。

◎12月6日（月）～10日（金）

B地点：3号竪穴住居跡掘り下げ。Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ，出土状況実測，遺物取り上げ。2・3号竪穴住居跡実測。

C地点：Ⅳ層掘り下げ。集石1基検出。地形測量。

調査完了。仮道から現道へ付け替える。発掘用具を埋文センターへ運搬。

第4節 整理作業と、その組織

整理作業は埋文センターで平成16年4月から17年1月まで実施した。水洗いは終了していたため、注記から始めて、接合・復元，分類，実測・拓本，レイアウト，トレース，原稿執筆と進めた。この期間中，整理担当者がほかの遺跡の発掘調査や報告書作成にあたったため，作業はたびたび中断した。整理作業の組織は下記のとおりである。

事業主体： 鹿児島県土木部道路維持課（大隅土木事務所道路維持課）

調査主体： 鹿児島県教育委員会

企画調整： 鹿児島県教育庁文化財課

整理責任者： 県立埋蔵文化財センター 所 長 木原俊孝

整理企画者： 県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長 賞雅彰

〃 調査課 課長 新東晃一

〃 〃 課長補佐 立神次郎

〃 〃 主任文化財主事兼第一調査係長 池畑耕一

〃 〃 主任文化財主事 中村耕治

整理担当者： 〃 〃 主任文化財主事兼第一調査係長 池畑耕一

整理事務担当： 〃 総務課 総務係長 平野浩二

〃 〃 主 事 福山恵一郎

報告書作成検討委員会 平成17年2月4日 所長ほか 9名

報告書作成指導委員会 平成17年2月4日 調査課長ほか 2名

企画委員： 黒川忠広

八木澤一郎

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理・自然的環境

大崎町は鹿児島県の東南部に位置し、東西に約8km、南北に約18kmある。東は有明町、西は鹿屋市、肝属郡串良町・東串良町、北は大隅町・輝北町に接し、南東部は志布志湾に臨んでいる。

志布志湾は都井岬から串良川まで半円状となる湾で、砂浜と岩礁海岸が交互に連なる。大崎町は志布志町から東串良町まで約16kmにわたって続く幅1～1.5kmの砂丘海岸のほぼ中央部にあたり、菱田川河口から南西に弧状を描いて東串良町に至るまで約7kmの海岸線がある。

南北に細長い大崎町は、南部は志布志湾から北に向かって緩やかな勾配をなしてあがり、北部は標高150mから180mの丘陵地帯となっている。さらに北端部に至っては谷間の多い起伏の激しい地形を構成し、そのなかを菱田川、田原川、持留川が南流し、志布志湾に注いでいる。南部はこの3河川に沿って水田地帯が開け、その中間の台地は畑地を形成している。北部は大鳥川が水源を發し、蛇行しながら有明町へと流れており、山林、原野の多い地帯となっている。

地質は、シラス土壌の上に形成された黒色火山灰土壌が多く、また水田では泥炭層をなしている所がある。湾に面しているため、黒潮の影響を受けて温暖で、農作物の育成に適した風土である。

二子塚A遺跡は大崎町野方字二子塚に所在する。野方地区は町の北西部に位置しているが、なかでも二子塚はその南端にある。谷間の多い起伏のある地形で、谷間に囲まれた標高約160mの立小野台地上に存在し、東側500mの低地には持留川が流れている。谷間には小川や湧水が存在し、現在でも谷間のわずかな平地で水田を営んでいる。人びとの生活に必要な水を供給するには恵まれた地域であったと言える。それを示すように、この地域には当遺跡をはじめとして多くの遺跡が存在する。

第2節 歴史的環境

遺跡は、主に田原川、持留川、菱田川、大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って分布しているが、町内においては未だ旧石器時代の遺跡は確認されていない。

縄文時代 後期の遺跡がほとんどで、横内A遺跡・釜ヶ宇都遺跡・二子塚B遺跡など各地に所在している。早期の遺跡としては本遺跡の他に立山B遺跡、金丸城跡などがある。近くにある串良町益畑遺跡では早期前半の竪穴住居跡や連穴土坑等からなる集落が発見されている。

弥生時代 沢目遺跡は砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡で、多くの竪穴住居跡・土坑・柱穴等が発見された。また、入来Ⅰ・Ⅱ式土器、山ノ口Ⅰ・Ⅱ式土器などの土器や、鉄製品、軽石製加工品も出土した。その他に須玖式土器も出土し、九州北部方面との交流があったことが示唆される。下堀遺跡では中期の大型竪穴住居跡や周囲に柱穴のある方形土坑など集落を構成する遺構の一部が発見され、多くの土器などが発見された。

田原川・持留川沿いには弥生土器片や打製石斧の散布地が多く点在し、特に河口付近に当たる横瀬地域では大型甕形土器破片なども採集されている。

古墳時代 昭和18年に国指定史跡となった横瀬古墳は5世紀後半頃の大型前方後円墳で、県内では東串良町の唐仁大塚古墳に次いで2番目に大きい。測量調査・確認調査の結果、全長160m、墳長

132m, 前方部幅72m, 前方部長68m, 後円部径64m, くびれ部幅48mで、濠の幅は12m~23m, 深さは約1.5mであることがわかった。墳丘では円筒埴輪片・形象埴輪等が採集されており, 周囲に巡っている周濠内から須恵器片が出土し, これらは伽耶系陶質土器あるいは大阪府陶邑産須恵器と言われている。墳丘の高さは, 後円部が10.5m, 前方部が11.5mであるが, 後円部の頂上に凝灰岩の竪穴式石室が露呈していることから, 本来の後円部は現在より高かったとされている。明治35年の盗掘で, 腐食した直刀・鎧と勾玉類が出土し, 石室内は朱塗りであったと言われている。

神領古墳群では, 前方後円墳4基, 円墳9基, 地下式横穴墓7基が確認され, 6号墳は全長43m, 後円部径19m, 高さ3m, 前方部幅16m, 高さ2mの前方後円墳で, 後円部に竪穴式石室がある。主体部は花崗岩質板石6枚を使用した組合せ石棺で, 鉄剣, 鉄刀, 鏡等が副葬され, 日光鏡・仿製獣帯鏡各1面が採集されている。地下式横穴墓1号の主体は長方形, 家形の玄室で羨道部取り付けは妻入りである。副葬品として鉄剣1, 骨製筭1, イモガイ製貝釧2, 内向花文鏡1がある。地下式横穴墓5号では, イモガイ製貝釧が1対出土した。地下式横穴墓6号の玄室内には, 南側に歯が数本と北側に大腿骨が残存していたが, 副葬品は認められなかった。

下堀遺跡では地下式横穴墓5基が調査されている。いずれも平入りでドーム形の玄室である。鉄剣・刀子などが出土しているが, この中には大隅半島では初めての出土となる異形鉄器がある。本町における地下式横穴墓は他に飯隈地下式横穴墓群, 鷲塚地下式横穴墓群がある。

また, 本町に存在する高塚古墳は他に飯隈古墳群で9基, 田中古墳群で3基, 野方の後迫古墳群で2基ある。なお, 神領古墳群と飯隈古墳群では高塚古墳と地下式横穴墓が混在している。

沢目遺跡では古墳時代初頭の竪穴住居跡が7軒確認され, 布留式土器をまねして作られたと思われる土師器が出土した。

中世 大崎城, 胡麻ヶ崎城, 野卸城, 龍相城, 金丸城, 天守城, 梶谷城, 遠見ヶ丘など各地に山城が造られている。

金丸城の調査では14世紀半ばから15世紀のものと思われる青磁・白磁・染付や, 備前焼等の国内産陶器などが出土した。

山城以外では, 文献や集落の名称, 石碑, 五輪塔などで中世遺跡の所在, 遺構の配置を推測した資料があるが, 発掘調査はされていない。

近世 金丸城跡では, 中世から近世の遺構・遺物が発見されたが, 主に17世紀前半を中心とする遺物が多く出土した。遺構はおびただしい数の柱穴と建物7棟, 水溜土坑(大型6基, 小型2基), 炉跡16基, 溝状遺構が確認された。炉跡についてはいずれも意図的に壊され, 炉の周辺に炉壁を構成していたと思われる軽石や熱変粘土片が集中して出土している箇所も確認された。周辺で椀型鉄滓が出土していることから, この炉については鉄生産に関連する可能性も考えられる。遺物として染付, 唐津焼, 古伊万里, 瓦器のほか中国製陶磁器が出土した。

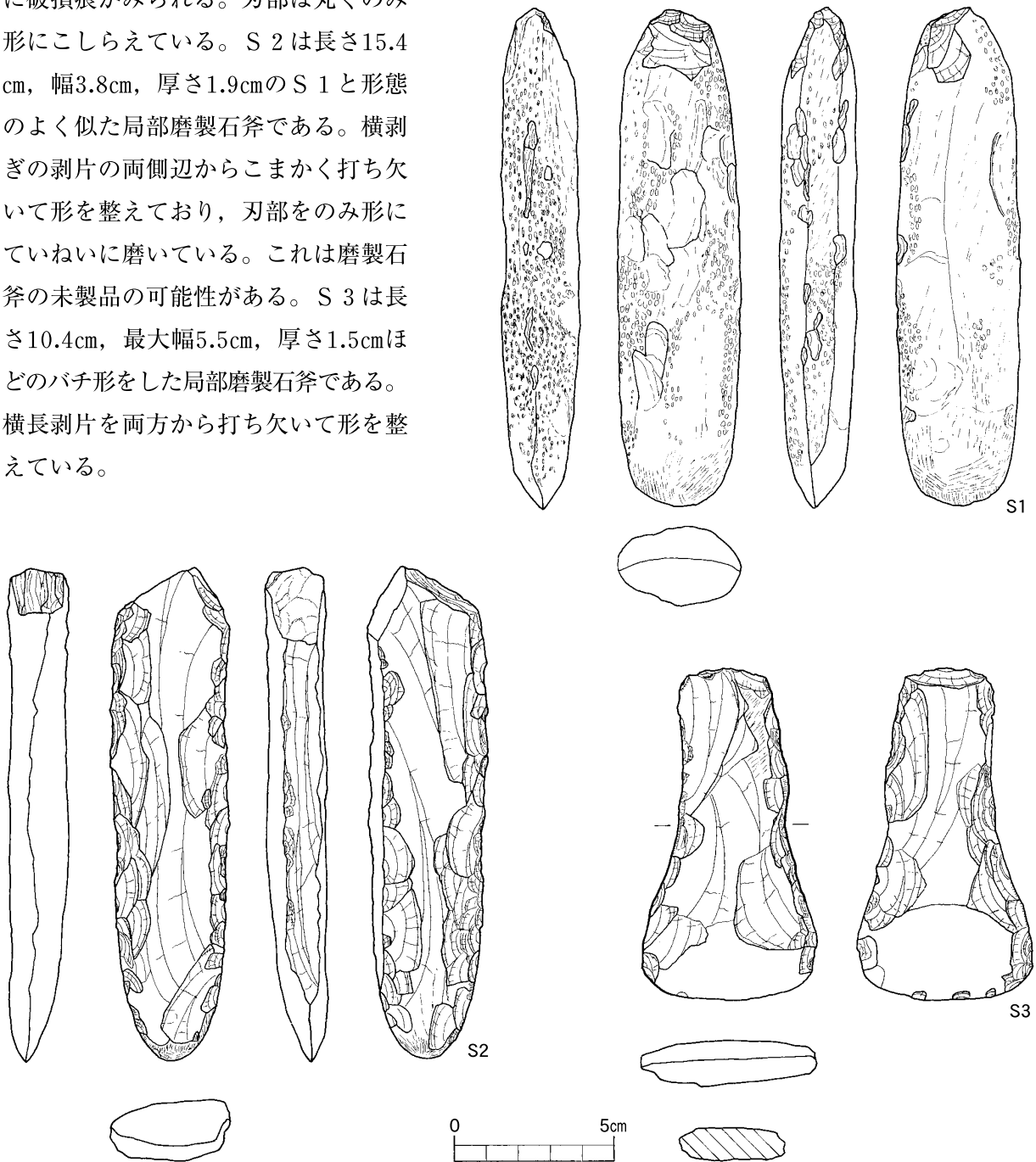
〈参考文献〉

- | | | | |
|----------|-------------------------------------|--------------------|------|
| 大崎町教育委員会 | 『神領地下式横穴群5号』 | 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) | 1988 |
| 大崎町教育委員会 | 『神領地下式横穴群6号』 | 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) | 1992 |
| 大崎町教育委員会 | 『立山B遺跡』 | 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) | 2001 |
| 池畑耕一 | 「南九州における横瀬古墳の特殊性」 | 『黎明館調査研究報告』第1集 | 1987 |
| 中村耕治他 | 「大隅地方の古墳調査-墳丘測量を中心として-曾於郡大崎町, 横瀬古墳」 | 『鹿児島考古』第23号 | 1989 |

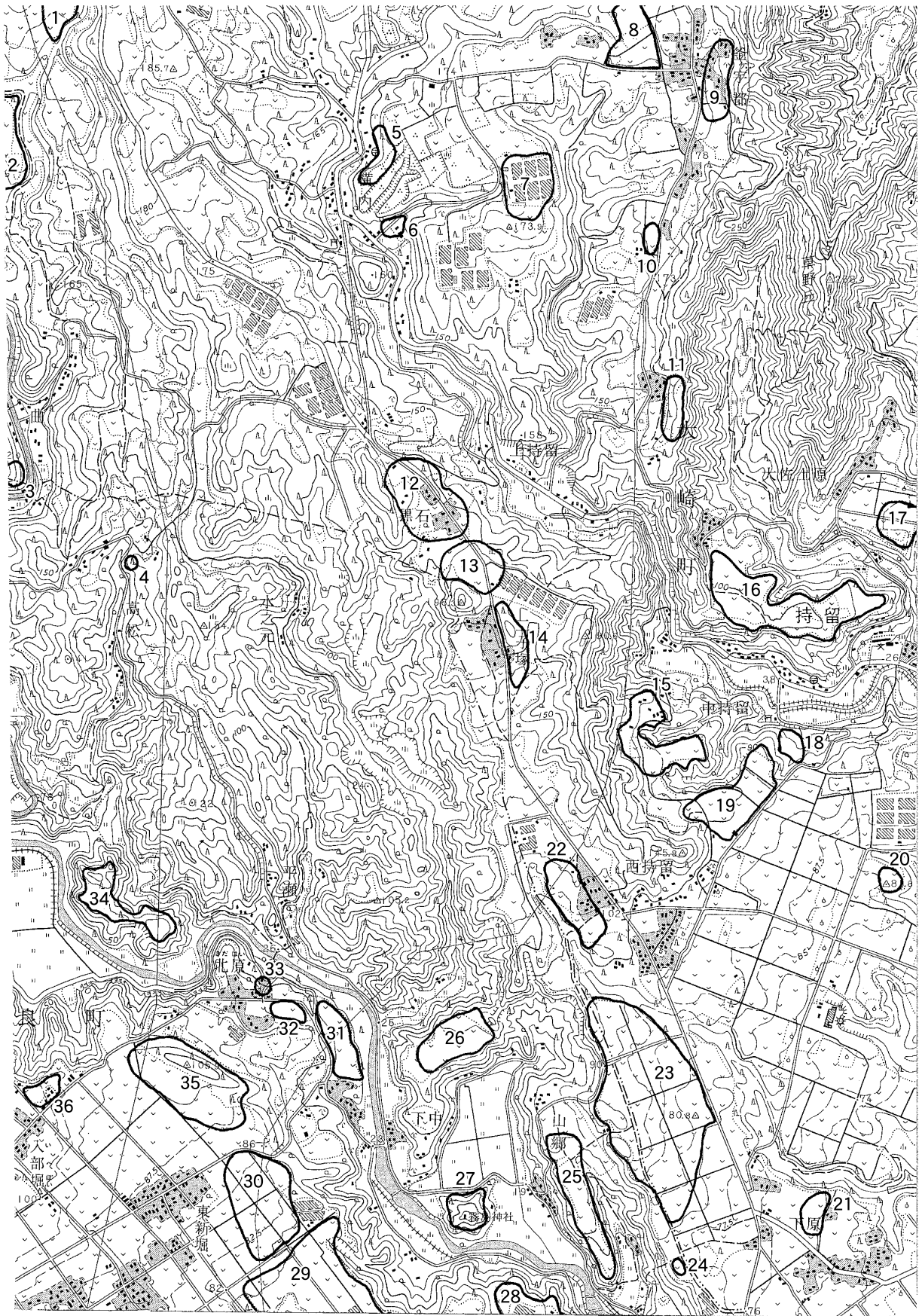
【参考資料】

ここで紹介する3点の磨製石斧・局部磨製石斧は二子塚A遺跡発掘調査の作業員として参加された岡元操氏が永年にわたって収集されたものの一部である。今回、氏の御好意によって、これらの資料は調査員の手を介して埋蔵文化財センターに寄贈された。残念ながら、これらの資料の採集地は不明であるが、これらを図化し、氏の御好意に答えるものである。

S1は長さ15.5cm、幅3.9cm、厚さ2.4cmの細長い磨製石斧である。敲打によって形を整え、全体をていねいに磨いている。頭部は一部に破損痕がみられる。刃部は丸くのみ形にこしらえている。S2は長さ15.4cm、幅3.8cm、厚さ1.9cmのS1と形態のよく似た局部磨製石斧である。横剥ぎの剥片の両側辺からこまかく打ち欠いて形を整えており、刃部をのみ形にていねいに磨いている。これは磨製石斧の未製品の可能性がある。S3は長さ10.4cm、最大幅5.5cm、厚さ1.5cmほどのバチ形をした局部磨製石斧である。横長剥片を両方から打ち欠いて形を整えている。



第1図 周辺採集の石器



第2図 周辺の遺跡（2万5千分の1図）

第1表 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	瀬ノ堀 B	大崎町野方瀬ノ堀	台地			
2	二松	大崎町野方瀬ノ堀	台地	弥生・歴史		
3	遠見ヶ丘	大崎町野方立小野	台地	中世		山城
4	高松	串良町細山田高松	台地	弥生	弥生土器・打製石斧	
5	横内 A	大崎町持留横内	台地	縄文(後)	指宿式・市来式土器・ 局部磨製石斧	
6	横内 B	大崎町持留横内	台地	弥生(中・後)	弥生土器・半磨製石斧	
7	中段	大崎町野方4440-1	台地	弥生	弥生土器	
8	前ノ段	大崎町野方4271-4	台地	弥生	弥生土器	
9	釜ヶ宇都	大崎町野方釜ヶ宇都	山腹緩斜面	縄文(後)	縄文土器・打製石斧	
10	宇都	大崎町野方	台地	弥生	弥生土器	
11	大佐土原	大崎町野方大佐土原	山腹緩斜面	弥生(中)	弥生土器・打製石斧	
12	二子塚 A	大崎町持留二子塚	台地	縄文・古墳	土器	住居跡, 本報告書
13	二子塚 B	大崎町持留二子塚	台地	縄文(後)	指宿式・市来式土器・ 打製石斧	住居跡
14	二子塚 C	大崎町持留二子塚	台地	弥生(中・後)	粘板岩の撥形石器	
15	榎山城跡	大崎町持留	台地	弥生・古墳	土器	
16	佐土原	大崎町野方4715-2	台地	縄文・古墳	土器	
17	大久保	大崎町持留73	台地	縄文	縄文土器	
18	川上神社	大崎町持留中持留	扇状地	縄文(後)	指宿式・市来式土器	
19	持留牧	大崎町持留牧・東尾ノ鼻	台地	縄文・古墳	縄文土器・磨石・ 成川式土器	
20	榎木段	大崎町永吉	台地	弥生・古墳	土器	
21	下原	大崎町持留	台地	縄文(後)・弥生・ 古墳	土器・土師器	
22	茶木	大崎町持留1406-2	台地	古墳	土器	
23	細山田段	大崎町持留下原 串良町下中京の塚	台地	弥生・古墳	弥生土器・打製石斧	円墳(京の塚古墳)
24	牧内古墳	東串良町岩弘	台地	古墳	円墳	
25	益畑	串良町細山田益畑	台地	縄文・弥生	縄文土器・弥生土器	住居跡・ 連穴土坑など
26	小牧	串良町細山田小牧	台地	弥生・古代	弥生土器・土師器	
27	ホンドンガマ	串良町細山田下中	洞穴	縄文	市来式土器・石匙・打製石斧	
28	石塚古墳	串良町有里石塚	台地	弥生・古墳	弥生土器・円墳(径5.5m)	
29	是ヶ迫	串良町細山田是ヶ迫	台地	縄文・弥生	縄文土器・弥生土器	
30	新堀	串良町細山田新堀	台地	縄文	縄文土器	
31	川久保	串良町細山田川久保	台地	弥生	弥生土器・打製石斧	
32	北原古墳群	串良町細山田北原	台地	古墳	円墳4基	
33	北原墓地逆修古石塔群	串良町細山田北原	台地	中世	宝塔・五輪塔・下僕像	
34	北原城跡	串良町細山田生栗須	丘陵	中世	山城	
35	アタゴ山	串良町細山田アタゴ山	台地	弥生・古墳	弥生土器・成川式土器・ 打製石斧	
36	入部堀	串良町細山田入部堀	台地	弥生・古墳		

第Ⅲ章 層 位

本遺跡はシラス台地上にあり、シラスの上には火山灰層を主体とする土が堆積している。基本層位は上のほうから次のようになっている。

I層の表土は現在の耕作土で、灰褐色砂質土である。II層はサラサラした黒色土で、古墳時代・古代の遺物包含層である。III層はアカホヤ火山灰層の一次堆積、二次堆積層である。最上部のIII a層は暗橙褐色をした二次堆積腐植土で、縄文時代晩期遺物の包含層である。III b層は二次堆積の明橙色火山灰土である。III c層は約6,400年前に鬼界カルデラから噴出した、いわゆるアカホヤ火山灰で黄橙色を呈している。IV層は茶褐色土で、縄文時代早期遺物の包含層である。V層は黒褐色土である。VI層は約12,000年前に桜島から噴出した黄色火山灰で、薩摩火山灰と呼ばれている。VII層は一般的にチョコ層とも呼ばれる暗赤褐色粘質土で、旧石器時代終末期から縄文時代草創期にかけての遺物包含層である。VIII層は淡褐色粘質土で、旧石器時代の遺物包含層である。IX層は二次シラスのローム層である。この下は厚いシラスになる。

調査地点は台地の中央部を縦断している道沿いであるため、主体的には平坦である。A地点ではI層が約30cmある。この下には黒色土があるが、ここでは硬化面や攪乱層の上にあることから、新しい時期のものであらうと思われる。アカホヤ混ざり黒褐色土はII層の可能性もある。III a層・III b層も途切れている。III c層もブロック状となっている。IV層は約50cm、V層は約30cmの厚さがある。VI層は約35cmと良く残っている。VII層はa、bの2層に分かれ、a層が黒褐色、b層が暗茶褐色となる。VIII層もa、bの2層に分かれ、a層がやや明るい。a層が約20cm、b層が約60cmある。

B地点はA地点に比べて表面が2 mほど下がっている。上部が現道によって50~70cmほど破壊されており、一部II層が残っているが、ほとんどはIII層から下のみ残っている。III層から下はほぼ水平に安定した堆積をしているが、部分的に樹痕によってこわされている。ここではVI層は残っていない。VI層は北側のみに残っているようである。

I	表 土 (耕作土)
II	黒色土
III a	暗橙褐色土
III b	明橙色火山灰土
III c	橙黄色火山灰土 (アカホヤ火山灰)
IV	茶褐色土
V	黒褐色土
VI	黄色火山灰土 (薩摩火山灰)
VII	暗赤褐色粘質土
VIII	淡褐色粘質土
IX	二次シラスローム

第 3 図 基本地層図

第Ⅳ章 発掘調査の概要

第1節 確認調査の概要

確認調査は工事予定地約400mを対象として、空地を利用し現道脇にトレンチを設定して行った。トレンチは道に沿って1.5～2m×3～6mほどの範囲で行ない、16か所について行った。原則的に北から1トレンチ、2トレンチ・・・として13トレンチまで設定したが、本調査の対象範囲を確定するため、7トレンチ・8トレンチ付近に3か所のトレンチを追加して調査した。確認調査の調査面積は約110㎡である。その結果、3・4・7・8・14・15トレンチで縄文時代早・晩期と、古墳時代の土器などが出土した。また、11～13トレンチでは縄文時代早期・古墳時代の土器が出土し、12トレンチでは竪穴住居跡も発見された。この調査によって、本調査の対象をしばり込み、1・2・5・6・9・10トレンチ付近を除く1,250㎡を調査対象とした。ここでは、本調査対象以外の場所について確認調査の概要を記したい。

1 1・2トレンチ

1トレンチ・2トレンチは調査対象地の北端、現道の西側に設定したトレンチで、1トレンチが1.5m×4m、2トレンチが2m×4mの広さである。

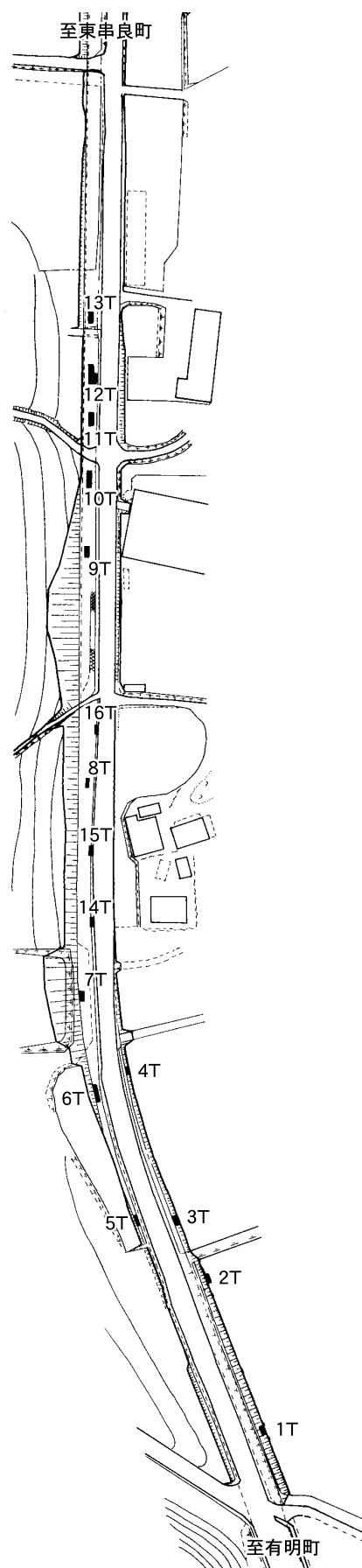
1トレンチでは表層から成川式土器の破片が15点出土しただけである。

2トレンチでは表層から薩摩焼破片9点、成川式土器破片135点、縄文土器（晩期底部）1点が出土しているが、包含層としては残っていない。

2 5・6トレンチ

5トレンチ・6トレンチも調査対象地の北端に近い、現道の東側に設定したトレンチで、5トレンチが1.5m×3m、6トレンチが2m×6mの広さである。

5トレンチは北から南へ向かって、やや下降している。アカホヤ層からは削平されており、耕作土の下はⅤ層（縄文時代早期の包含層である黒褐色土：約20cm）、Ⅵ層（ブロック状となった薩摩火山灰：10～30cm）、Ⅶ層（暗赤褐色粘質土、いわゆるチョコ層：15～20cm）、Ⅷ層（淡褐色粘質土：25cm以上）となる。出土品はない。



第5図 確認トレンチ配置図

6トレンチも北から南へ向かって下降しており、ここもV層から上は削平されている。VI層（ブロック状となった薩摩火山灰：20～30cm），VII層（暗赤褐色粘質土，いわゆるチョコ層：20～40cm），VIII層（淡褐色粘質土：約10cm），IX層（二次シラス：50cm以上）と続き，出土品はない。

3 9・10トレンチ

9トレンチ・10トレンチはB地点とC地点の間，現道の東側に設定したトレンチで，9トレンチが2m×3m，10トレンチが2m×4mの広さである。

9トレンチの周辺で成川式土器破片11点，縄文土器5点（後期3点，晚期2点）が採集されたが，包含層からは出土していない。

第2節 本調査の概要

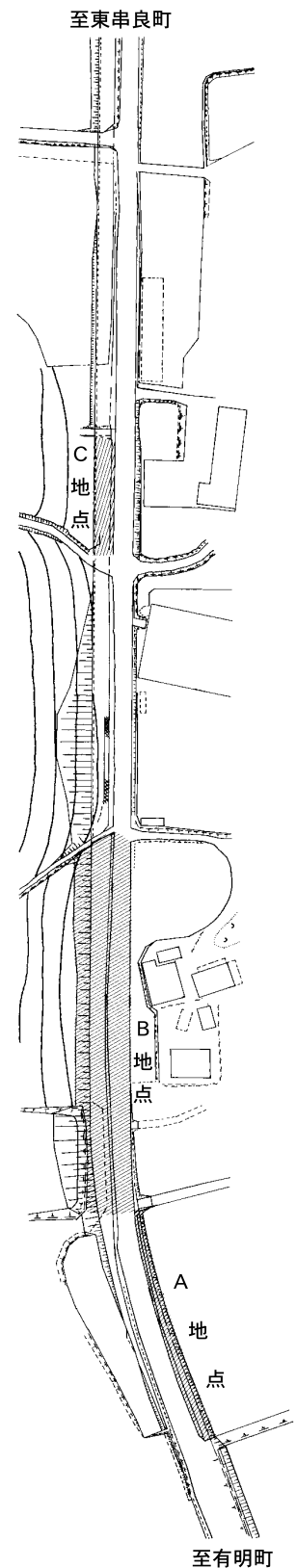
調査対象地は現道として使用されているため，前半はまず拡幅部分の調査を行い，11月15日から，大型車は通行止，残り車輛は片側交互通行として調査を行った。しかしながら，道路下については車輛等の通行に支障があったため，一部で調査のできなかった場所もあった。

調査は，調査区を3か所に分け，北側からA地点，B地点，C地点と呼んだ。確認トレンチと対応させれば，3・4トレンチがA地点，7・8トレンチ及び14～16トレンチがB地点，11～13トレンチがC地点となる。

A地点の現況は畑地で，現道の西側にあたる。幅が2.5～3m，長さ約520mの範囲を調査し，表層から成川式土器4点，III層から縄文土器（後期）1点が出ている。II層はほとんど削平されていたため，古墳時代・古代の包含層はなく，溝状遺構2条と古道3条のみが確認された。IV層において縄文時代早期の遺物が出土した。

B地点は山林と道路だったが，ここも植栽等によって地層が乱れていた。道路下において古墳時代の竪穴住居跡が2軒検出され，土器も多く出土した。また，IV層から縄文時代早期，VII層から旧石器時代の遺物が出土した。

C地点は山林であったが，地層の残存状況は良好で，古墳時代の竪穴住居跡が1軒検出された。土器も多く出土した。IV層では縄文時代早期の集石が1基検出され，遺物が出土した。VII層・VIII層では旧石器時代の遺物が出土した。



第6図 調査区域図

第3節 旧石器時代

B地点のⅦ層、C地点のⅦ・Ⅷ層で黒曜石・チャート・鉄石英製のフレイクが5点出土した。B地点ではチャート製のものが1点出土している。C地点では黒曜石（腰岳産1，日東産系2）製フレイク3点，鉄石英製フレイク1点が出土している。日東産系黒曜石製のうち1点は縦長で，自然面を残している。

第4節 縄文時代

各地点で縄文時代の遺物が出土し，C地点では集石が1基，B地点では土坑が1基検出された。

1. 遺構

1) 集石（第7図）

C地点のⅣ層で検出された。直径50cmの円形の中に，14個の角礫・円礫がまとまっている。小さいものは2cm四方しかなく，大きいもので10cm四方ある。掘り込みはなく，ほぼ平坦に置かれている。早期のものと思われる。

2) 土坑（第7図）

B地点のⅢ層で検出された上面の長さ150cm，幅70cm，底面の長さ125cm，幅60cm，深さ30cmほどの長方形をした浅い穴である。埋土はやや黒みがかった橙色火山灰土で，アカホヤの一次堆積物が混在している。底面で早期のものと思われる縄文土器小破片が1点出土した。内外面ともナデで仕上げ，外面が淡茶褐色，内面が灰黒褐色を呈している。5mm大の礫や，石英・茶色石などを含む砂質の胎土で，焼成度は普通である。掘り込み面や，埋土からして晩期の可能性がある。

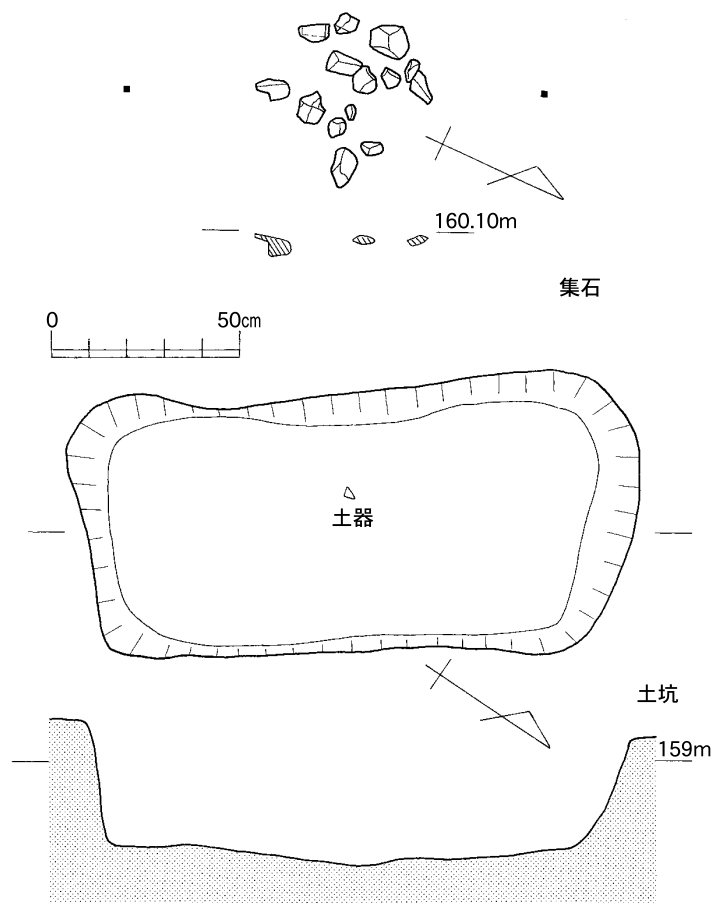
2. 出土遺物

早期と晩期の土器・石器がある。

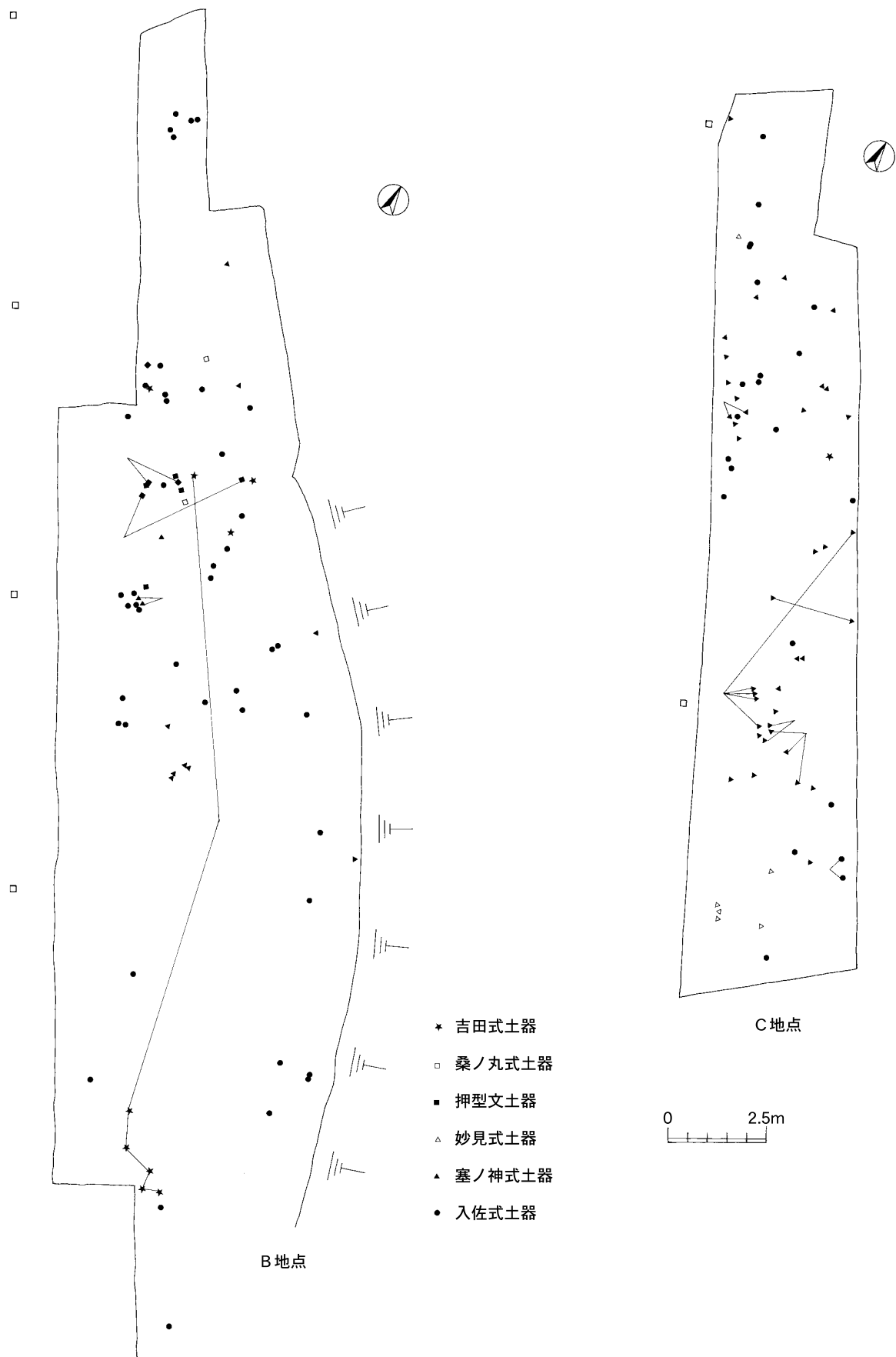
1) 早期の土器

① I類（吉田式土器：第9図1～6）

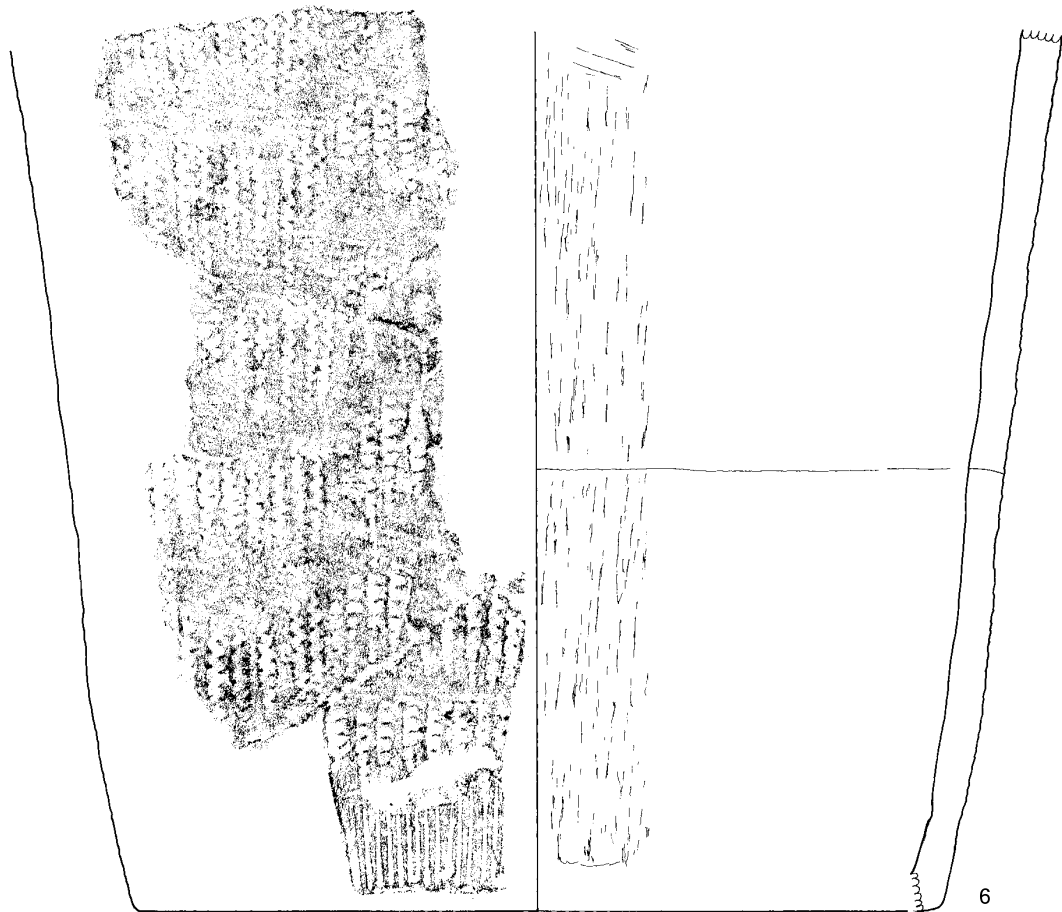
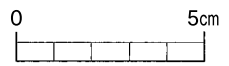
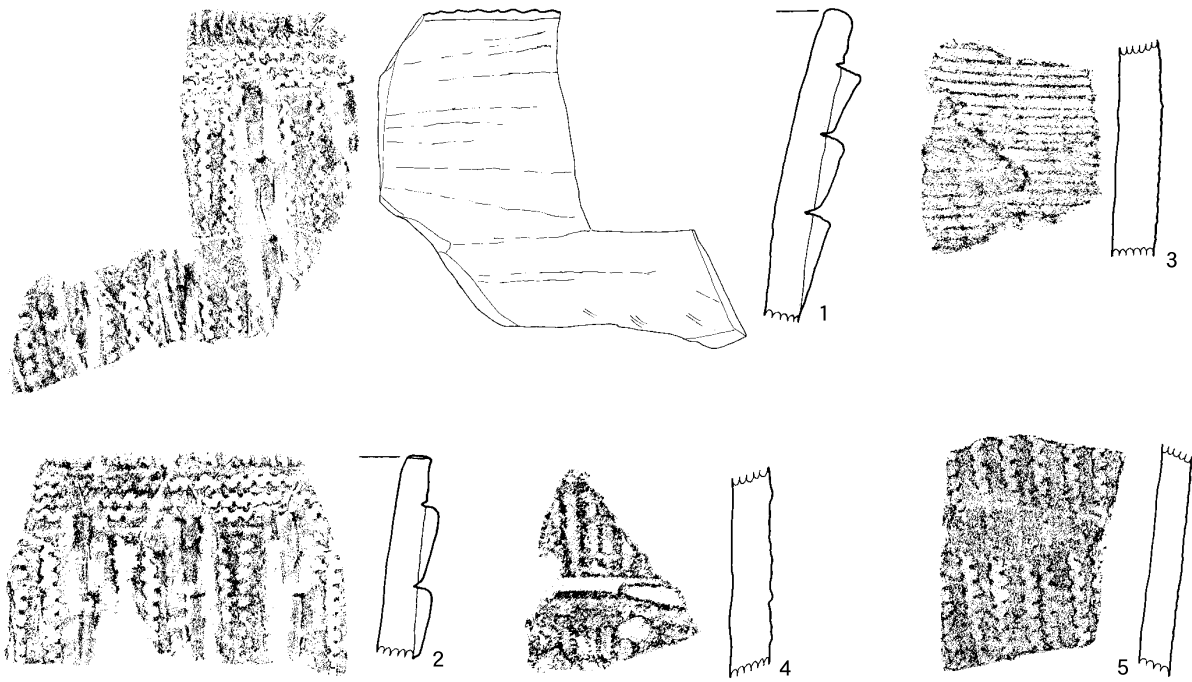
安定した平底からやや外へ開いてまっすぐ口縁部へ伸びる貝殻条痕文円筒土器である。口縁部はゆるやかに外反する。外面は二枚貝腹縁によって横方向の押引条痕文様が施されているが，部分的にはそのあとに横方向のヘラナデが施されている。3だけは押引きが間延びしているのか，整然とした横方向の貝殻条痕文のようにみえる。また，4は押引き文のあと幅の狭い横方向の貝殻条痕文がみられる。口縁部近くに



第7図 縄文時代の集石と土坑



第8図 縄文土器の分布状況



第9図 縄文土器(1)

はクサビ状の貼付突帯がみられるが、これは条痕の上に貼付けた帯状のものをヘラで三段に切って、周辺をていねいにナデている。口縁端部近くには貝殻の横方向押圧文が三段に施され、クサビ状突帯の間には縦方向の押圧文もみられる。口唇部には整然としたヘラ刻みが、底部端近くには縦方向のヘラ刻みが巡っている。内面はヘラナデで、上半部は横方向、下半部は下から上への縦方向である。内面には剥脱が目立つ。6の底部直径は21.5cmと大きく、底部はていねいにナデている。

色調は主として淡茶褐色を呈しているが、部分的に黄みがかったり、赤みがかった所もあり、一部にススも付着している。焼成度は、概して良質で堅い。胎土には火山ガラスが多くはいつており、他に角閃石・黄白色石・茶色石などの細礫がはいっている。中には4mm大のものもある。

I類の土器は10点出土しているが、3・4以外はいずれもB地点で出土している。これらは接合できないが、文様・色調・胎土が類似していることなどから同一個体の可能性がある。

②II類（石坂式土器：第10図7）

断面が矩形となる分厚い口縁部である。外面には4段以上にわたり、横方向に細かい刺突文がみられ、口唇部にはヘラによるていねいな横方向のヘラナデが施されている。内面は横方向のヘラナデで仕上げている。外面は黒褐色、内面は淡茶褐色を呈し、焼成度は普通である。胎土には白色石・火山ガラス・石英などのこまかい石を含んでいる。A地点で出土している。

③III類（桑ノ丸式土器：第10図8・9）

外面に3条～4条ほどの平行沈線がある円筒土器である。外面は8は浅い横方向の貝殻条痕、9はヘラナデで調整しており、内面は横方向のヘラナデで仕上げている。色調は淡茶褐色を呈しているが、8の外面はやや黄みがかかり、9の内面は黒灰色をしている。いずれもB地点で出土している。

④IV類（押型文土器：第10図10・11）

大粒の楕円形を横方向に転がした円筒形押型文土器で、10は底部近くの破片である。分厚い作りで、内面は縦あるいは斜方向のミガキに近いほどていねいなヘラナデで仕上げている。

淡茶褐色、あるいは茶褐色を呈しているが、10は黒斑の部分もある。焼成度は良好で、胎土にはこまかい火山ガラスが多く、他に白色石・茶色石などの細礫を多く含んでいるが、4～5mm大の小礫も含まれている。他に5点出土しているが、いずれもB地点のIV層で隣接して出土している。

⑤V類（妙見式土器：第10図12～19）

外へ強く外反する口縁部で、縄文を地文とし、口縁部には4条の貼付け突帯がある土器である。12・13は波状となる口縁部で、地文様として右下がりの斜行縄文が施され、その上に4条の三角突帯が貼付けられ、突帯の上には巻貝殻頂によって深い押圧文が施されている。突帯は波打っている。突帯のまわりはヘラ押しのためか縄文がややくずれてみえる。丸みを帯びた口唇部にはヘラによるこまかい押圧文が施される。内面はヘラによるていねいな横方向のヘラナデで仕上げている。

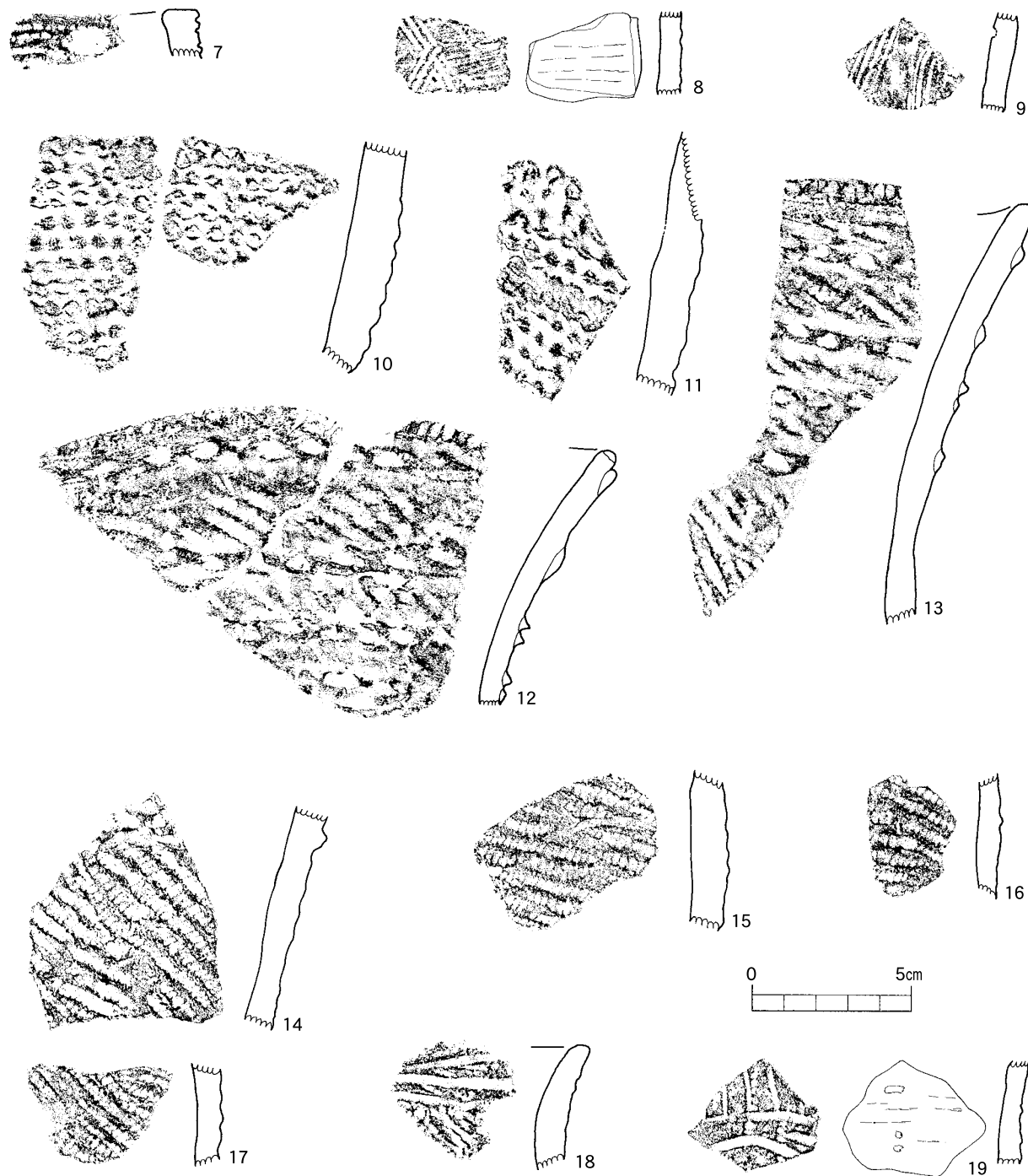
14～17は同様の文様だが、15の内面調整だけが縦方向であり、上半部は横方向、下半部は縦方向になる可能性がある。18は外反する口縁部で、外面は横あるいは右下がり斜方向の沈線が施されているが、縄文である可能性もある。内面はでこぼこしているが、ていねいなヘラナデ調整である。この胎土には角閃石が多い。19は縦方向の縄文の間に横方向の沈線を施し、その上部に縦方向の沈線を施している。内面はヘラケズリで仕上げている、これだけが胎土に金雲母を多く含んでいる。

色調は、ほとんど黄みがかった明茶褐色を呈しているが、12～14の外面と、16・17の内面は黒褐

色化し、18だけは灰褐色を呈している。焼成度は良い。胎土には火山ガラス・白色石・石英・茶色石・角閃石などのこまかい石が含まれているが、15は小石も多い粗い土を用いている。12～17はB地点の近い場所に出ており、文様・色調・胎土とも類似していることから同一個体と思われる。

⑥VI類（塞ノ神B式土器：第11図20）

分厚い作りで、外面がヘラによる斜方向ナデ、内面が二枚貝腹縁による斜方向条痕で仕上げられる。外面には2条～3条の沈線が2段にみられる。明茶褐色を呈し、外面にはススが付着している。焼成度は良好で、胎土には火山ガラス・白色石などの細かい礫を含んでいる。



第10図 縄文土器(2)

C地点で出土した。

⑦Ⅶ類（塞ノ神A式土器：第11図～第12図，21～43）

38点の破片が出ており，器形には深鉢と壺形の土器がある。

21は口縁直径が24cmで，頸部から口縁部へ強く広がる器形をしている。外面はていねいなヘラの横ナデで仕上げ，口縁部に2条の沈線が2段に巡っている。やや外へ広がっている胴部には，3列の縦方向撚糸文が施され，そのあと6～7条の沈線から成る楕円形文が4か所で接している。丸みをもっている口唇部にはヘラ刻みがみられる。内面は頸部で強く屈曲し，上半・下半ともヘラによる横方向のナデで仕上げる。22は口縁直径が23cmで，ゆるやかな波状口縁となる。矩形となる口唇部にはハの字状のヘラ刻みがある。外面は頸部から下には縦方向の撚糸文があり，口縁部に3条，頸部に3条の凹線がある。頸部の凹線の一番下の凹線は途中で上へ立ち上がる。内面調整はヘラによるていねいな横方向のナデである。口縁部は強く外反するもの（23・24）と，直に近く立ち上がるが内面がくの字に強く屈曲するもの（25）とがある。23は口唇部・口縁部とも無文である。24は口縁外面にヘラによる2条の沈線が，口唇部にヘラ押圧がみられる。25は口唇部にヘラ押圧文があり，口縁部に2条の凹線，頸部に2条の凹線があり，その下には撚糸文がある。26は頸部付近で，外面に3条の沈線・刺突文・2条の沈線がある。

胴部（27～33）は撚糸文と沈線文から成る。撚糸文は幅1cm足らずでいずれも縦方向である。沈線は撚糸文のあとに引かれ，4～7条ほどの横線が多いが，28は弧状になっている。33は沈線の上に刺突文がある。31は内側の底近くにこげ痕，外面にススが付着している。

胴部から底部へは丸みをもって移るが，撚糸文・沈線とも底部近くまで付けられる。32は上が5条，下が4条の並行沈線である。底部直径は10～12cmで，底部と胴部は貼付けによって積み上げ，内側に粘土を追加して補充している。底はヘラによるていねいなナデ仕上げで平らだが，あげ底のものもある。36～38の底部付近はていねいなヘラナデで仕上げられ，文様がない。32と35，36～38，39・40はそれぞれ同一個体と思われる。40の内側にはこげ痕が厚く付いている。

色調は明茶褐色あるいは乳茶褐色をしているが，外面は灰がかったり黄みがかったりするものもあり，内面も黒みがかったものもある。焼成度は軟質のものが多いが，24と31・34・37・38は良好で堅い。胎土は火山ガラス・角閃石が多く，黄白色石・茶色石・石英などもはいた砂質土である。

C地点で多く出土しているが，A・B地点でも出土している。

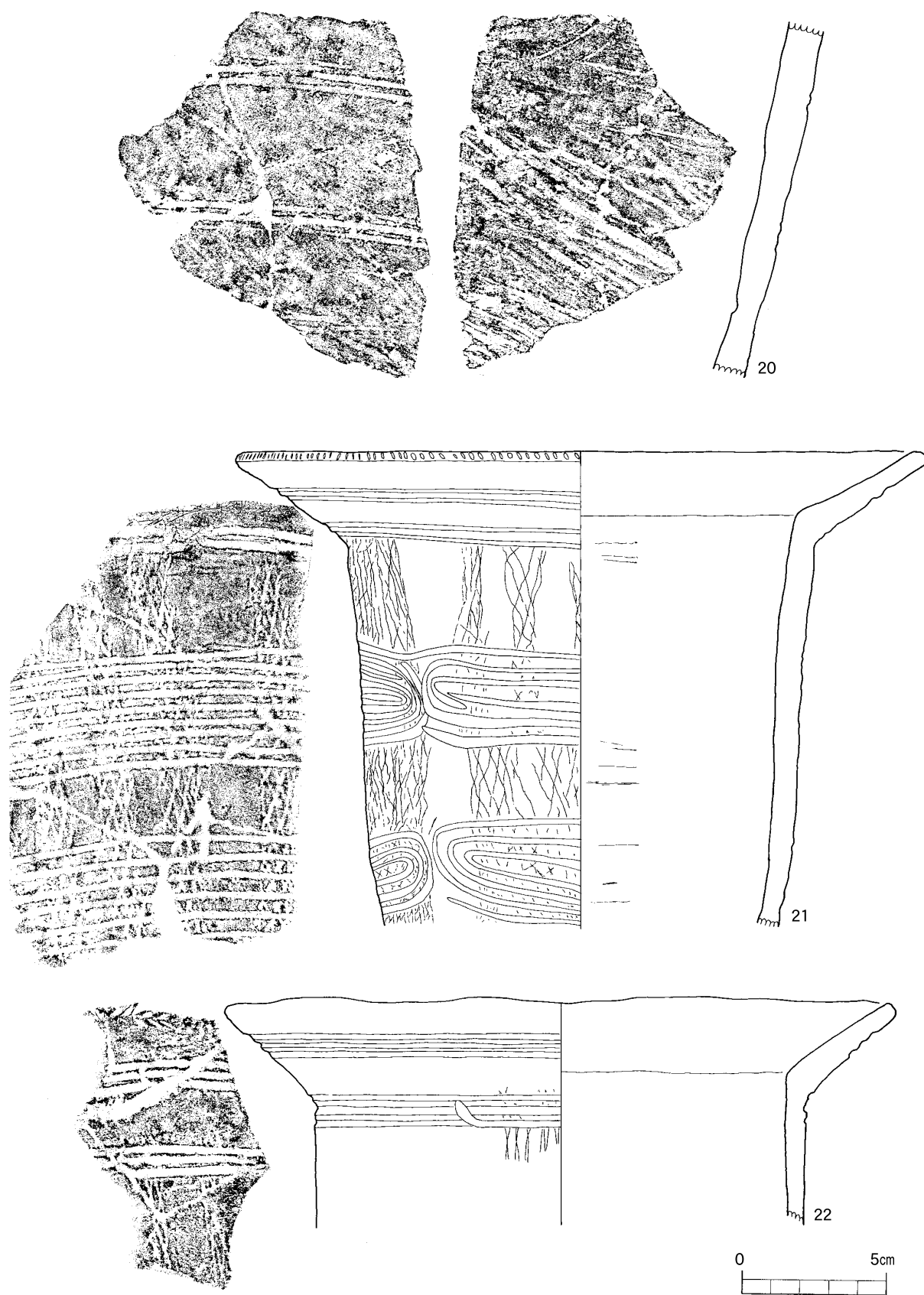
42・43は同一個体と思われるが，胴部がくびれて壺形を呈している。焼成度の良い硬質の土器だが，外面が横方向の貝殻条痕，内面がヘラナデで仕上げられ，雑な作りになっている。横方向あるいは弧状・縦方向の並行沈線と，二枚貝腹縁による押圧文の文様構成である。暗茶褐色を呈し，外にはススが付着している。白色石・茶色石・金雲母を多く含む砂質土を用いている。

B地点で出土している。

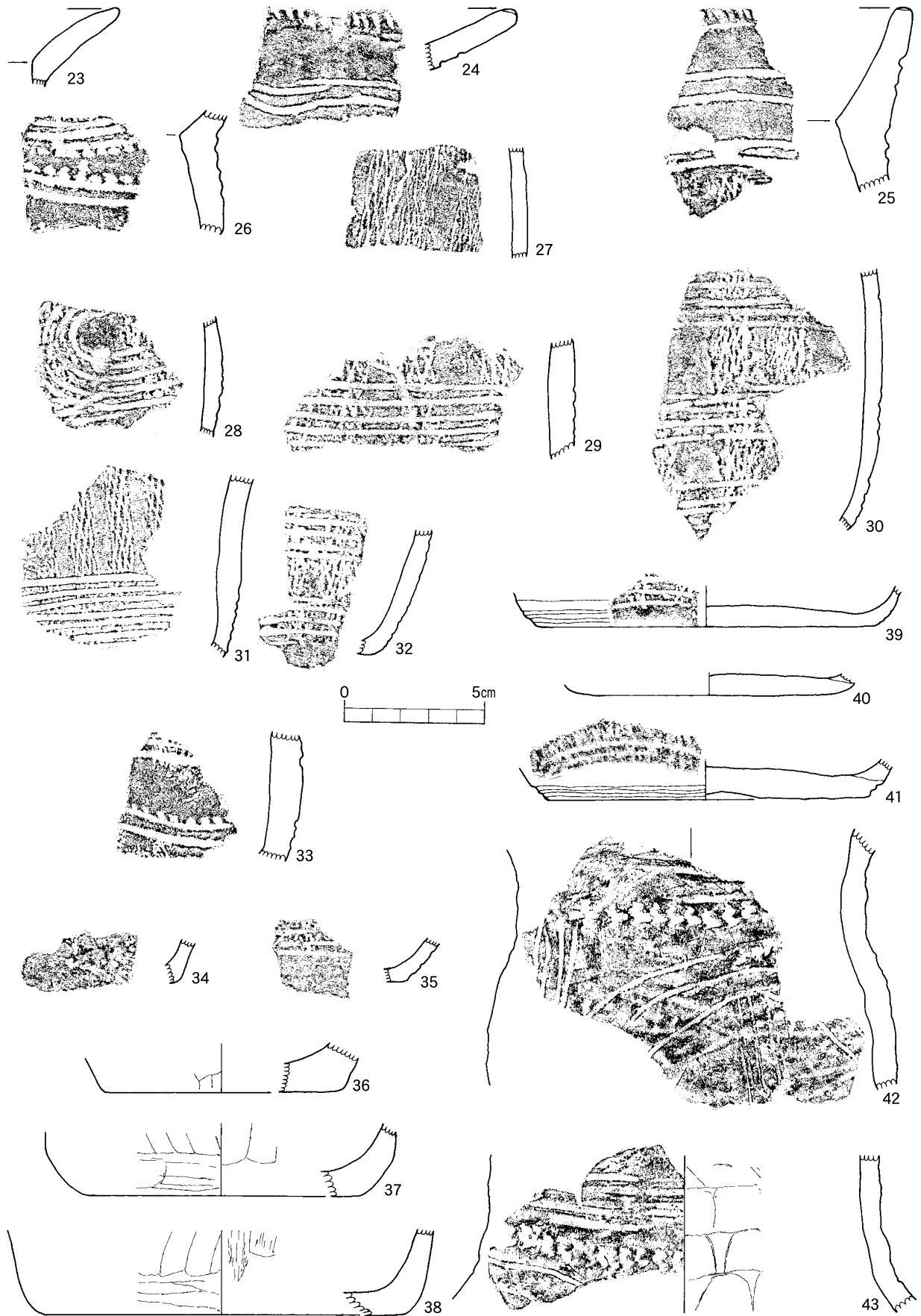
⑧Ⅷ類（その他の早期の土器：第13図44～46）

44は外面にヘラナデのあと2列の横方向短絡線を挟んで，上下に縦方向の深い短絡線が引かれる。内面は横方向のていねいなヘラナデで仕上げ，灰黒褐色を呈している。白色石・火山ガラス・金雲母・石英などのこまかい石の多い砂質土を用いている。

45は内外ともヘラナデで仕上げたあと，外面に3列の浅い横方向の短絡線と，縦方向の縄文間に



第11図 縄文土器(3)



第12図 縄文土器(4)

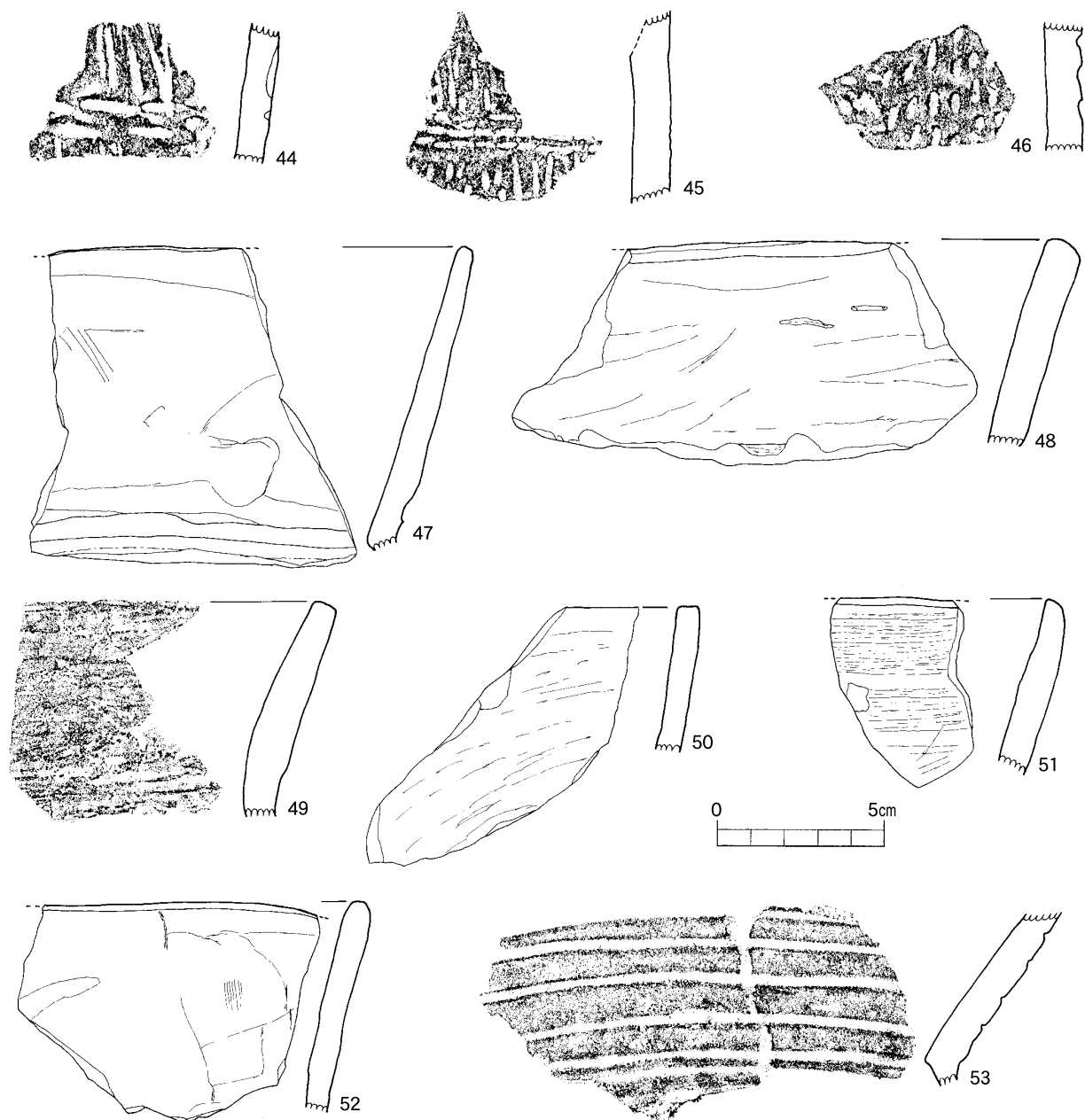
横方向の縄文がつけてある。内面はやや灰がかっているが、茶褐色を呈している。黄白色石・石英・茶色石・金雲母などのこまかい石を含む砂質土を用いている。

46は内外ともていねいなヘラナデで仕上げたあと、外面にヘラによる縦長の押圧文が施される。黄みがかった灰褐色を呈し、石英・茶色石などもあるが、白色石・金雲母を多く含む砂質土を用いている。

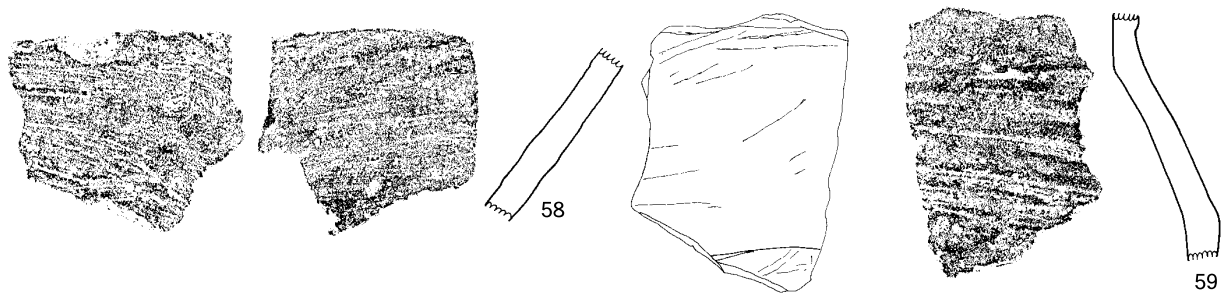
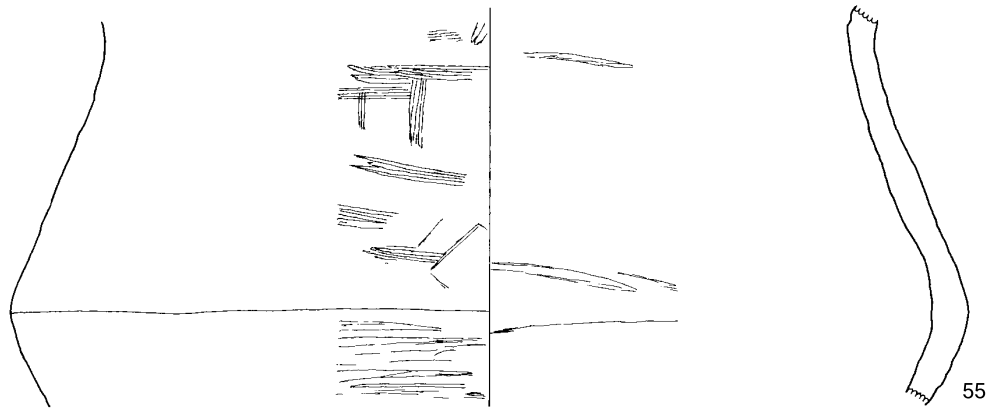
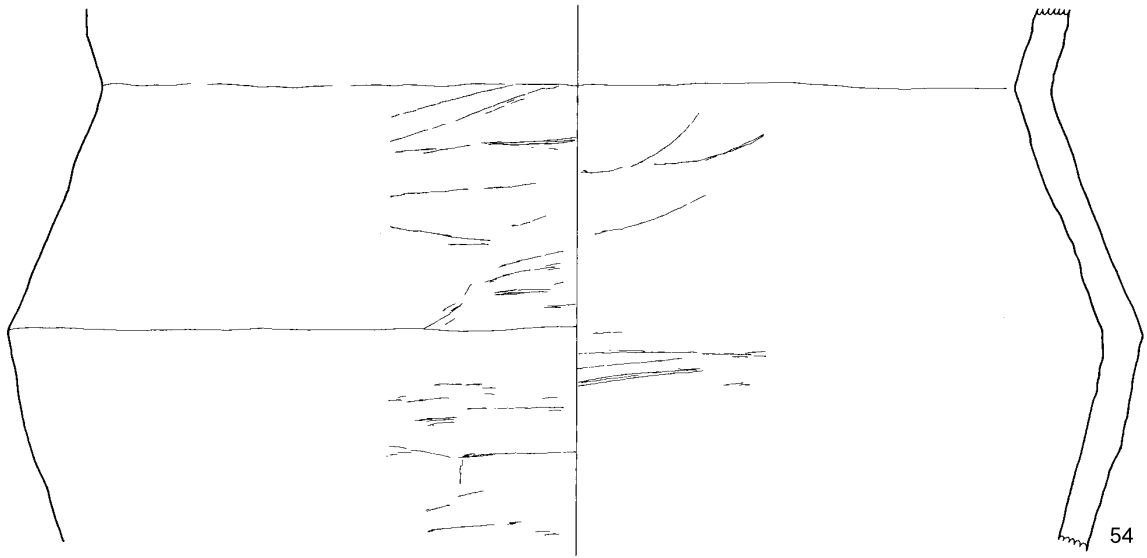
44～46はいずれも焼成度良好で、A地点で出土している。

2) 晩期の土器 (入佐式土器: 第13図～第18図, 47～97)

縄文土器の中ではもっとも多く267点(粗製土器152点, 精製土器115点)出土している。ナデ仕上げの深鉢となる粗製土器と、内外ともヘラミガキで仕上げ、薄い器厚の精製土器がある。器種には



第13図 縄文土器(5)



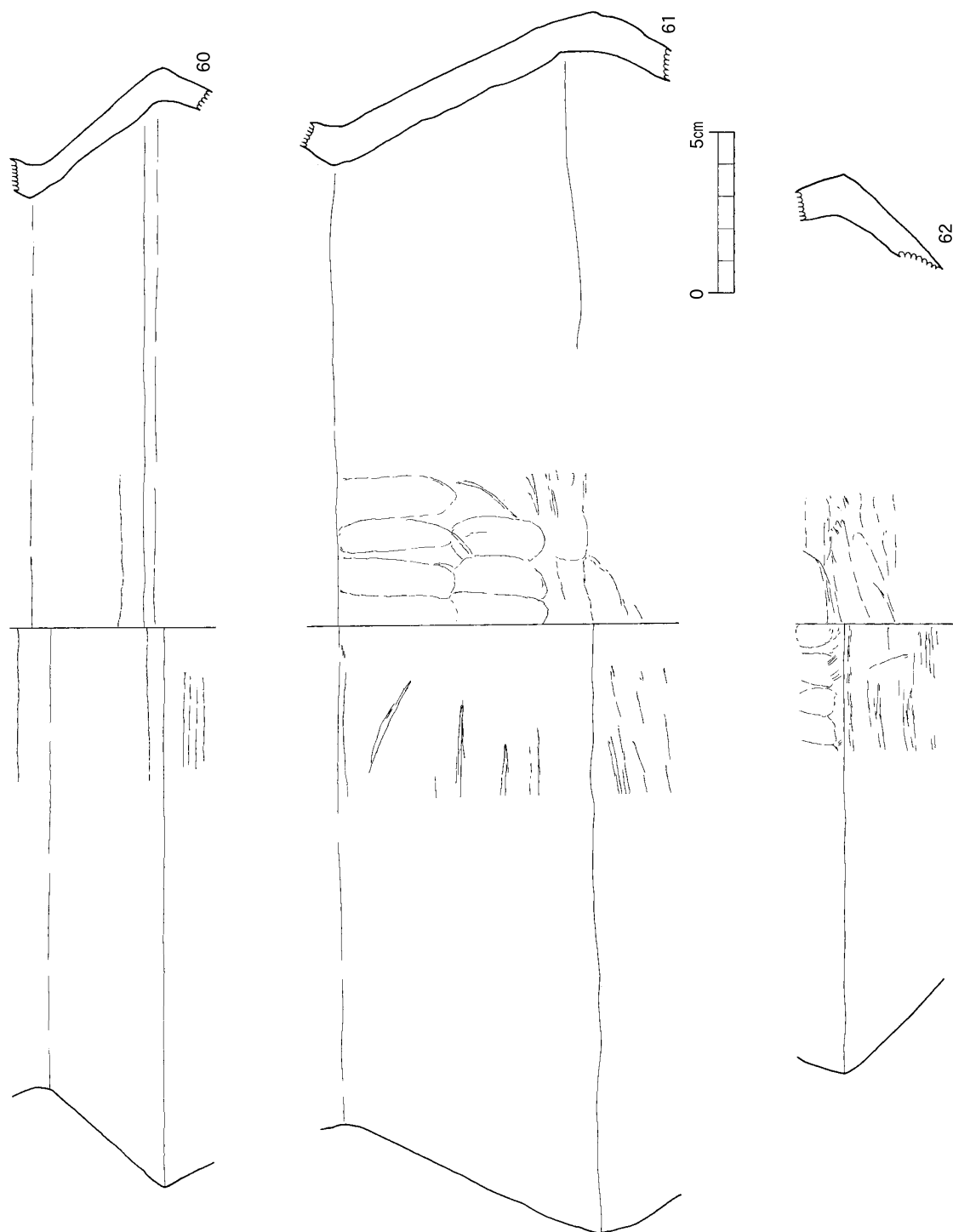
第14図 縄文土器(6)

深鉢・浅鉢・台付皿・まり形土器・小型壺形土器などがある。

①深鉢 (47~77)

口縁部が、くびれた頸部から外へまっすぐ開き、胴部は中ほどで逆くの字状に屈曲し、平底の底部へ至る器形をしている。

口縁部は長さが6~9cmと長く、端部は丸みをおびるものと、矩形のものがある。内面調整はていねいである。47は9cm以上あり、頸部近くに2条の凹線がある。48は分厚い作りで、口唇部はてい



第15図 縄文土器(7)

ねいにナデているため段をなしている。内外ともていねいなヘラナデで仕上げ、内面はミガキに近い。50の口縁端は矩形を呈している。51の端部は細くなっており、52とともにやや丸みをおびている。53の外面には5条以上のヘラ沈線がみられる。

頸部はくの字状に屈曲しており、内面ははっきりと稜をなしている。外面はゆるやかに曲がるものと、凹線のあるものがある。

胴部は外面の中ほどが稜をもって屈曲するものと、ゆるやかに曲がるものがある。

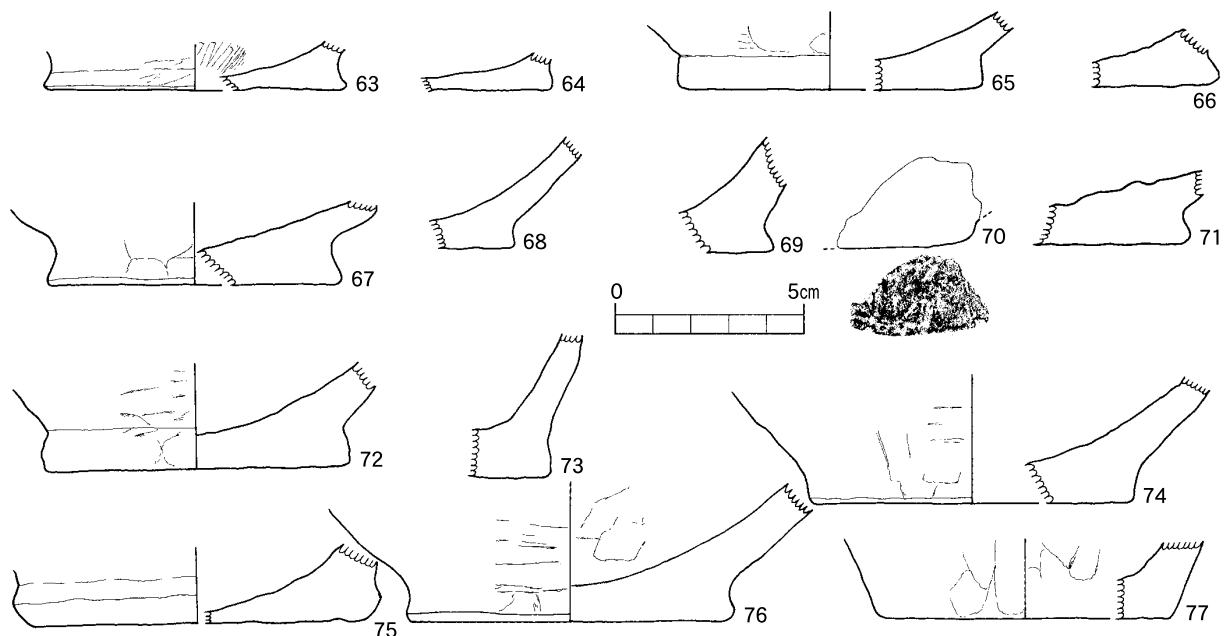
底部は外へ張り出すもの(63~76)と、すんなり底へ移るもの(77)とがある。外へ張り出すものも、65・68のように段をなさずに直におりるもの、72~74のように少しだけ張り出すもの、75のように端をナデているため段となるものがある。底径は8~9cmと小さい。底はヘラでていねいにナデている。65はミガキのようにていねいだが、でこぼこしている。70は白い粉が付いており、繊維らしき痕跡がみられる。

外面調整は横方向のヘラナデで仕上げるものが多いが、55・60の上半などはミガキに近い。52・62~65・74・76は縦方向のナデもみられる。57の下半はケズリに近い粗いナデであり、58は浅い条痕風である。内面調整は外面よりていねいなヘラナデで仕上げているが、横方向・縦方向の両方ある。48・50・53・57・59・63~65のようにミガキに近いもの、あるいはミガキのものも多く、58は逆に粗いナデである。

色調は明茶褐色のものが多いが、外面はススのため、内面はこげのため黒褐色を呈するものもある。胎土は火山ガラス・白色石・石英・角閃石などのこまかい石を多く含む砂質土を用いているが、47・48・60は金雲母を多量に含んでいる。

②浅鉢 (78~88, 95・97)

胴部なかほどで稜をもって屈曲し、口縁部は外反し、底は大きな丸底となる器形である。口縁部は内面に段を持ち、外面の口縁下に一条の凹線があるものである。79は口縁上部にこぶ状の貼付け突帯がある。口唇部が丸みをもつものが多いが、82は直に近い。83は口縁端がやや外反化している。



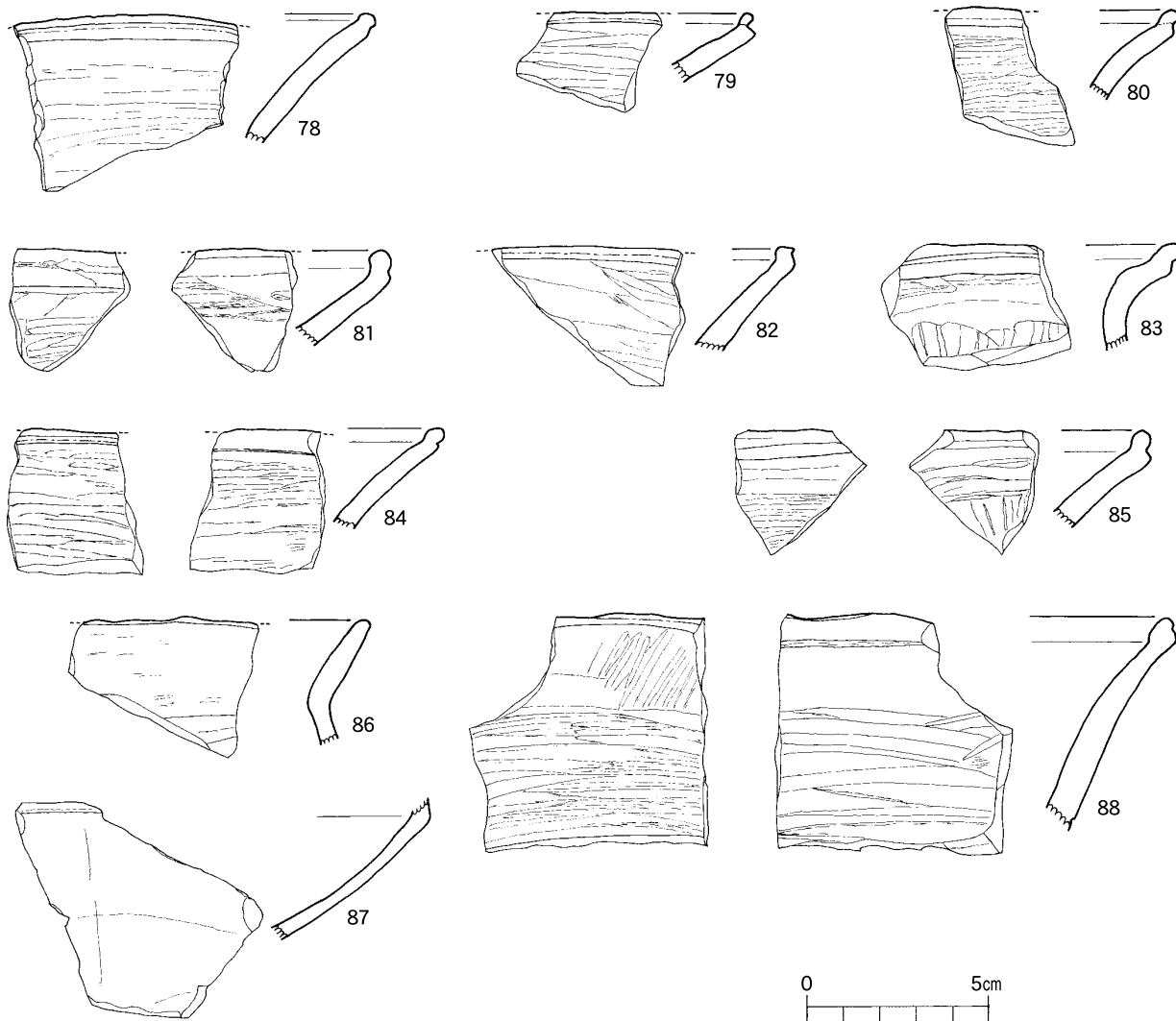
第16図 縄文土器(8)

84は外反度がゆるく、稜のやや上と思われる部分に沈線がみられる。86はくの字状に外反する口縁であり、器形が異なるかもしれない。95は口縁直径が25.5cmある波状口縁となるもので、他のものに比べ口縁がやや直に立ち上がり、頸部付近に凹線がある。97は屈曲部の直径が19cmあり、鋭い稜をもつ。これらはいずれも内外ともヘラミガキ調整で仕上げ、内外とも黒色を呈するものが多い。ただ、78の外表面は黄がかった明茶褐色、内面が灰がかった明茶褐色、80は茶がかった灰茶褐色、83と85は明茶褐色である。焼成度は概して良好で、胎土は火山ガラス・白色石・角閃石・茶色石・石英などこまかい礫を用いている。

③台付皿 (89~91)

口唇部に沈線のある浅い皿部のあるもので、89は口縁直径13cmの浅い皿部である。91は内面途中に段落ちがあることから、90の段みたいになるものと思われる。浅い坏部に強く外反する口縁のある高坏状となる器形であろうと思われるが脚部は不明である。89と91は同一個体の可能性がある。

色調は89と91が黒色、90が外面明茶褐色、内面暗茶褐色で、90の内面にはこげが付着している。焼成度は良く、石英・白色石・角閃石・火山ガラスなどのこまかい石を含んでいる。



第17図 縄文土器(9)

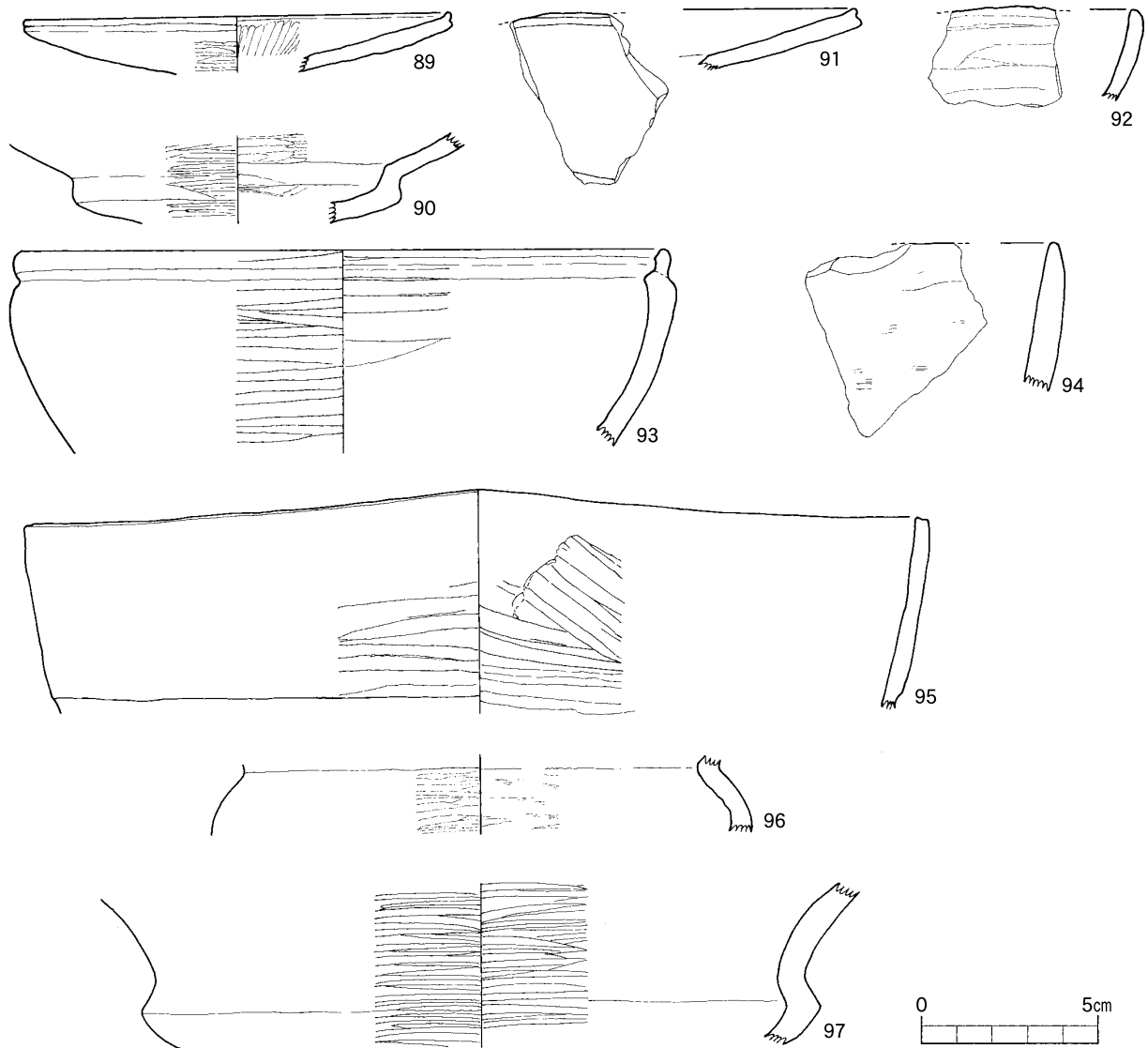
④まり形土器 (92~94)

92は内湾する器形を呈している。内外ともヘラによる横方向のミガキ調整である。93は口縁直径18cmと大型のものである。口縁部近くは外面に凹線があり、内面はくぼんで段をもつ。内外ともヘラによるていねいなミガキ調整である。94は外へ開きまっすぐ伸びる器形を呈し、端部は細くなっている。内外ともヘラによる横方向のナデ調整だが、内面はていねいにナデている。

色調は92が茶褐色（外は黄みがかり、内は赤みがかかる）、93が明茶褐色（外はやや赤みをおびている）、94が黒褐色である。93の外面にはススが付着している。焼成度はいずれも良好である。胎土は火山ガラス・石英・白色石などを含む細砂質土であるが、93には銀雲母が多く含まれ、94には金雲母が少量はいつている。

⑤小型壺形土器 (96)

頸部でくびれ、外へ開きながら口縁へ伸び、胴部は丸みをおびる器形である。頸部直径が13.5cmある。外面と口縁の内面はヘラによるミガキ、胴部内面はヘラによるナデ調整である。黒色を呈し、焼成度は良い。石英・白色石なども含むが、火山ガラスの多い砂質の胎土である。



第18図 縄文土器(10)

第2表 縄文時代晩期の土器観察表

図番	器種	出土区	口径	高さ	底径	外面の調整	内面の調整	色調	焼成度	胎土
47	深鉢	C				ヘラ横ナデ 2条の凹線	ていねいなヘラ横ナデ	外：茶褐色（スで黒褐色） 内：黄みがかった淡茶褐色	普通	金雲母が非常に多い、黄白色石、火山ガラスも含む
48	深鉢	B				ていねいなヘラ横ナデ	ミガキに近いていねいなヘラ横ナデ	淡茶褐色	良	金雲母、白色石、黄白色石を含む砂質土
49	深鉢	B				浅い横条痕	ていねいなヘラ横ナデ	黄みがかった淡茶褐色（外は黒褐色）	普通	角閃石、石英、黄白色石など細砂粒の多い砂質土
50	深鉢	B				ヘラ横ナデ（浅い条痕）	ミガキに近いていねいなヘラ横ナデ	外：明茶褐色（外にスス） 内：黄みがかった暗灰褐色	普通	火山ガラス、角閃石、白色石 6mm大の石
51	深鉢	B				細かいヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	黄灰色（外はスス）	普通	火山ガラス、角閃石、白色石、石英の多い細かい土
52	深鉢	B				ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	茶褐色（内のほとんど外は黒褐色）	普通	白色石、黄白色石、火山ガラス 4mm大あり、割に粗い
53	深鉢	B				ヘラ横ナデのあと5条以上のヘラ沈線	ミガキに近いていねいなヘラ横ナデ	明茶褐色（外はやや黒っぽい）	良	白色石、火山ガラス、石英、茶色石
54	深鉢	C				ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	外：ススが付着し黒褐色 内：暗黄茶褐色	普通	火山ガラス、白色石、角閃石、石英などの細砂質 5mm大の小石
55	深鉢	B				ミガキに近いていねいなヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	外：乳茶褐色（黒色部分多、黄白色） 内：黄白色	普通	石英、白色石、角閃石多 砂粒多 4mm大の礫も多
56	深鉢	C				ていねいなヘラ横ナデ 横方向ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	外：黄白色（スス付着） 内：灰黒褐色	普通	火山ガラス、石英を含む砂質土
57	深鉢	C				ていねいなヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	外：黄茶褐色 内：黒褐色	普通	白色石、石英、火山ガラスの多い砂質土 5mm大の小石あり
58	深鉢	C				浅い条痕	条痕に近い粗いヘラ横ナデ	淡茶褐色（内は黒っぽい）	普通	火山ガラス、白色石、石英の多い細かい石
59	深鉢	B				ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	外：淡茶褐色、黒褐色 内：茶褐色	良	黄白色石、火山ガラス、石英 4mm大の石あり
60	深鉢	C				横方向ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色（黒斑多）	良	金雲母を多量に含む 他に石英、白色石、茶色石などの微石が多
61	深鉢	B				ていねいな横ナデ	ヘラ横ナデ	外：茶褐色（一部にスス付着） 内：黄みがかった茶褐色	悪	白色石、角閃石、石英、茶色石など小石多
62	深鉢	C				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	外：茶褐色 内：黄みがかった淡茶褐色	普通	火山ガラス、白色石、角閃石、茶色石多 4mm大の石多
63	深鉢	C		8.0cm		ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラミガキ	淡茶褐色	良	火山ガラス、角閃石の多い細かい石
64	深鉢	C				ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラミガキ	淡茶褐色	良	火山ガラス、角閃石の多い細かい石
65	深鉢	B		8.1cm		ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラミガキ	茶褐色	良	白色石、火山ガラス、角閃石の多い砂質土
66	深鉢	B				ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなナデ	茶褐色	良	茶色石、火山ガラス、白色石、石英などの細かい石
67	深鉢	B		7.8cm		ヘラ横ナデ	磨滅	黄みがかった明茶褐色	悪	黄白色石、火山ガラス、石英などの砂粒多
68	深鉢	C				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	外：明茶褐色 内：黒灰色	良	角閃石、金雲母、白色石の細かい礫
69	深鉢	C				ヘラ横ナデ	ていねいなナデ	外：灰がかった黄褐色 内：黄みがかった黒褐色	悪	火山ガラス、石英、白色石、角閃石の多い砂質土
70	深鉢	C				ヘラ横ナデ		灰がかった茶褐色	普通	茶色石、白色石、石英の入った土
71	深鉢	C				ていねいなヘラ横ナデ	ほとんど剥離	暗茶褐色	良	石英、火山ガラス、黄白色石、角閃石などの小石多
72	深鉢	B		8.2cm		ヘラ横ナデ	ていねいなナデ	外：淡茶褐色 内：黄みがかった灰褐色	普通	白色石、角閃石、火山ガラスなどの砂粒多
73	深鉢	C				ヘラ横ナデ	ていねいなナデ	外：黄褐色 内：淡茶褐色	悪	火山ガラス、白色石の多い砂質土
74	深鉢	B		8.6cm		ヘラ縦ナデ	ていねいなヘラ縦ナデ	茶褐色	普通	火山ガラス、白色石、石英の細かい石
75	深鉢	B		9.0cm		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	普通	火山ガラス、角閃石
76	深鉢	C		8.6cm		ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	暗茶褐色	普通	金雲母の非常に多い砂質土、白色石、石英なども多 茶色石、黄白色石
77	深鉢	C		7.6cm		ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	外：黄茶褐色 内：灰茶褐色	普通	灰色石、火山ガラス、白色石、石英などの小石
78	浅鉢	B				ヘラ横ミガキ	ヘラ斜方向ミガキ	外：黄みがかった明茶褐色 内：灰がかった明茶褐色	良	白色石、火山ガラス、角閃石の多い砂質土
79	浅鉢	C				ヘラミガキ	ヘラ横ミガキ	黒色	良	火山ガラス、白色石の多い細かい土
80	浅鉢	C				ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶がかった灰褐色	良	白色石、火山ガラス、茶色石の細かい石
81	浅鉢	B				ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色	良	火山ガラス、白色石などの細かい石
82	浅鉢	C				ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色（内はやや茶がかかる）	良	火山ガラス、角閃石、白色石の細かい土
83	浅鉢	B				ヘラミガキ	ていねいなヘラ横ナデ	明茶褐色	良	白色石、火山ガラス、茶色石などの細かい土
84	浅鉢	C				ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒褐色	良	白色石、石英などの細かい石
85	浅鉢	C				ヘラミガキ	ヘラミガキ	明茶褐色（外はやや灰がかかる）	良	火山ガラス、黄白色石
86	浅鉢	B				ヘラ横ミガキ	ヘラ横ミガキ	黒みがかった淡茶褐色	良	火山ガラス、白色石の多い細かい土
87	浅鉢	C				ていねいなヘラミガキ	ヘラ横ミガキ	外：茶がかった灰褐色 内：黒色	良	火山ガラス、白色石
88	浅鉢	B				ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色	良	白色石、火山ガラスなどの細かい礫
89	台付皿	C	12.2cm			ヘラ横ミガキ	ヘラ縦ミガキ	黒色	良	火山ガラス、白色石などの細かい礫
90	台付皿	B				ヘラ横ミガキ	ヘラ横ミガキ	外：明茶褐色 内：暗茶褐色（こげ付着）	良	石英、角閃石などの細かい石
91	台付皿	C				ヘラ横ミガキ	ヘラミガキ	黒色	良	火山ガラス、白色石などの細かい礫
92	まり形土器	C				ヘラ横ミガキ	ヘラ横ミガキ	外：黄みがかった茶褐色 内：茶褐色	良	火山ガラス、黄白色石などの細かい土
93	まり形土器	B	18.5cm			ていねいなヘラミガキ	ていねいなヘラミガキ	明茶褐色（外はやや赤み）	良	銀雲母多 白色石、火山ガラス
94	浅鉢	C				ヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	黒褐色	良	火山ガラス、石英などの細石、金雲母少
95	浅鉢	C	12.8cm			ヘラミガキ	ていねいなヘラミガキ	外：やや茶がかった黒 内：黒色	良	火山ガラス、白色石を含む細かい土
96	小壺	C				ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色	良	火山ガラス多、石英、白色石アリ
97	浅鉢					ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色	良	火山ガラス、白色石、石英の微粒多い砂質土

3) 石器

石器には石鏃・石匙・抉入石器・スクレイパー・磨製石斧・打製石斧・砥石・礫器・敲石・磨石・石皿などがある。他に加工痕のあるフレイクや、石核もある。

①石鏃 (S 4～S 6)

えぐりのある打製石鏃が3点出土している。S 4 (以下Sを略す)は正三角形に近い形をし、えぐりも三角形を呈す。周辺からこまかい剥離を施こし、一側辺に新しいきずがみられる。5・6は先端と、脚の一部が欠けている鋏形鏃である。

②石匙 (S 7)

横長の石匙で、刃部は弯曲しており、周囲はこまかい剥離調整がみられる。整然とした三角形を呈し、えぐりが深いためにつまみはぎぼし状をしている。

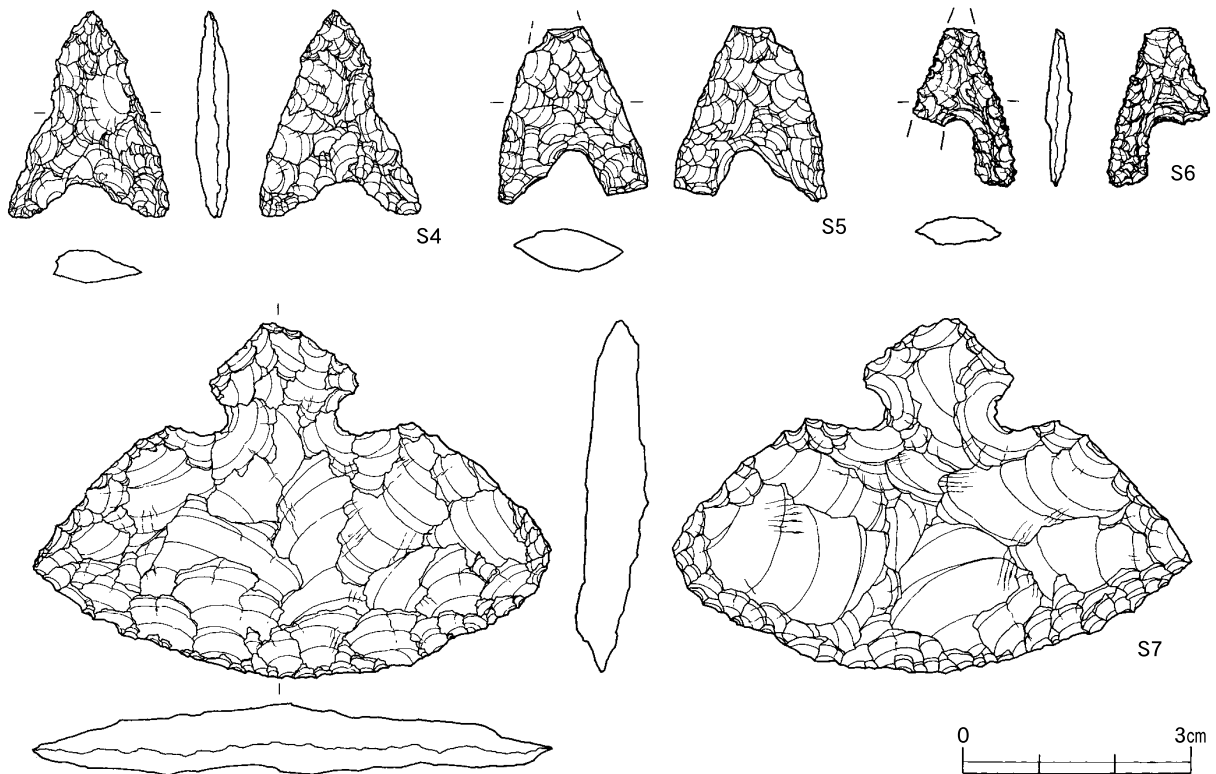
③抉入石器 (S 8)

正方形に近い扁平な剥片の3か所に片面から抉りを入れた石器で、一部には自然面を残している。

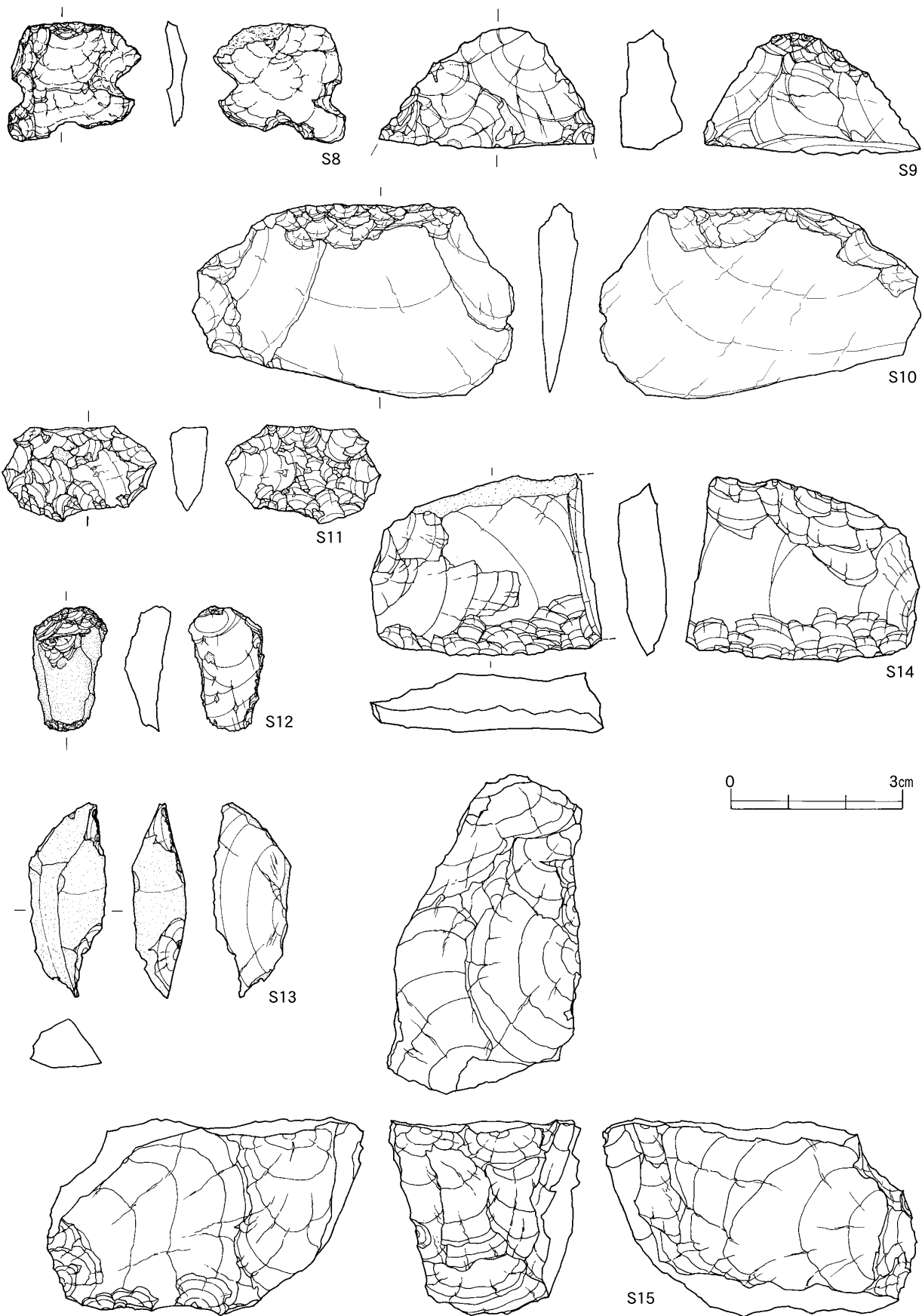
④スクレイパー (S 9・11～14・16～20)

小型のもの (9・11～14) と大型のもの (16～20) とがある。

9は分厚い頭部のみ破片で、頂部と両側辺の片側に調整痕がみられる。11は周辺からこまかい調整をし分厚い横長のものに作っている。12は片面に自然面を残す分厚い縦長剥片の上下端に加工痕がみられる。側辺にも一部加工痕がみられる。13は片面に自然面を残すナイフ形の横剥ぎ剥片を縦に置き、この右上と右下の2か所に加工痕がみられる。14は横長の分厚いスクレイパーで、一端を欠いているためはっきりしないが、石匙の可能性もある。縦長剥片を横向きに用い、刃部は、両



第19図 石器(1)



第20図 石器(2)

側からこまかく打ち欠いているが、側端は大剥離のままである。背部には自然面を残している。

16は扁平な頭部のみの破片で、丸くなった頂部と両側辺に調整痕がある。17は三角形をした扁平な剥片の側辺に両側から剥離を加えて形を整え、刃部の片側には多くの使用痕がみられる。18は頭部とみられる分厚い剥片で、三日月形をしている。側辺に調整痕がみられるものの、全体的に摩滅が激しい。19は頭部と先端部が欠けているが、えぐりのある形態で、側辺に両側からこまかい調整をしている。20は大形の横長剥片を利用したものである。基部は両側から大きく調整し、刃部に刃こぼれがみられる。

⑤加工痕のある剥片 (S10)

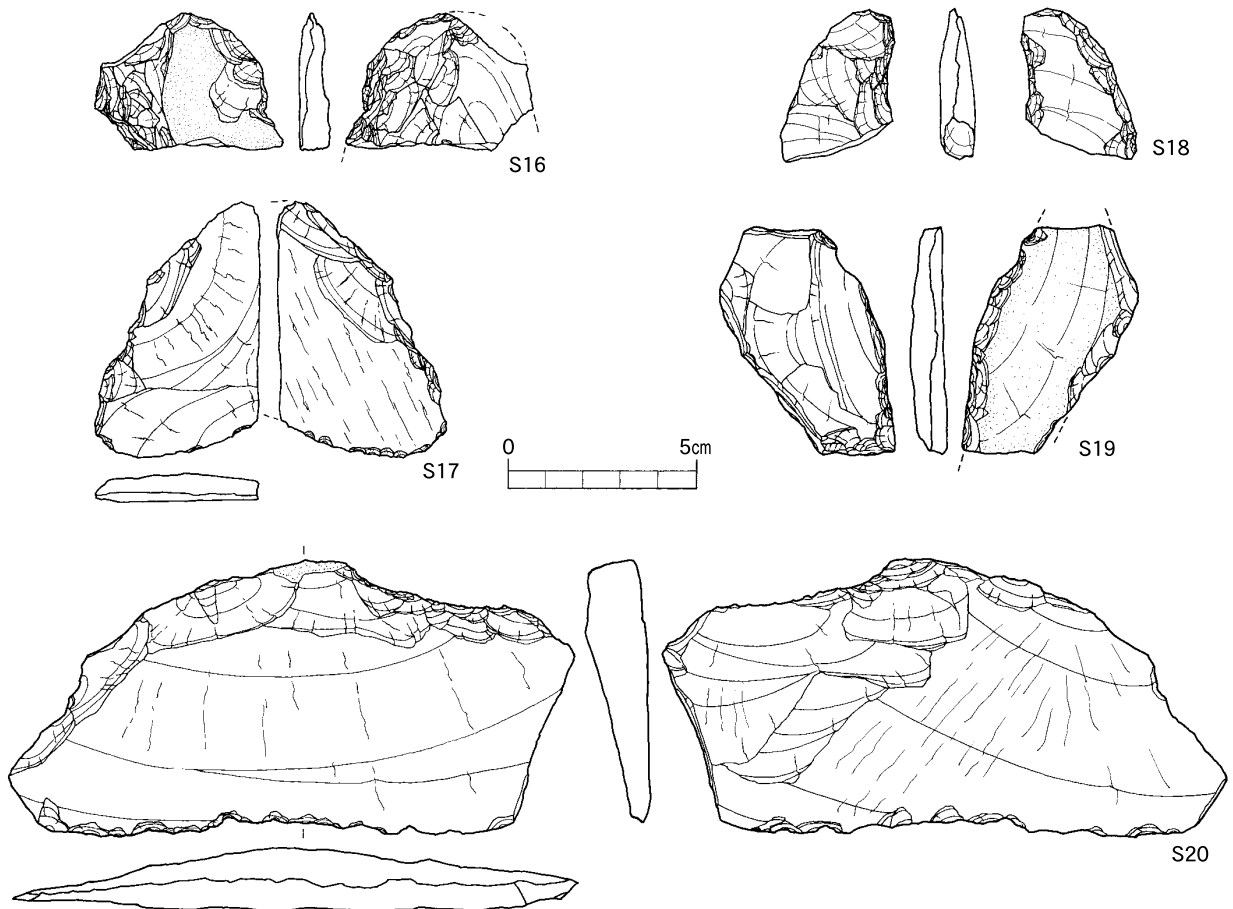
ホルンフェルスの剥片に加工痕のみられるものがいくつかある。10は横長剥片の背部に両側から剥離を加えている。刃部は鋭いが、剥離痕はみられない。

⑥石核 (S15)

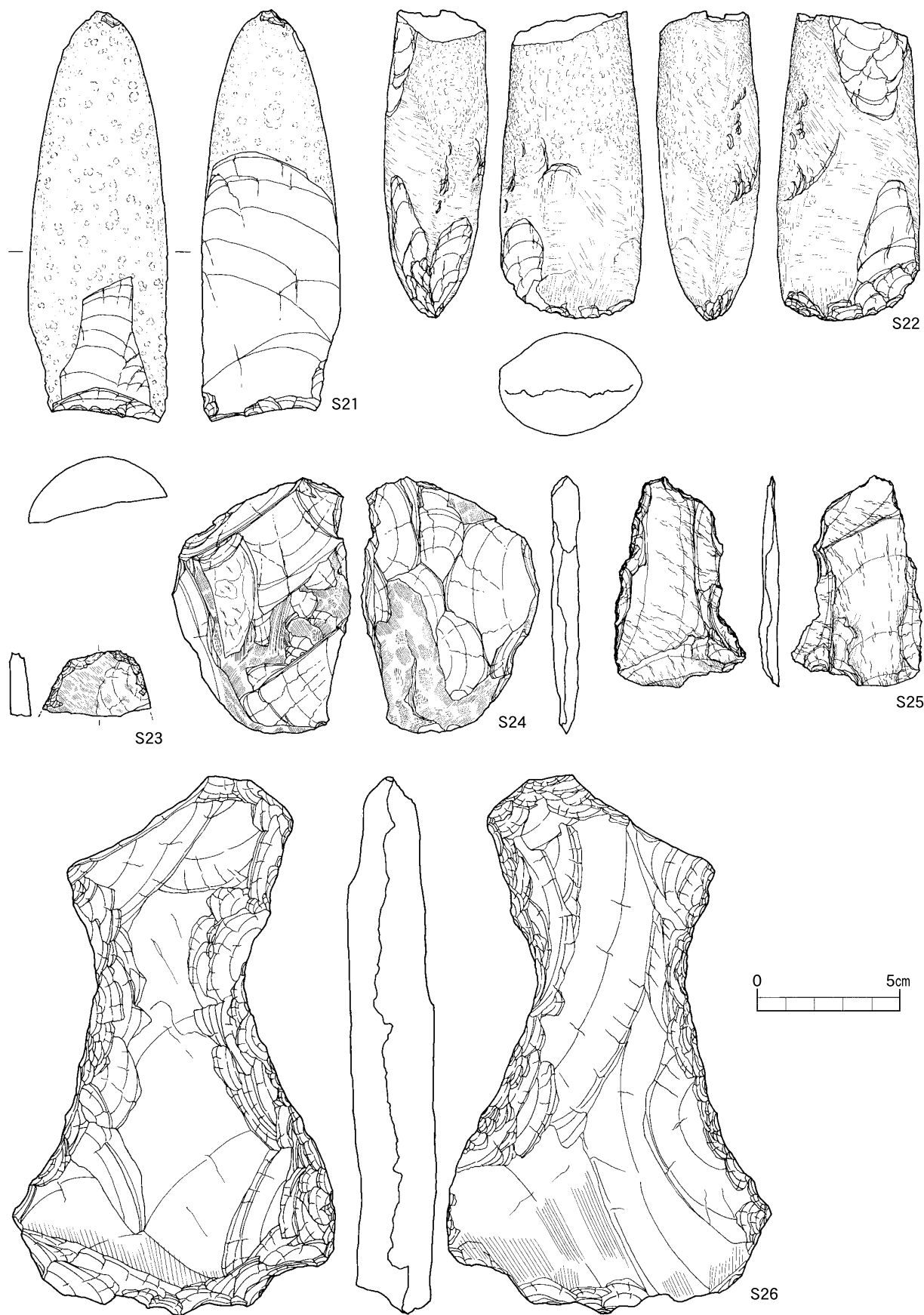
舟底形をした石英製石核で、平坦に形作った天井部から前面に数回の剥離を施している。

⑦磨製石斧 (S21~25)

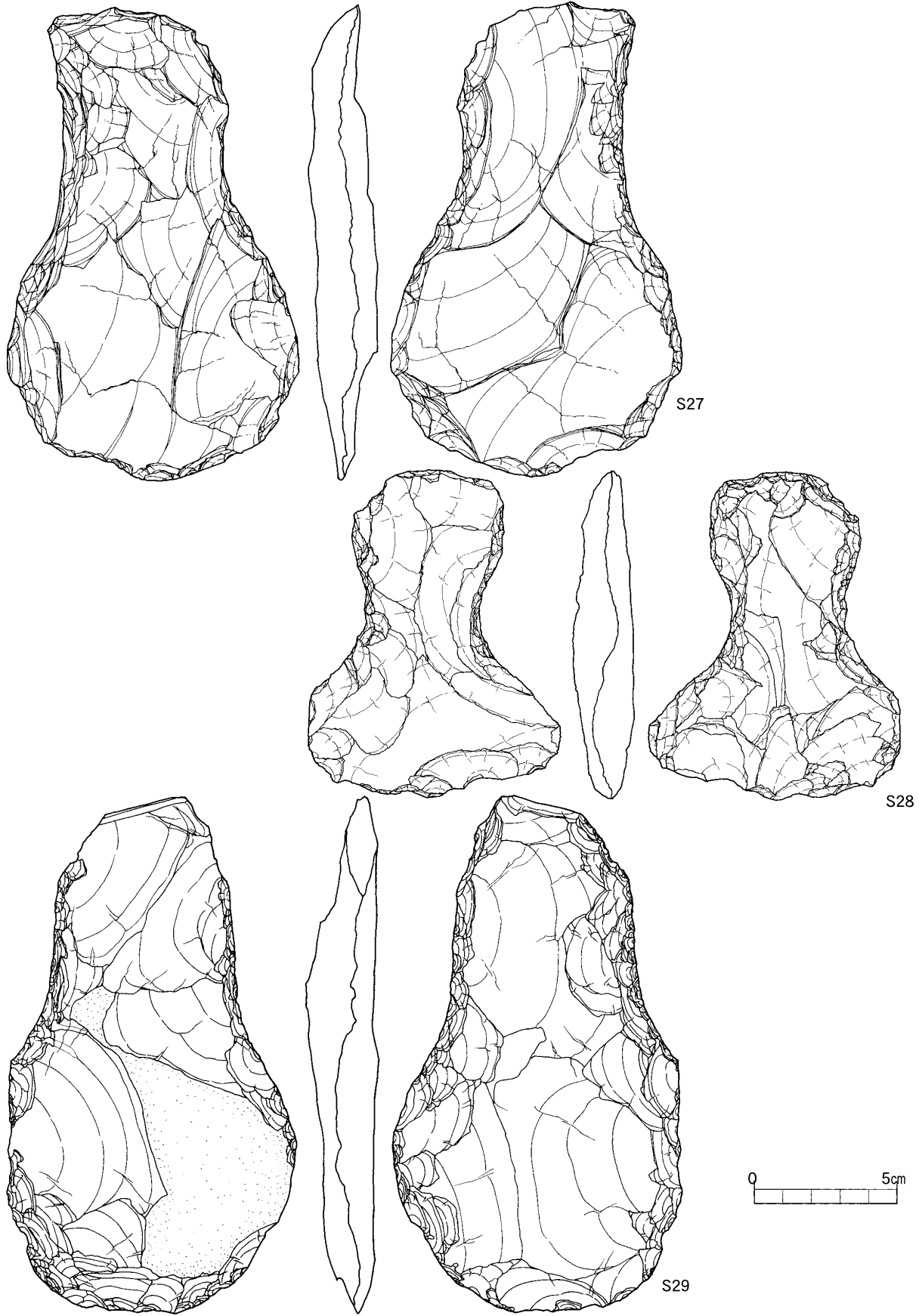
5点出土している。21は刃部が欠けたもので、周辺をこまかく打ち欠いて形を整え、ていねいに磨いている。22は頭部が欠けて、刃部に新しい欠損部がみられる。敲打によって形を整え、ていねいに磨いて、刃部は蛤歯状になっている。敲打のあと、頭部(23)は狭くなっており、敲打で形を



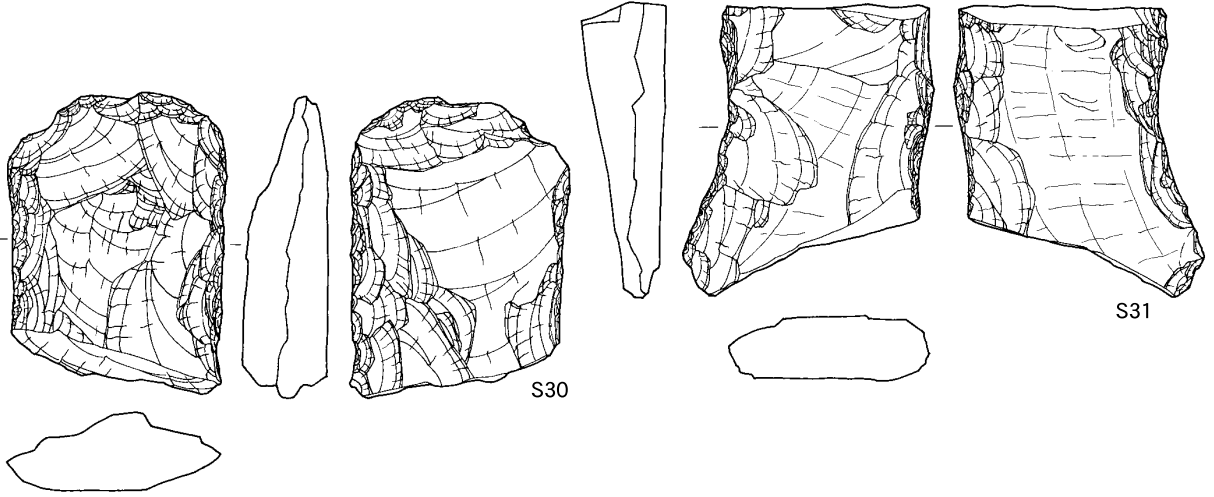
第21図 石器(3)



第22図 石器(4)

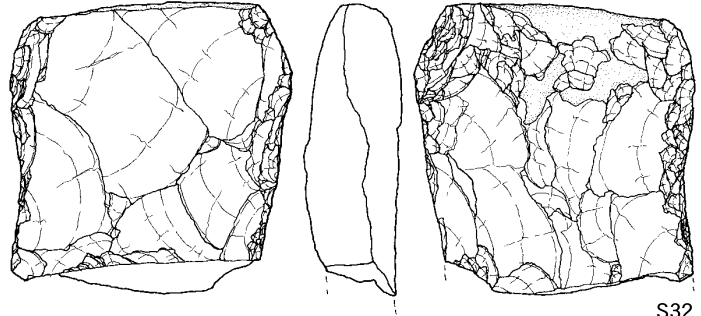


第23図 石器(5)

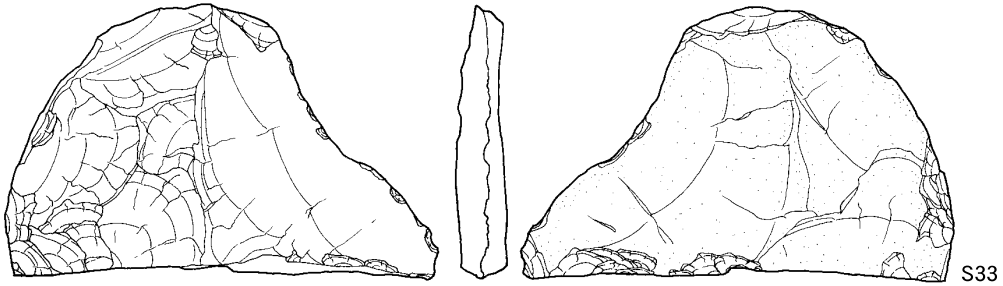


S30

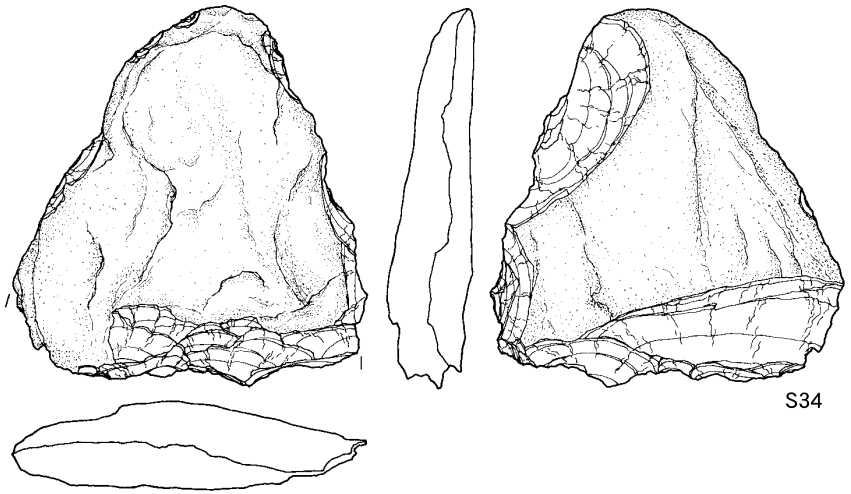
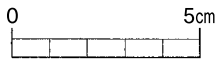
S31



S32

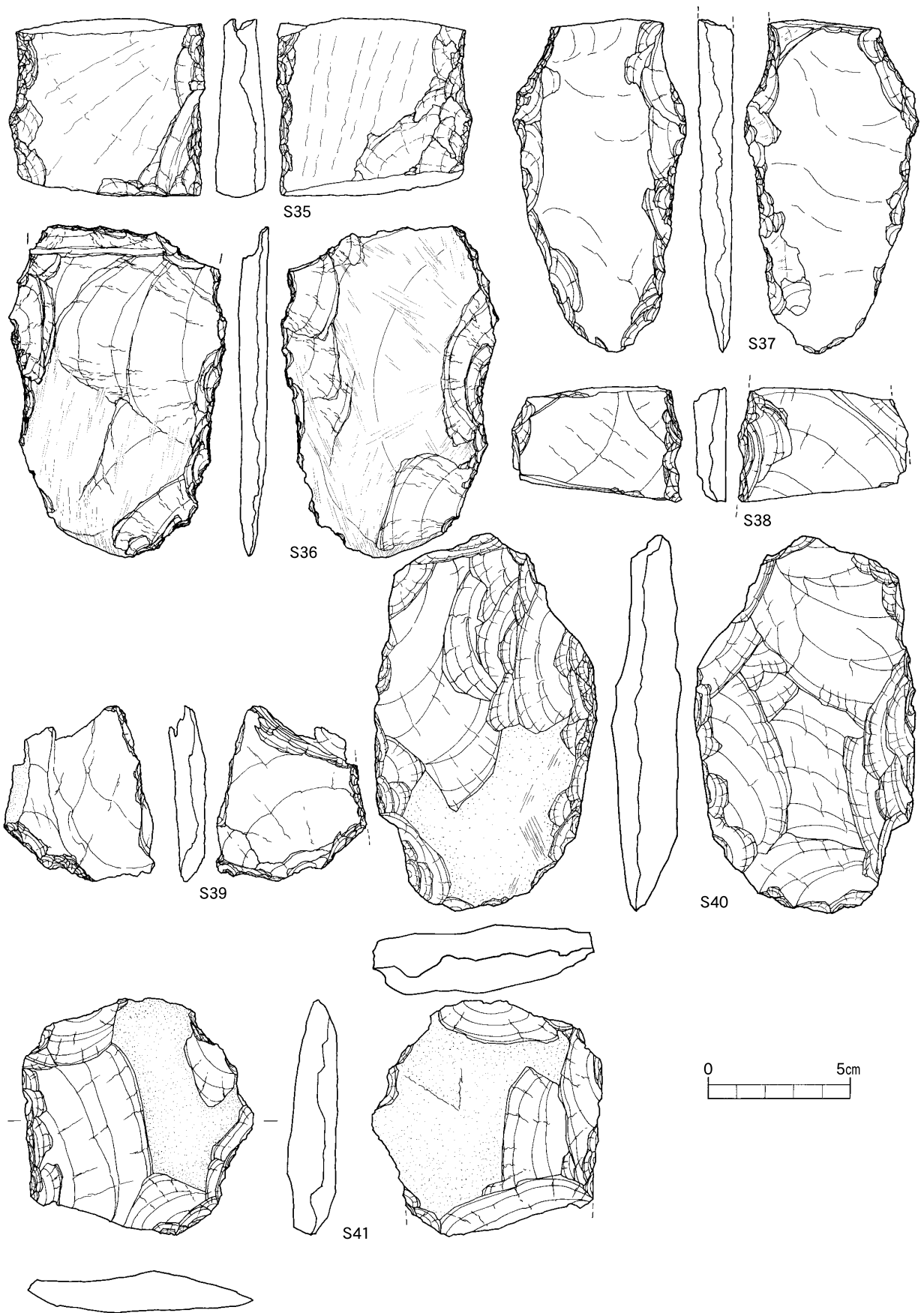


S33



S34

第24図 石器(6)



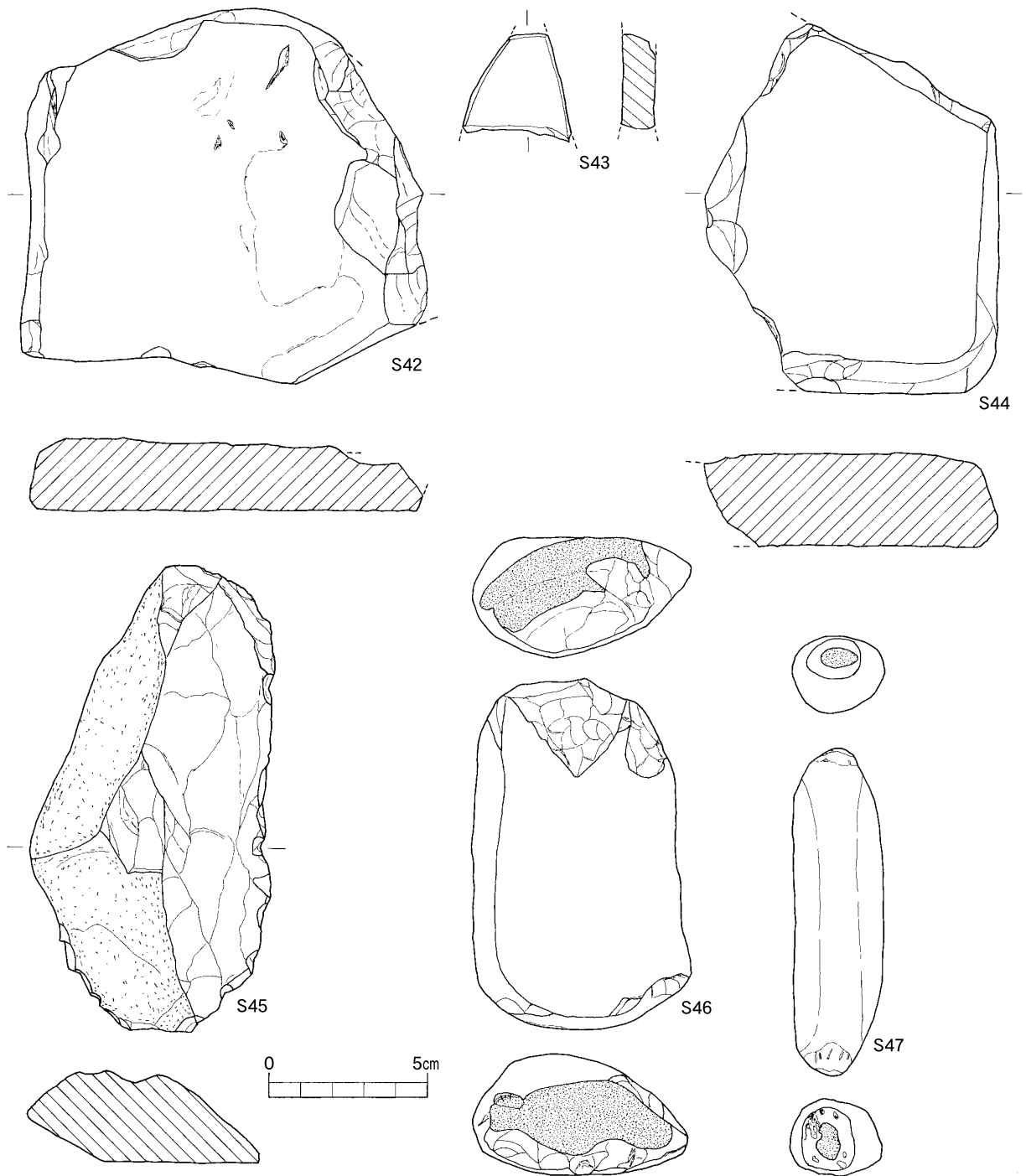
第25図 石器(7)

整えている。24は局部磨製石斧の刃部で、上半部を欠いている。両側から打ち欠いており、刃部のみを磨いている。25は頭部が欠けているもので、刃部のほうは片方が欠けている。

⑧打製石斧（S26～41）

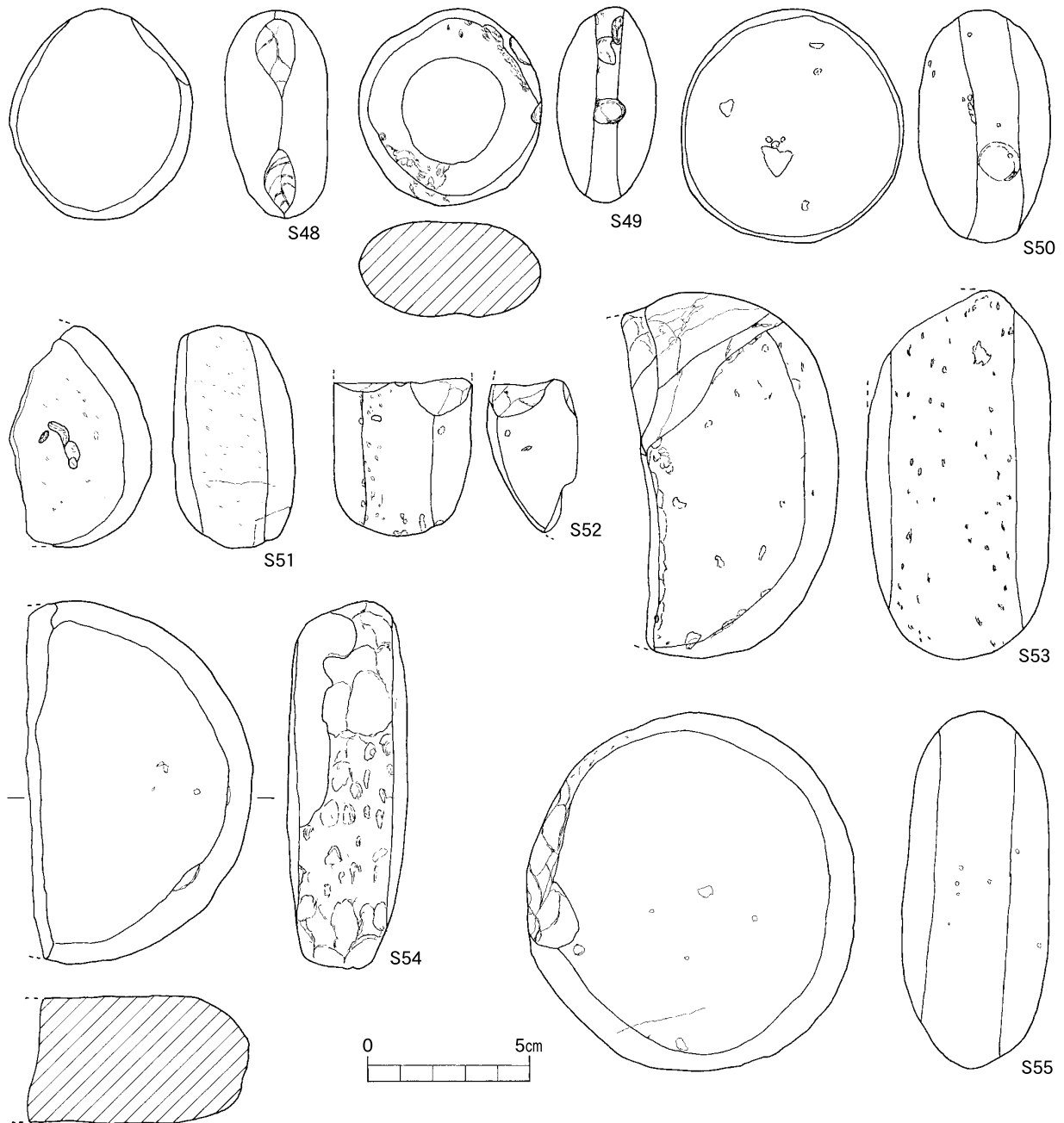
16点出土しており、完形のもの、頭部のみのも、刃部のみのももある。抉り入りのものが多いが、まっすぐ伸びるものもある。いずれもホルンフェルス製である。

26は抉りのあるもので、頭部が一部欠けており、側辺のみをていねいに打ち欠いている。刃部調



第26図 石器(8)

整は粗い。27・29はだるま形を呈するもので、29の表面には一部自然面を残している。周辺をこまかく調整し、刃部は丸い。28は強くくびれており、周辺のみをこまかく打ち欠いているが、調整は粗く、刃部調整も粗い。30～32は周辺からこまかく調整したほぼ長方形の頭部である。31はいくらか傾いた抉りとなる頭部分である。33・34は丸みをおびて広い頭部で自然面を広く残し、周辺に簡単な調整がみられる。33は折損部にも剥離痕がみられることから再利用の可能性はある。35は両面からいねいに打ち欠いた体部である。37は頭部を欠いているが、狭いもので、両側からこまかい調整を加えて形を整えている。先端部はとがっている。36は頭部を欠いているが、抉りのあるもので、片面には自然面を残している。側縁はこまかく調整し、全体的に磨き痕がみられる。40は刃部



第27図 石器(9)

であるが、両側辺にこまかい調整痕がみられる。

⑨砥石 (S 42~44)

砂岩製砥石が3点出土している。42はIV層で出土した半欠品で、裏は剥脱している。右側辺には打撃痕がみられ、礫器状を呈している。表面はややでこぼこしている。43は上部・下部とも欠損した台形をした四面砥の、仕上げ砥である。厚さが1cmしかない小型のもので、古墳時代のものかもしれない。44も広く割れたもので、裏はややでこぼこしている。

⑩礫器 (S 45)

薄い安山岩円礫の長側辺を打ち欠いて、鋭い刃を作っている。裏はすべて自然面だが、表も半分ほどは自然面である。表から粗い剥離を施し、一短側辺と一長側辺に刃部を作っている。

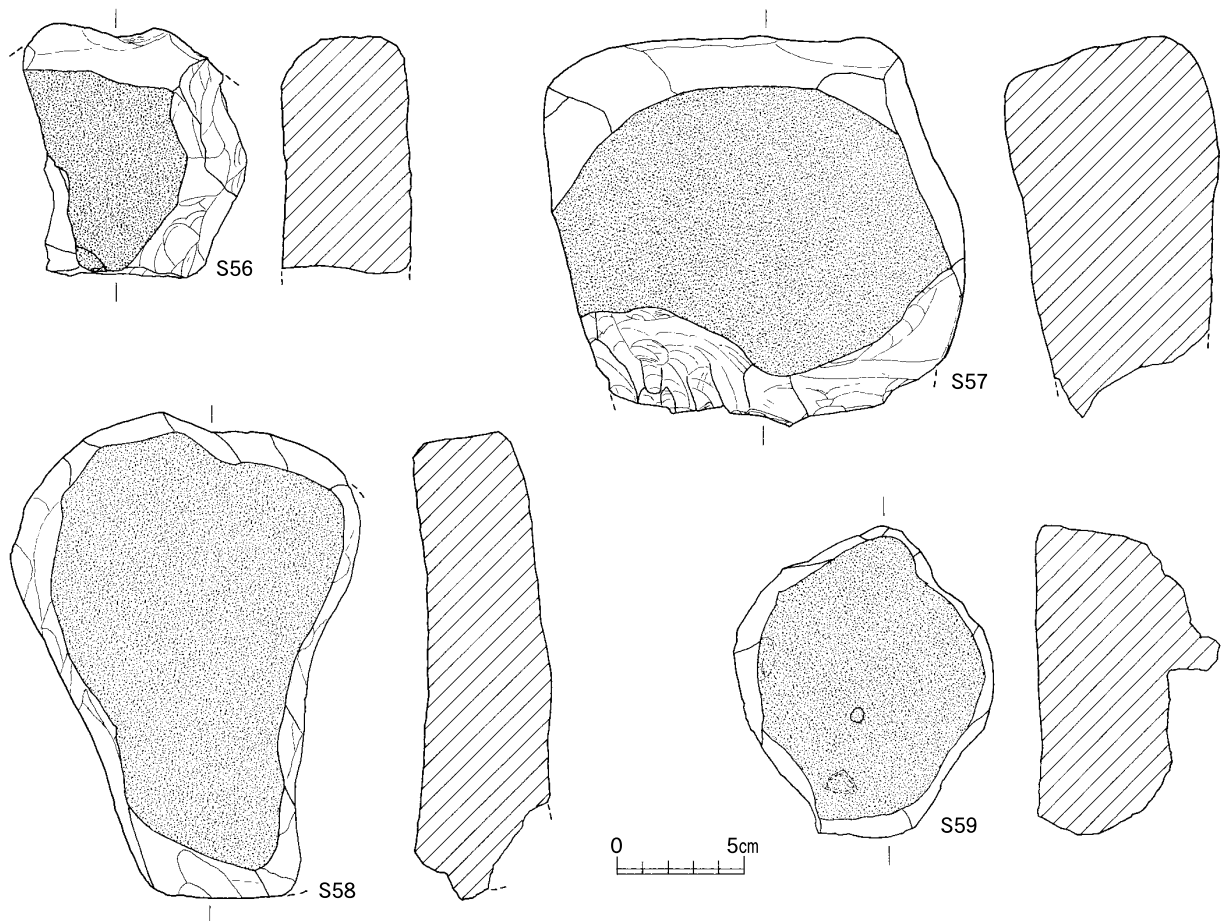
⑪敲石 (S 46・47)

46は河原石の両端に敲打痕がみられる。敲打のあと、磨石としても用いられ、両端とも磨痕がみられる。47は棒状を呈する河原石で、短側辺の両端に敲打痕がみられ、中央部は磨痕もある。

⑫磨石 (S 48~55)

直径が6cmから11cmほどのものまで8点ある。石材は安山岩・砂岩・花崗岩などがある。

48~51は小型のものである。48は裏面の全体を磨っており、側面の3か所に顕著な使用痕がみられる。49・50は両面・側面とも磨っており、側面には一部に打痕もある。49の片面には浅いくぼみ



第28図 石器(10)

がある。51・52は硬質であるが、両面・側面ともよく使い込んでいる。53・54は半欠品である。53は両面・側面とも使用痕が顕著であるが、一部に打痕がみられ、敲石としても使用されている。54は大型のものであるが、半分に欠損している。表・裏面ともよく磨って平坦になっている。側面もよく磨っており、幅広くなっているが、打痕跡も多くくぼみ部分も広い。55は一部欠損部のある花崗岩製である。

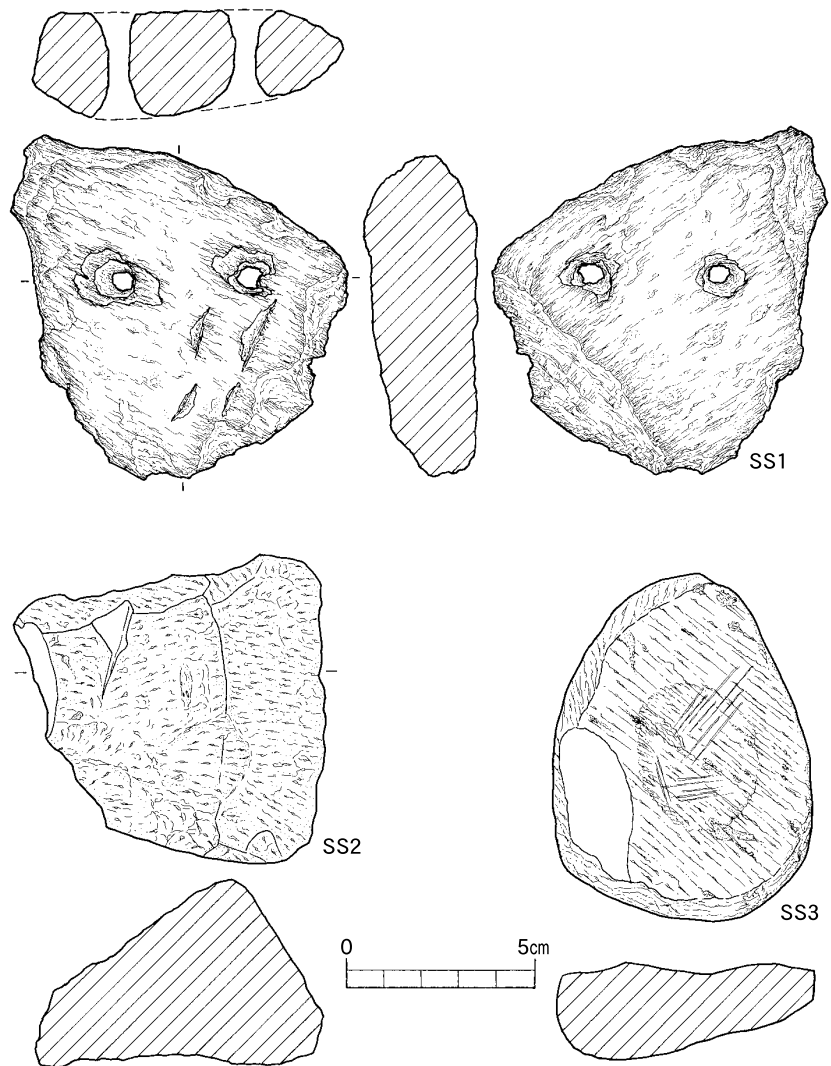
⑬石皿 (S 56~59)

4点出土している。56は砂岩円礫の一面を使用したもので、一側片には敲打痕がみられ、礫器様にもみえる。57は安山岩円礫の一面を使用した分厚いもので、面はややでこぼこしている。一辺は敲打が加えられ礫器様を呈している。58は花崗岩礫を用いており、一部が欠けている。59も花崗岩礫を用いており、四方とも欠損している。表面はでこぼこしている。

4) 石製品 (S S 1~3)

軽石を加工したり、使用したものがC地点で3点出土した。S S 1は底辺8cm、高さ10cm、厚さ2.8cmの扁平な軽石の二か所に両側から直径0.5cm程の孔を穿っている。使用痕等がないことから祭祀用品の可能性がある。S S 2は上辺8cm、下辺5.5cm、高さ8cmで、断面が三角形をした軽石の2辺が直に切られたものである。

S S 3は長径9cm、短径6.8cm、厚さ2.5cmの扁平で楕円形をした軽石の一面が丸くへこんでいる。土器ナデの使用痕かもしれない。



第29図 石製品

第3表 石器観察表

番号	種類	出土地点	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備 考
4	打製石鏃	A	黒曜石	2.8	2.2	0.4	1.6	
5	打製石鏃	C	黒曜石	2.3	2.0	0.7	1.9	頭部欠け
6	打製石鏃	A	チャート	2.1	1.4	0.4	0.6	頭部・脚部欠け
7	石匙	B	チャート	4.7	6.8	0.9	24.8	
8	抉入石器	C	安山岩	2.1	2.3	0.4	2.0	
9	スクレイパー	C	安山岩	2.0	3.8	1.1	7.7	頭部のみ
10	加工痕のある剥片	C	ホルンフェルス	3.4	5.6	0.7	11.6	
11	スクレイパー	C	黒曜石	1.7	2.7	0.7	3.0	
12	スクレイパー	B	黒曜石	2.2	1.3	1.0	2.0	
13	スクレイパー	B	黒曜石	3.4	1.4	0.9	3.2	
14	スクレイパー	C	安山岩	3.2	4.0	1.0	15.1	半分欠け
15	石核	A	石英	3.4	3.3	3.4	67.3	
16	スクレイパー	C	安山岩	3.2	4.0	1.0	15.1	頭部のみ
17	スクレイパー	C	安山岩	6.8	4.4	0.7	24.1	
18	スクレイパー	B	ホルンフェルス	4.0	3.0	0.9	12.0	頭部のみ
19	スクレイパー	C	ホルンフェルス	6.0	4.6	0.9	25.4	頭部・刃部欠け
20	スクレイパー	B	安山岩	7.3	14.9	1.6	147.3	一部欠け
21	磨製石斧		頁岩	2.3	3.8	0.7	221.3	刃部欠け
22	磨製石斧	B	安山岩	10.7	5.1	3.7	276.1	頭部欠け
23	磨製石斧	C	ホルンフェルス	2.4	3.8	0.7	7.7	頭部のみ
24	磨製石斧	C	粘板岩	9.0	6.2	1.0	65.1	刃部のみ
25	磨製石斧	C	粘板岩	14.5	4.8	0.6	22.1	刃部のみ
26	打製石斧	C	ホルンフェルス	19.0	最大 11.3 最小 5.0	3.0	660.0	頭部欠け
27	打製石斧		ホルンフェルス	16.5	最大 10.2 最小 5.5	2.4	359.0	
28	打製石斧	C	ホルンフェルス	11.5	最大 8.8 最小 3.4	2.0	173.4	
29	打製石斧		ホルンフェルス	18.0	最大 10.1 最小 6.3	2.5	455.0	
30	打製石斧	B	ホルンフェルス	8.0	6.0	2.1	117.9	頭部のみ
31	打製石斧	B	ホルンフェルス	7.8	最小 5.3	2.2	117.8	頭部のみ
32	打製石斧	C	ホルンフェルス	7.6	7.3	2.5	178.4	頭部のみ
33	打製石斧	C	ホルンフェルス	7.0	11.4	1.3	95.9	頭部のみ
34	打製石斧	B	ホルンフェルス	10.0	9.3	2.2	180.4	頭部のみ
35	打製石斧	C	ホルンフェルス	6.2	6.8	1.8	103.6	胴部のみ
36	打製石斧	C	粘板岩	11.6	7.6	1.1	101.0	頭部欠け
37	打製石斧	C	ホルンフェルス	11.7	6.2	1.2	103.6	頭部欠け
38	打製石斧	B	ホルンフェルス	4.0	6.1	1.1	34.8	胴部のみ
39	打製石斧	B	頁岩	6.2	5.3	1.3	37.6	胴部のみ
40	打製石斧	B	ホルンフェルス	13.5	7.8	2.3	249.1	頭部欠け
41	打製石斧	B	ホルンフェルス	8.2	8.1	1.7	113.5	頭部のみ
42	砥石	C	砂岩	11.8	12.8	2.1	569.0	半欠品
43	砥石	C	砂岩	3.4	3.4	1.0	17.9	破片
44	砥石	B	砂岩	11.5	9.2	2.9	510.0	破片
45	礫器	B	安山岩	14.8	7.6	2.9	330.0	
46	敲石	C	砂岩	11.0	7.0	3.8	460.0	
47	敲石	C	砂岩	9.4	2.9	2.4	110.8	
48	磨石	A	安山岩	6.4	5.5	3.1	143.8	
49	磨石	C	砂岩	6.0	5.6	3.1	129.7	
50	磨石	C	砂岩	7.1	6.8	4.0	291.6	
51	磨石	C	安山岩	6.8	4.5	3.8	122.7	半欠品
52	磨石	C	花崗岩	4.8	2.8	4.3	79.0	半欠品
53	磨石	B	花崗岩	11.3	6.7	5.7	610.0	半欠品
54	磨石	C	砂岩	11.3	6.9	3.8	473.0	半欠品
55	磨石	B	安山岩	11.1	10.0	4.5	749.0	
56	石皿	C	砂岩	10.0	8.2	5.1	610.0	半欠品
57	石皿	B	安山岩	15.5	16.7	8.4	3,100.0	半欠品
58	石皿	A	花崗岩	19.0	13.8	5.4	1,687.0	半欠品
59	石皿	C	砂岩	9.9	8.8	7.0	1,052.0	半欠品

第5節 弥生時代

A地点とC地点で弥生時代前期の突帯文土器が7点出土している。

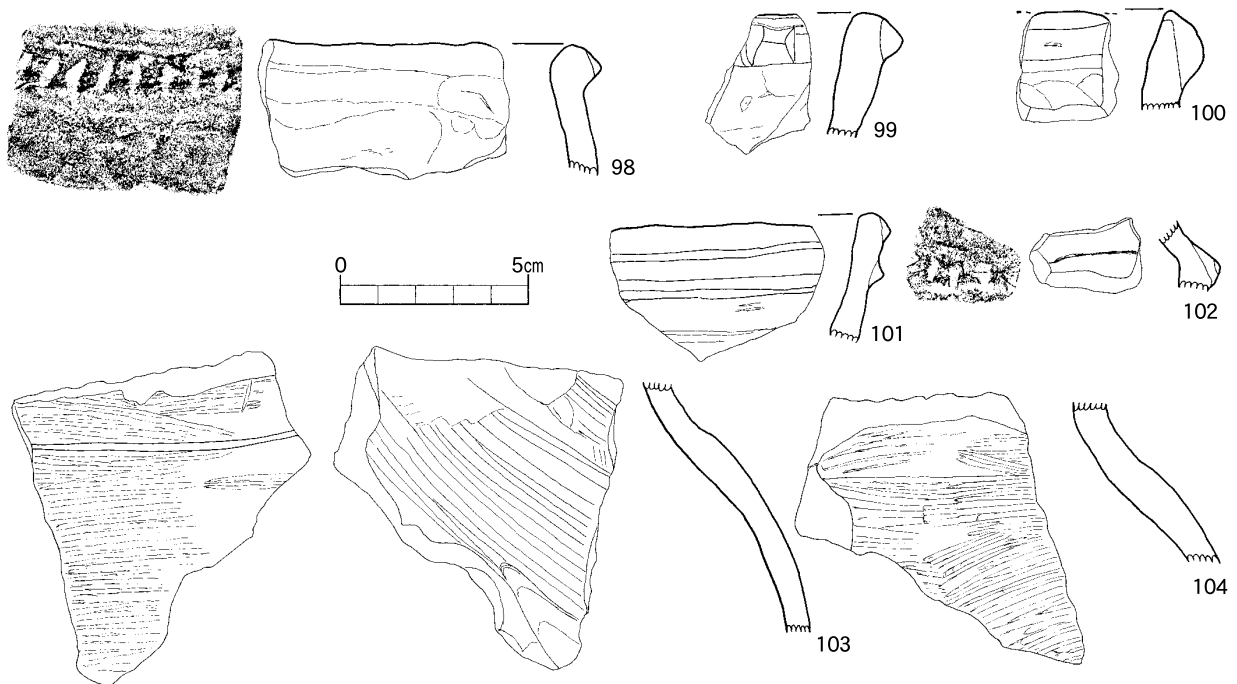
1 甕形土器（第30図98～102）

一条突帯のものと二条突帯のものがある。98と99はヘラ刻みのある一条突帯甕形土器である。98に比べ99のヘラ刻みは深い。98の内面は突帯の反対側が内へ張り出しており、突帯部は下へやや下がっている。99は98に比べ分厚い。100はヘラ刻みのない突帯文甕形土器で、突帯が分厚く玉縁状の口縁となっている。101は低い貼付けの二条突帯甕形土器で、突帯にヘラ刻みはなく、薄い作りである。102は胴部であるが、屈曲部に浅いヘラ刻みのある貼付突帯がみられる。内面には段がみられる。これらはいずれもヘラナデで仕上げているが、98の外表面は横方向、100の外表面は縦方向である。100と101の内表面は横方向のていねいなナデ整形である。

色調は98・100～102が茶褐色、99が灰褐色を呈するが、98と101の内面、100の外表面は黄色っぽく、98はやや暗く、102は淡い。100の内表面は黒褐色である。焼成度は普通であるが、全体的にやや甘い。胎土には火山ガラス・白色石が多く含まれ、他に黄白色石・石英などもあるこまかい土である。98には5mm大もあるやや大きな小石も含まれている。100はA地点で出ているが、他はC地点で出土している。

2 壺形土器（第30図103・104）

外表面をていねいなヘラミガキで仕上げ、丹塗りのあるものがC地点で2点出土しているが、形態・色調・胎土などからして同一個体と思われる。肩部に段をもつ大型の壺形土器である。内表面は斜方向のハケナデで仕上げているが、部分的にヘラナデもみられる。内表面は黄褐色を呈し、焼成度は普通である。白色石・石英・黄白色石などを含んだ粗い土を用いている。



第30図 弥生土器

第6節 古墳時代

遺構は竪穴住居跡3軒と土坑1基があり、多くの土器が出土している。

1 遺構

竪穴住居跡3軒，土坑1基がある。

1) 1号竪穴住居跡（第31図，第32図105～113）

C地点にあり西側は道路によって破壊され、中央部も最近の土坑によって大きく破壊されている。また、北側も水道管によって一部破壊を受けている。そのため、全容はつかみにくいが、概要として南北が約4.9m，東西が3.6m以上の方形をしており、東側に幅70cm，長さ100cm，南側に幅約90cm，長さ約100cmの内側へ伸びる突出部がある。さらに南側辺にはあと1か所，長さ50cmほどの突出部があるが、道によって破壊されているため詳細は不明である。深さは約10cmほどしか残っていない。南側辺にある2か所の突出部間には長径140cm，短径80cm，深さ6～7cmの楕円形土坑があり，その南側には甕形土器の大きな破片がある。中央やや南寄りには40cm×35cmの赤く焼けた部分がある。支柱穴と思われるものはなく，東側辺部に直径20cm，深さ60cmの円形ピットが，中央南寄りに直径20cm，深さ40cmの円形ピットがある。掘削後に10～15cmほどの貼床をした痕跡が一部にみられた。

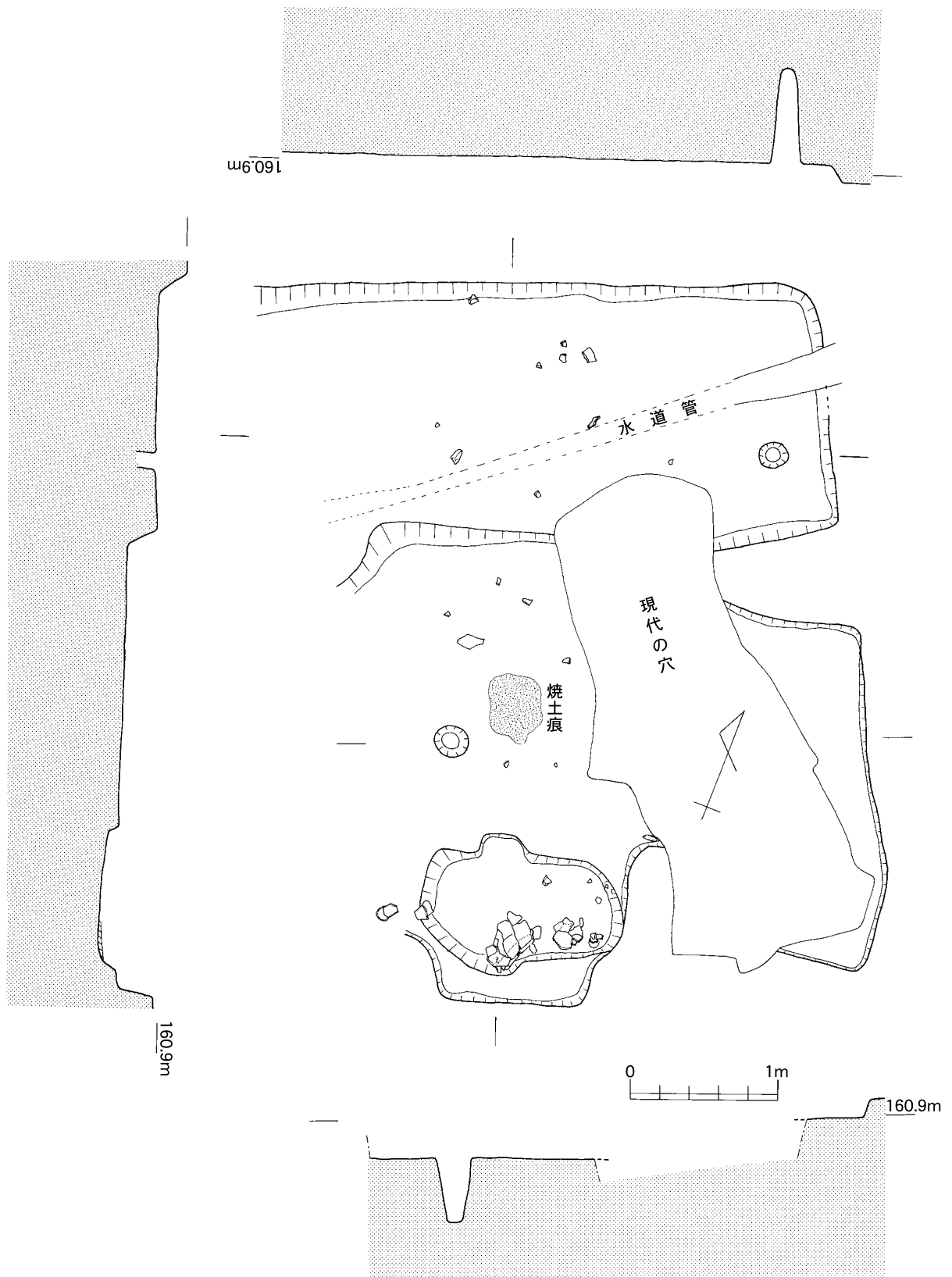
甕形土器・壺形土器・小形丸底壺・小形土器が出土しており，107～109・111は楕円形土坑で出土している。

甕形土器（105・106・110）はくの字形に外反する長胴形の器形をし，底は脚台の付くものと，平底のものがある。105は口縁部が楕円形を呈し，直径は26.3cmから28.7cmある。頸部でくびれて外反しているが，外反度は弱く，最大径は胴部にある。頸部にはヘラ刻みのある三角突帯が貼付けられているが，粘土紐の接合部で一端が下へずれている。外面は横方向のヘラナデ，内面は斜めあるいは縦方向のハケナデで仕上げている。内面には接合部の指押し痕が残っている。106は端部が丸みをおびている脚台で，内外とも横方向のヘラナデで仕上げている。110は直径が8cmの安定した平底で，底からややくびれて胴部へ開きながらまっすぐ伸びている。内外ともヘラナデで仕上げている。

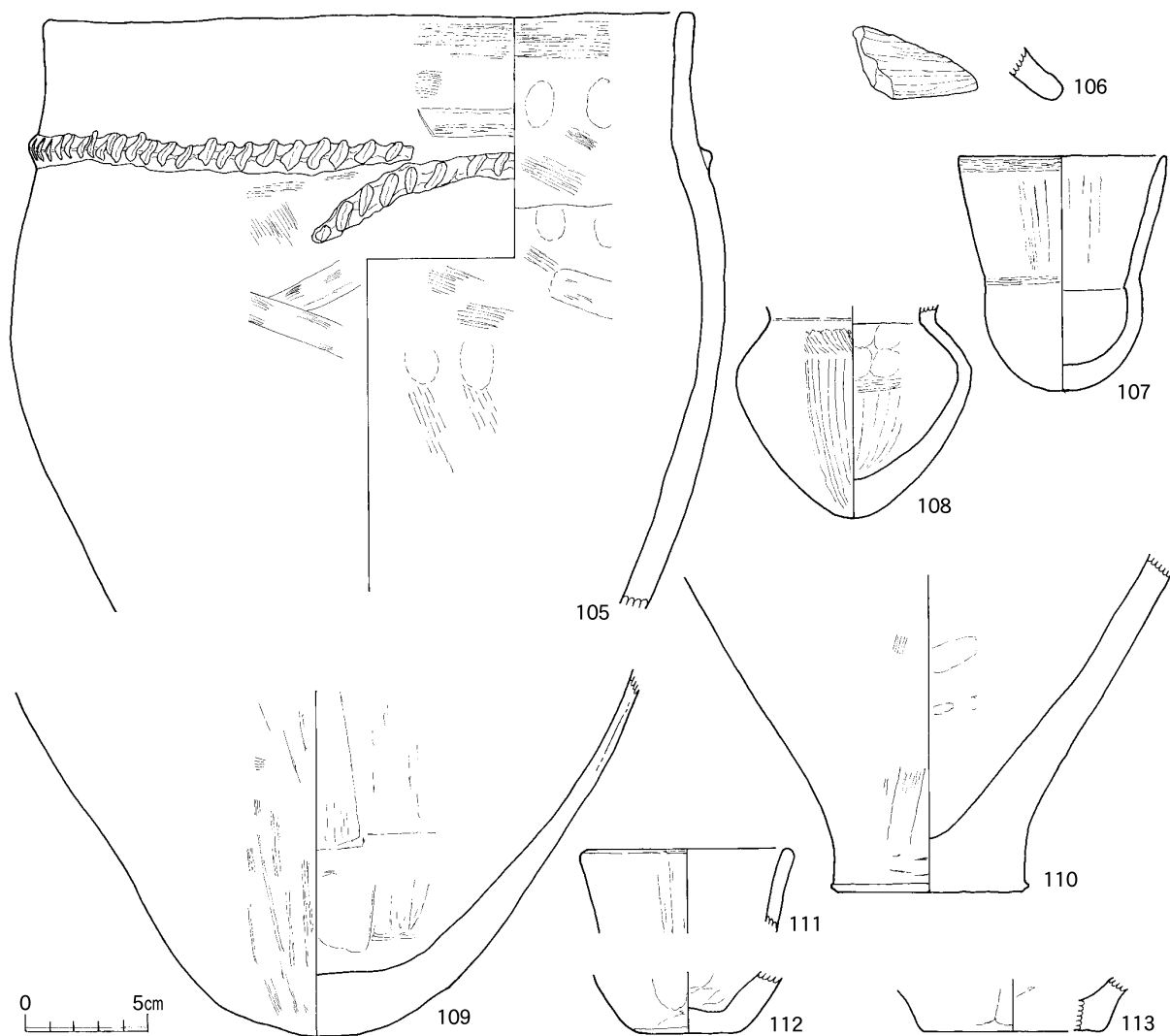
壺形土器（109・111）は丸底である。口縁部は直径8.6cmと小さく，頸部から外へまっすぐ広がっている。外面は縦方向，口唇部から内面は横方向のハケナデで仕上げている。底付近は内外とも縦方向のヘラナデで仕上げているが，内面は下から上へかき上げている。粘土の貼付けがみえる。

小形丸底壺（107）は口縁直径が8.5cm，高さが9.5cmある。外面は口縁端が横方向のケズリに近いヘラナデ，口縁部が縦方向のていねいなヘラナデ，胴部が縦方向あるいは横方向のヘラナデで仕上げているが，やや磨滅している。内面は横方向のナデ仕上げである。

小形土器（108・112・113）はいずれも壺形のものである。108は口縁部が欠けているが，胴部に最大径があり，底は直径1cmの平たい部分があるものの丸底風である。外面は肩部が横方向，胴部が縦方向のヘラミガキで仕上げられており，部分的に光沢もみられる。内面は縦方向のヘラナデである。112・113はともに平底で，内外ともヘラナデで仕上げている。



第31図 1号竖穴住居跡



第32図 1号竪穴住居跡出土の土器

2) 2号竪穴住居跡

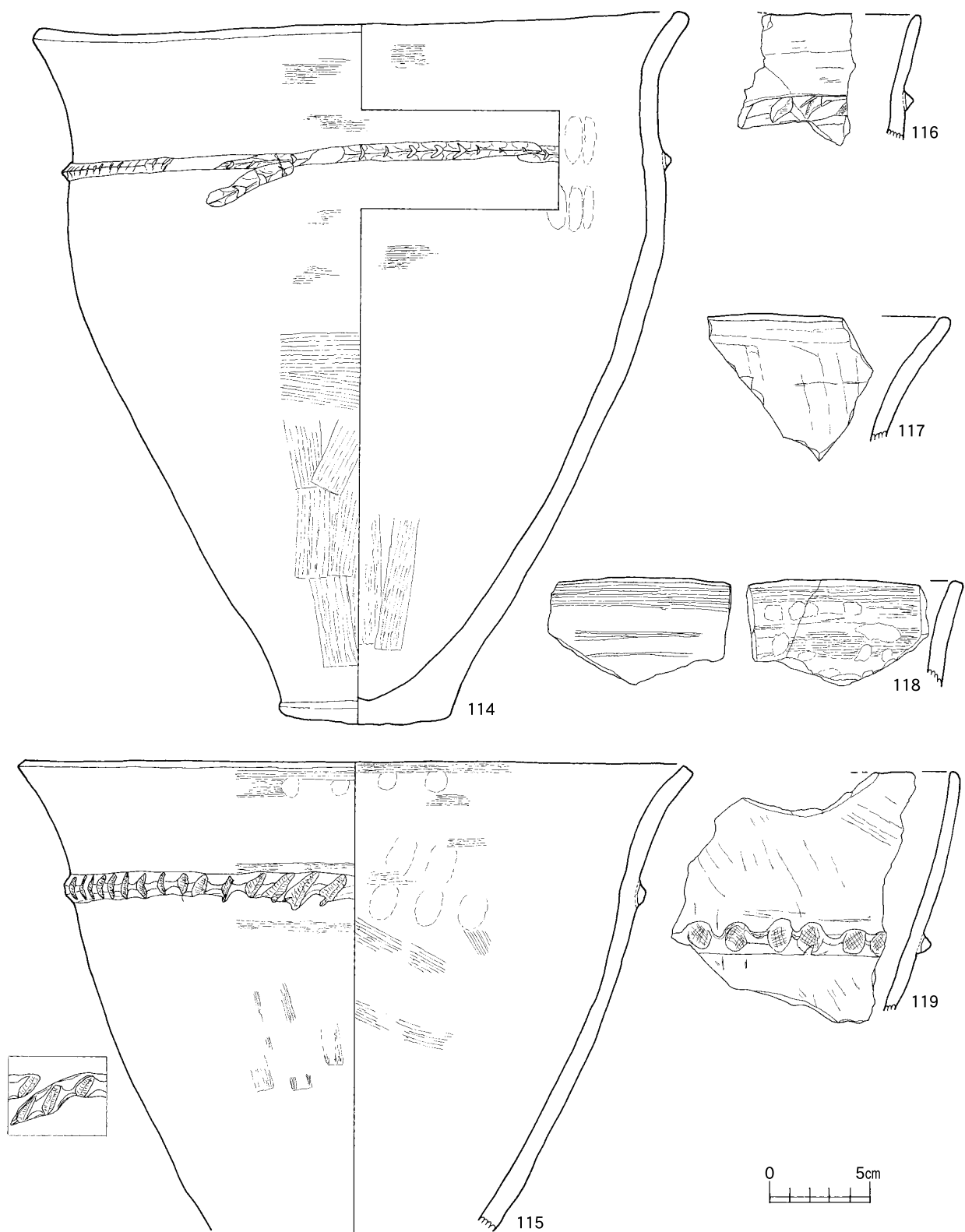
B地点の3号竪穴住居跡の南側10mの所にある。東側が用地外へ延びているため全体は不明だが、東西（BD方向）の幅が3.8m以上、南北（AC方向）の幅が3.2mある。深さは6～20cmあり、床面が東へ、北へ向かってやや下降している。南側の中央付近が20cmほどややふくらんで、そこには南北65cm、東西125cmの黒色土のはいった浅い窪みがある。床面には多量の土器が散布しているが、周辺にはほとんどみられず、中央付近に広がっている。それらのいくつかは完形のものである。完形あるいはそれに近いものは甕形土器4、壺形土器1、小形丸底壺1であり、甕形土器が隣接してそのままつぶれた状態で出土していることから元位置をとどめているようである。小形丸底壺は西隅にやや離れてある。手づくね土器は2点とも中央にある122の甕形土器の近くで出土している。炉あるいは焼土はみられず、炭化材などもみられない。柱穴もみられない。



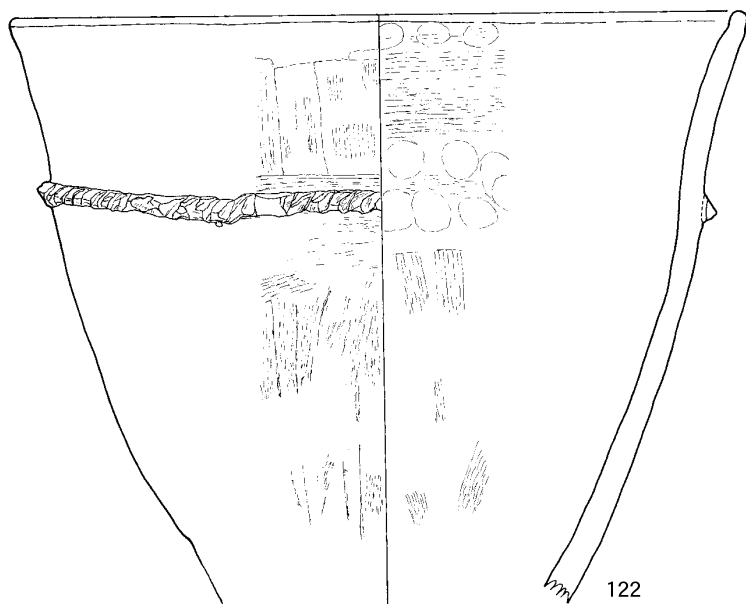
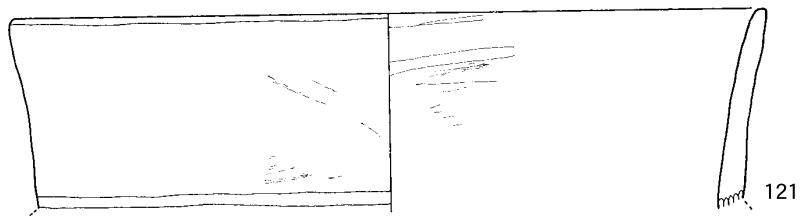
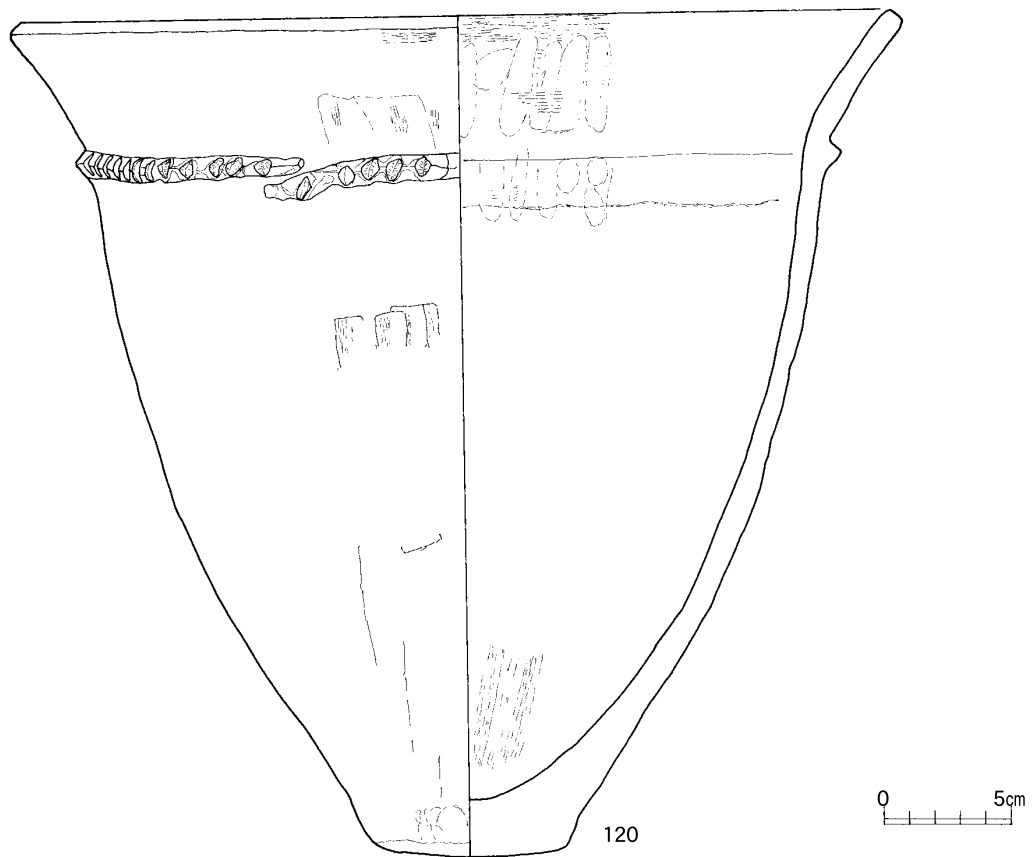
第33図 2号竪穴住居跡

甕形土器・壺形土器・小形丸底壺・小形土器が出土している。

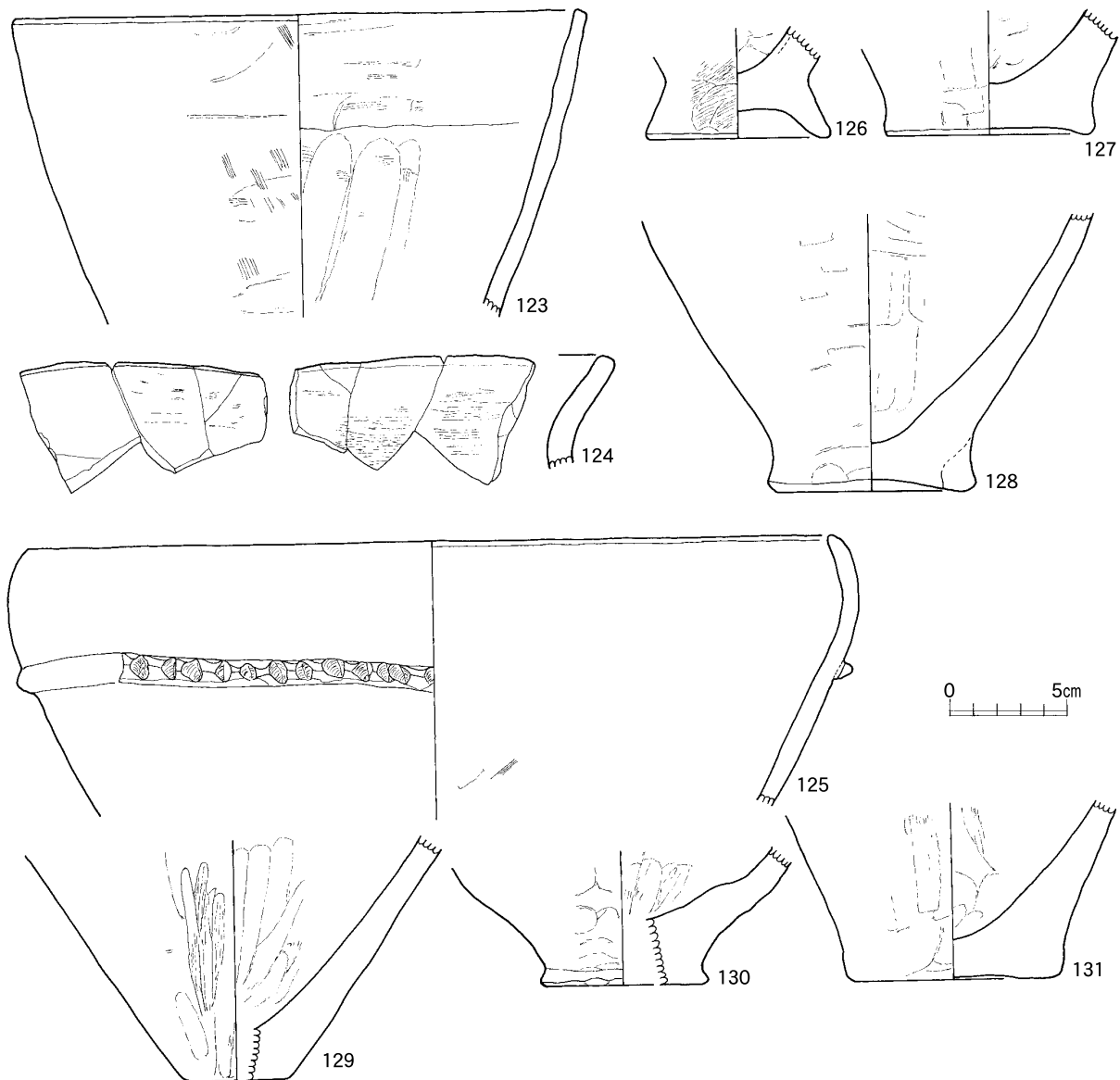
甕形土器（114～131）はくの字状に外反し、頸部に貼付突帯のあるものと、まっすぐ伸びるもの、まっすぐ伸びて貼付突帯のあるもの、内反して貼付突帯のあるものの4形態がある。114は口縁直径33cm、高さ36cm、底部直径8.5cmの完形品である。くの字形に外反する口縁部で、端部は丸みをもっている。頸部に三角突帯が貼付けられ、ヘラ刻みがみられる。一条の突帯が一周するが、一か所で左下がりの短い突帯が貼付けられる。底部は不安定な平底である。外面はヘラナデで仕上げているが、下半部が縦方向、上半部が横方向となる。内面も同じような調整だが、頸部内面には指押し痕跡がみられる。115は口縁直径が34cmあるくの字状口縁となるもので、114に比べ外反度が強い。頸部には台形状の突帯が貼付けられており、帯の接合部が左下へわずかに下がっている。突帯上にはヘラを縦方向に向けて押圧している。内外ともヘラナデで仕上げているが、口縁部内外や、頸部内面には指頭圧痕がみられる。120は口縁直径が35cm、高さ33cm、底部直径7.5cmの完形品である。114と似ているが、外反度が強い。頸部に三角突帯が貼付けられ、その端は左下に折れている。突帯にはヘラ押圧がみられる。内面の頸部から上にはヘラ押圧がみられ、一部には輪積み痕跡がみられ



第34図 2号竖穴住居跡出土の土器(1)



第35図 2号竪穴住居跡出土の土器(2)



第36図 2号竪穴住居跡出土の土器(3)

る。底部はていねいにヘラナデされているが、でこぼこしている。122も外反しているが、口縁直径29cmとやや小さい。頸部にはヘラ刻みの付された三角突帯が貼付けられている。内外ともヘラナデで仕上げている。口縁部は114~118, 120~122・124は外反し, 119・123はまっすぐ伸び, 125は内反している。121は直径が30cmで、頸部に三角突帯が貼付けられる。124は強く外反している。119は三角突帯が貼付けられ, 123は直径24.5cmと小型である。125は直径が34.5cmあり、ヘラ押圧のある三角突帯が貼付けられている。口縁部から底部へ強く狭くなっている。

底部は高台の付くもの(126)、ややあげ底のもの(127・128)、平底のもの(114・120・129~131)がある。126は浅い脚台で、底はでこぼこしている。127の底はていねいな調整をしているがでこぼこしており、白粉が付いている。128は一回平底としたその外に粘土を貼付けている。129・130も白粉が付いており、130の底は雑な作りとなっている。

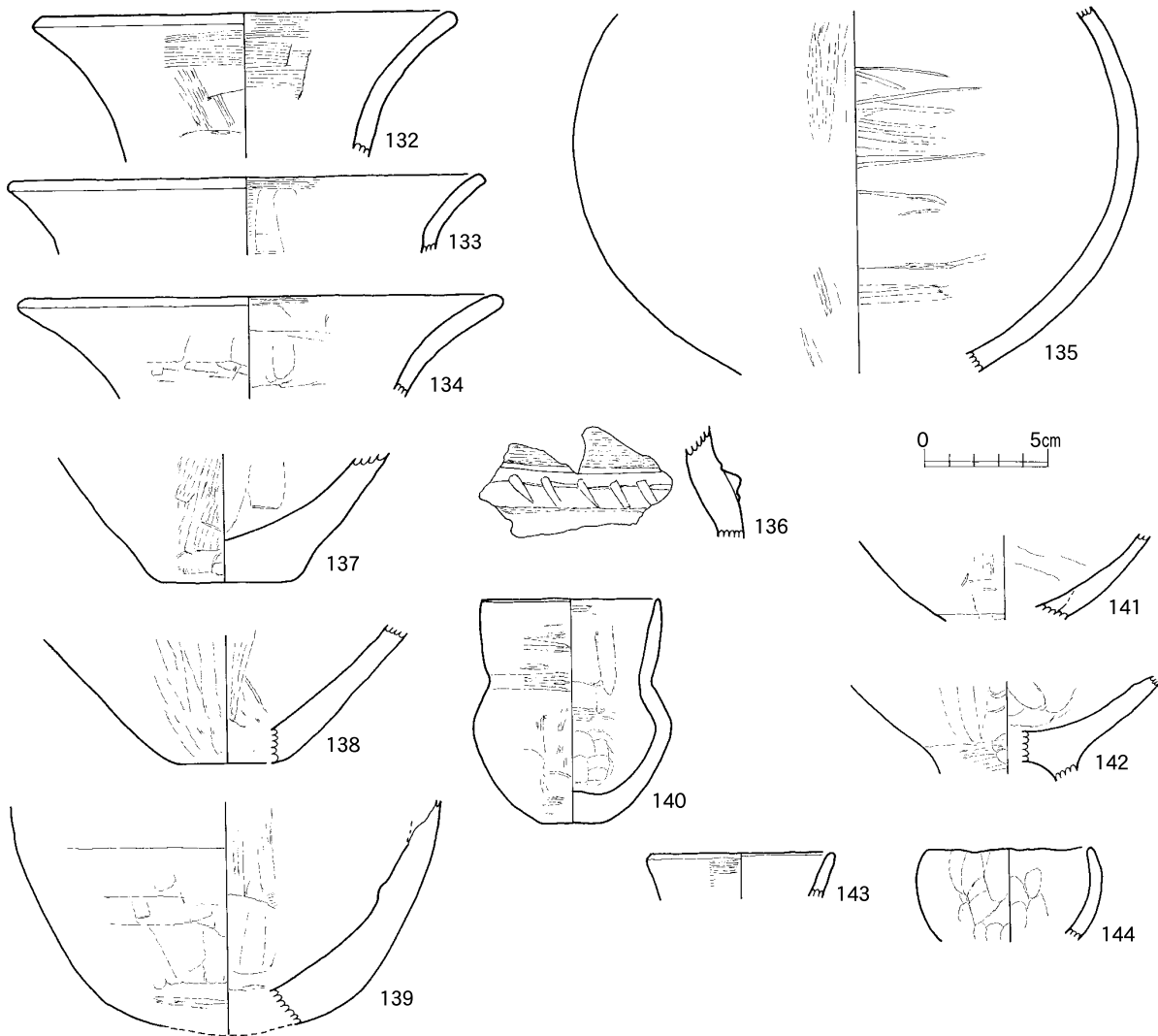
壺形土器(132~139)は口縁部が外へ強く反り、底は平底のものと丸底のものがある。口縁部

の直径は17.3cm～19.8cmで外へ強く反り、ていねいなヘラナデで仕上げているが、134はヘラミガキで仕上げている。135は丸みをおびた胴部で、最大径が23cmある。底は丸底と思われ、外面はミガキに近いていねいなナデで仕上げ、内面も横方向のヘラナデである。136はヘラ押圧のある三角突帯が貼り付けられた肩部である。137・138は直径が4～5cmの小さい平底であるが、137は不安定な平底である。139は外面がミガキに近い縦方向のヘラナデで仕上げた丸底の土器である。

小形丸底壺(140)は口縁直径7cm、高さ9.1cm、底の直径3cmの平底となる完形品である。口縁部はやや外へ開くものの、ほとんど直に立ちあがるもので、口縁の長さは3.5cmとやや短い。外面はミガキの部分もあるほどていねいなヘラナデで仕上げている。

台付鉢形土器(141・142)は鉢部のみが残っており、ともにヘラミガキで仕上げている。141は鉢部の底部に貼付け痕跡がみられる。141の外面は黒褐色を呈しているが、141の内面および142は乳茶褐色・淡茶褐色を呈している。

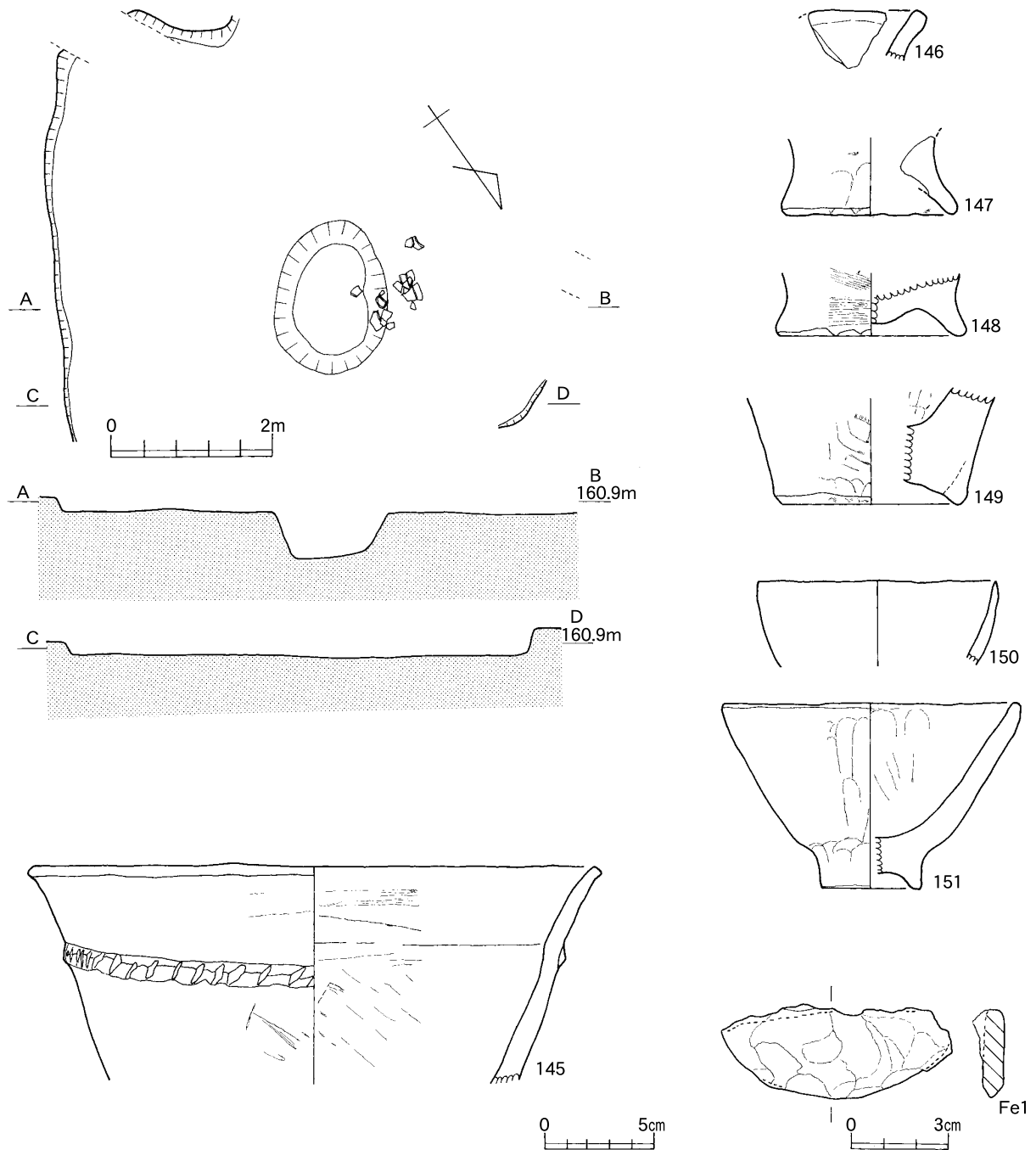
手づくね土器(143・144)は鉢形あるいはまり形を呈している。口縁直径は143が7.5cm、144が6.8cmで、143がまっすぐ開いているのに対し、144は丸みをおびている。143はていねいなヘラナデ・ヘラミガキであるのに対し、144は手づくね風となるヘラナデである。



第37図 2号竪穴住居跡出土の土器(4)

3) 3号竪穴住居跡 (第38図, 145~151・Fe1)

B地点にある方形竪穴住居跡であるが、東辺が残っているだけで、北・西は道路と用地外へ延びており、北辺も一部が検出されたのみではっきりしない。東辺の長さは2.8mだけが検出され、西側に幅30cm以上、長さ1mほどの突出部がある。深さは7~9cmある。北辺は0.4mほど検出されているが、辺なのか、突出部なのかははっきりしない。中央付近に70cm×100cmの平面形が楕円形で、深さ30cmほどの土坑があり、その北側に甕形土器が床面に貼り付いて出土し埋土はⅢa層に似た灰黄褐色土である。



第38図 3号竪穴住居跡と出土遺物

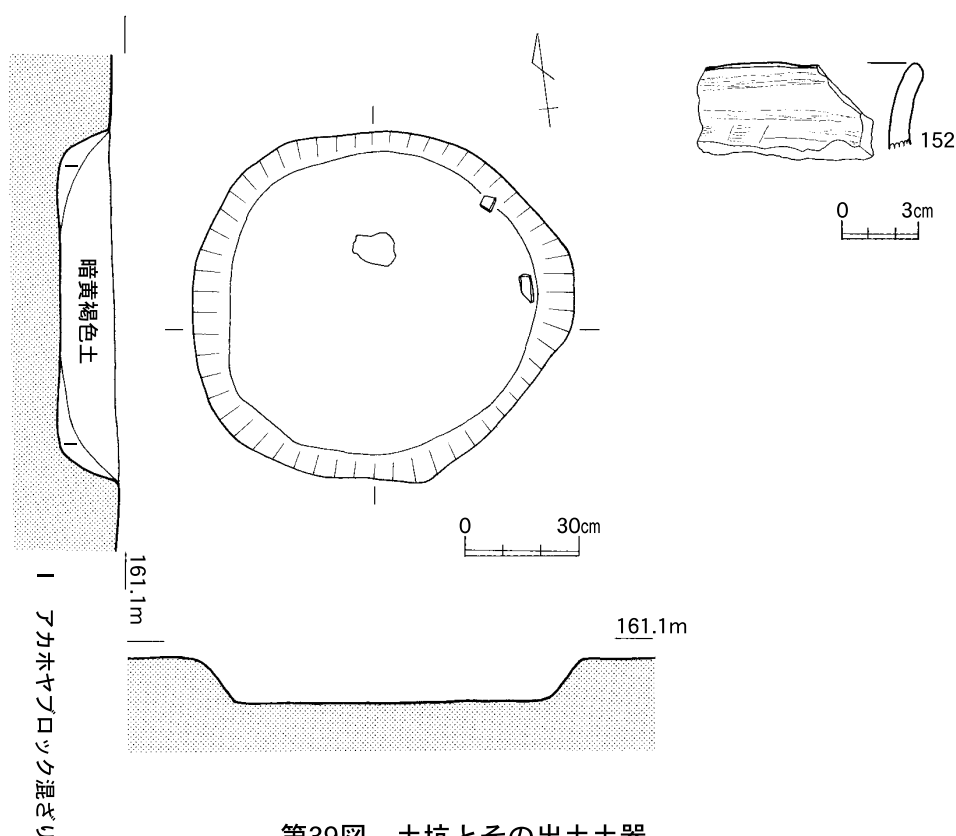
甕形土器・鉢形土器・鉄器が出土している。

甕形土器（145～149）はくの字状に外反する口縁部と、脚台あるいはあげ底の底部から成る。145は直径26cmの外反する口縁部で、頸部に左下がりのヘラ押圧がみられる三角突帯が貼り付けられる。口唇部はわずかに肥厚する矩形の断面形を呈し、頸部内面はかすかに稜をもつ。胴部へ向かい割合強く内傾しながらまっすぐ伸びる器形をしている。外面は横方向のヘラナデ、内面上部は横方向のていねいなヘラナデ、下部は斜方向のヘラナデで仕上げている。内面の頸部より下にはこげ目が付いている。146も同じ形態をした口縁部であるが、端部近くの外面が横方向のナデを強くして段をなしている。147・148はハの字状に開く低い脚台で、147が直径8cm、148が直径9cmである。内外とも粗いヘラナデで仕上げている。148の底には白粉がみられる。149はややあげ底となる底径9cmの分厚い底で、形は雑だが内外ともヘラによるていねいなナデで仕上げている。外面は縦方向、内面は横方向である。底近くで段をもち、底端部は肥厚さず貼付部分がある。

色調は145の外面と146と147の内面が淡茶褐色（部分的に赤みがある）、146と149の外面と145の内面が黄みがかかった乳灰色、147・148の外面は白っぽい黒褐色、149の内面は黄褐色である。胎土は火山ガラス・白色石・茶色石・石英・雲母などのこまかい礫を多く含む砂質土を用い、145には4mm大の小石も含まれている。焼成度は145と149は良いが、他の3点は普通である。

鉢形土器が2点（150・151）ある。

150は口径11.2cmの口縁部がやや内傾するものである。口縁端は細くなっており、作りは雑でこぼこしている。内外とも縦方向のヘラナデで仕上げ、外面は乳茶褐色、内面は淡茶褐色を呈している。焼成度は良く、白色石・火山ガラスなどのこまかい石を多く含む砂質土を用いている。151は口径14cm、底径5cm、高さ8.5cmの底部から口縁部へまっすぐ伸びるもので、低い高台が付く。口縁



第39図 土坑とその出土土器

端は丸くおさまり、口縁・脚台ともでこぼこし、作りは雑である。外面は縦方向（脚台は横方向）のヘラナデで、部分的に横方向の繊維状ハケナデもみられる。内面は縦方向のていねいなヘラナデである。色調は黄みがかった淡茶褐色を呈し、底近くは黒みがかった。焼成度は普通で、黄白色石・茶色石・火山ガラスなどの細かい砂粒の多い砂質土を用いている。

鉄器（Fe1）は半月形をしたもので、芯部分を薄い膜でおおい、その上には箔がかぶっている。刃は鋭くなく丸みをもっている。用途は不明である。

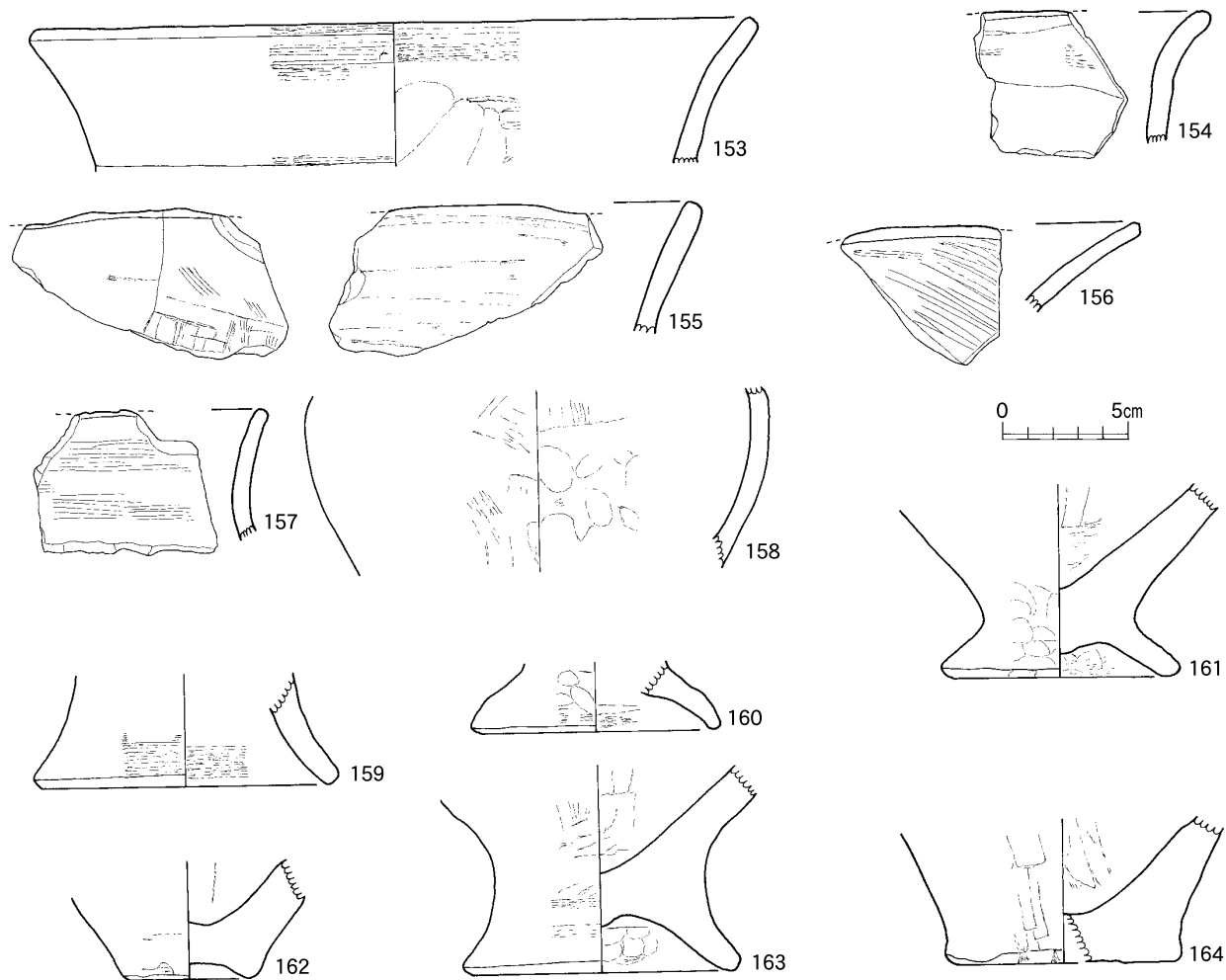
4) 土坑（第39図, 152）

C地点で検出された長径100cm、短径90cm、深さ10cmのほぼ円形をした浅い土坑で、中から甕形土器の口縁部破片が出土している。くの字状に外反する口縁部で、内外とも横方向のヘラナデで仕上げている。外面は黒褐色、内面は淡茶褐色を呈し、焼成度は良い。火山ガラス・茶色石・白色石・石英などの多い砂質土を用いているが、3mm大の礫も含まれている。

2 出土遺物

1) B地点出土の土器

B地点では甕形土器・壺形土器・埴形土器・鉢形土器・高坏形土器・手づくね土器が出土してい

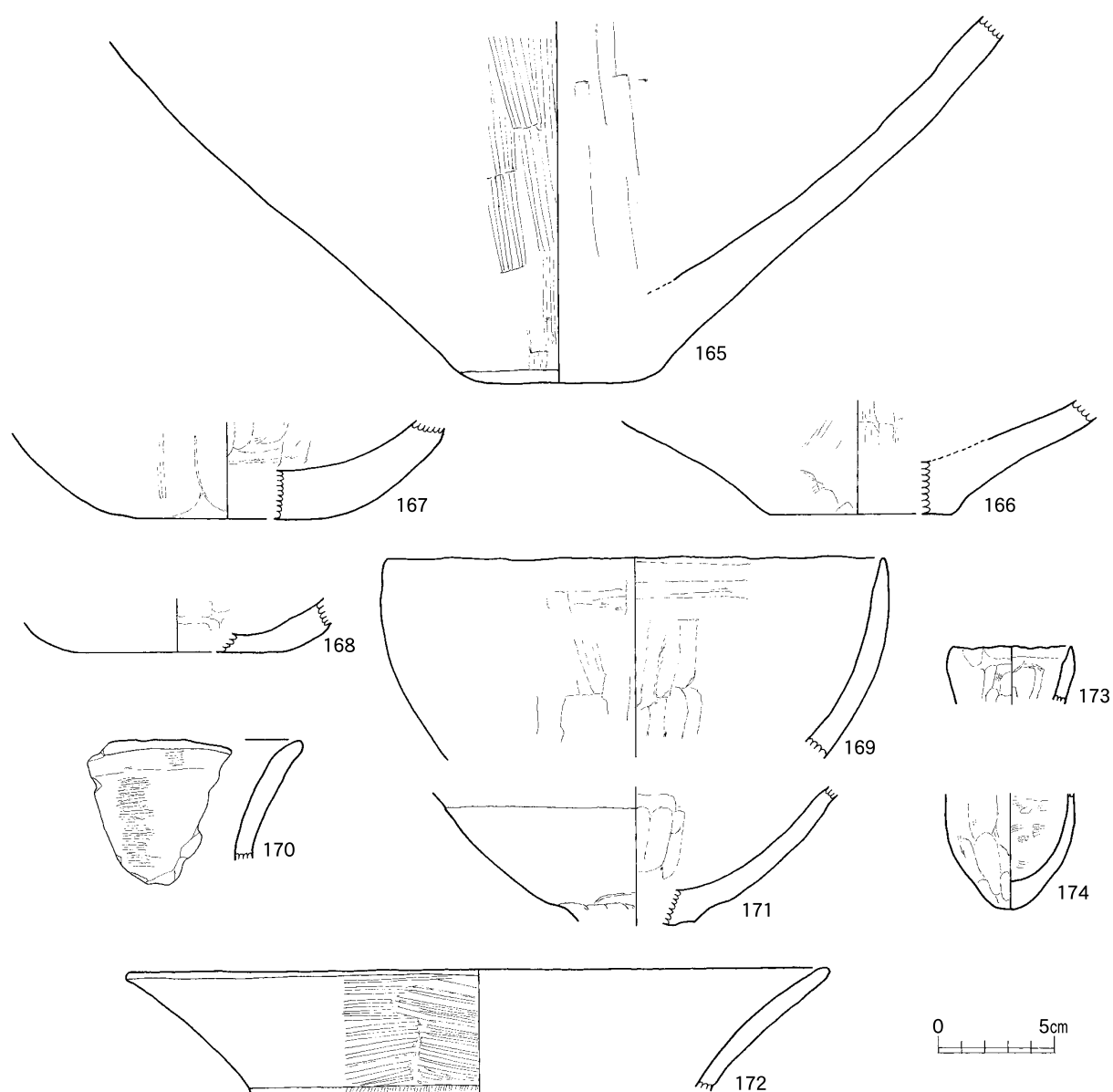


第40図 B地点出土の土器(1)

る。

甕形土器（153～164）は外反する口縁部と、脚台あるいは平底が出ている。口縁部はいずれも外反するもので、153は突帯が貼付けられるが、他はあるのかないのか不明である。ただ、外面調整にかきあげはなく、ほとんどヘラ横ナデである。156は傾きが強く、ヘラミガキで調整してあることから壺形土器の可能性もある。158はやや薄手に仕上げられ、丸みをおびた器形を呈している。黄みがかった淡褐色を呈していることから在地製の土師甕の可能性はある。159～163は脚台であるが、159・163はハの字状に開いているのに対して、160は内反気味に曲がり、161は浅い。162は脚台というよりあげ底になっている。164は安定した平底で、縁に繊維状圧痕があり、ていねいなヘラナデで仕上げられて白粉がみられる。

壺形土器（165～167）の底は不安定な平底と、丸底、小さい平底とがある。165は直径6 cmの小さ



第41図 B地点出土の土器(2)

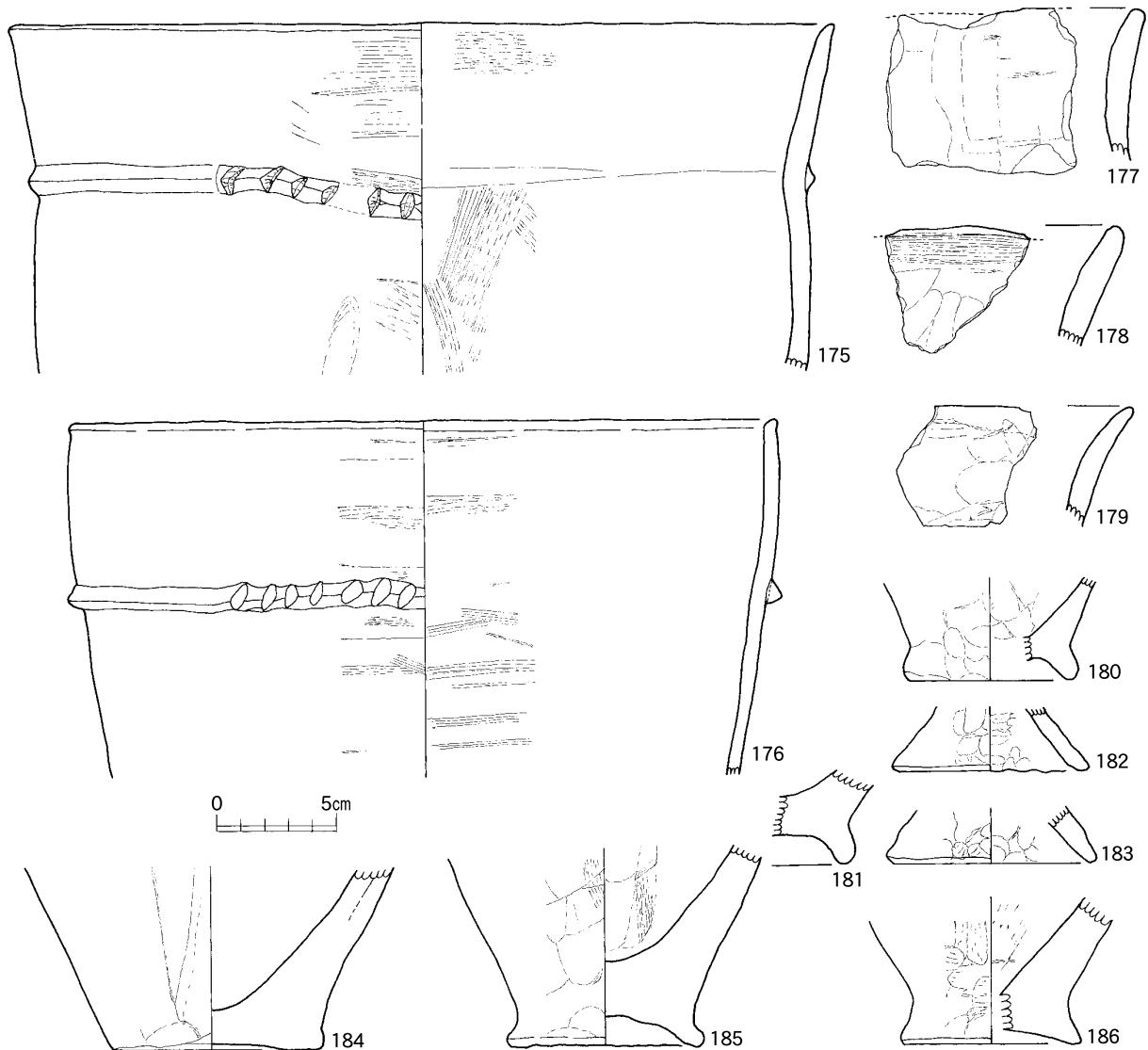
い平底で、外へ開いて立ち上がっており内面の剥脱が目立つ。外面は縦方向のヘラミガキで仕上げている。大型壺の底である。166は直径8cmの白粉の付いた安定した平底で外へ強く広がっている。内外とも縦方向のヘラナデで仕上げる。167は大きな丸底である。

埴形土器(168)の底は直径が9cmある安定した平底で、こまかい砂質土を用い、内外ともヘラナデで仕上げている。

鉢形土器(169~171)は丸鉢のものと大鉢のもの、台付のものがある。169は口縁直径が21.5cmと大型の内弯するもので、口縁はでこぼこしている。内外ともヘラナデである。170は外反するもので、外面はミガキに近い横方向のていねいなヘラナデで仕上げている。171は台付きの大型鉢形土器で、鉢部は頸部から口縁部へ向かい強く外反している。

高坏形土器(172)は坏部の口縁が外へ強く外反するもので、内外ともヘラミガキで仕上げる。口縁直径は30.5cmある。

手づくね土器(173・174)は鉢形をしている。173は口縁直径が5cmで、端部はとがっている。174は丸底となるもので、外面がヘラナデ、内面が繊維状ハケナデで仕上げる。



第42図 C地点出土の土器(1)

2) C地点出土の土器

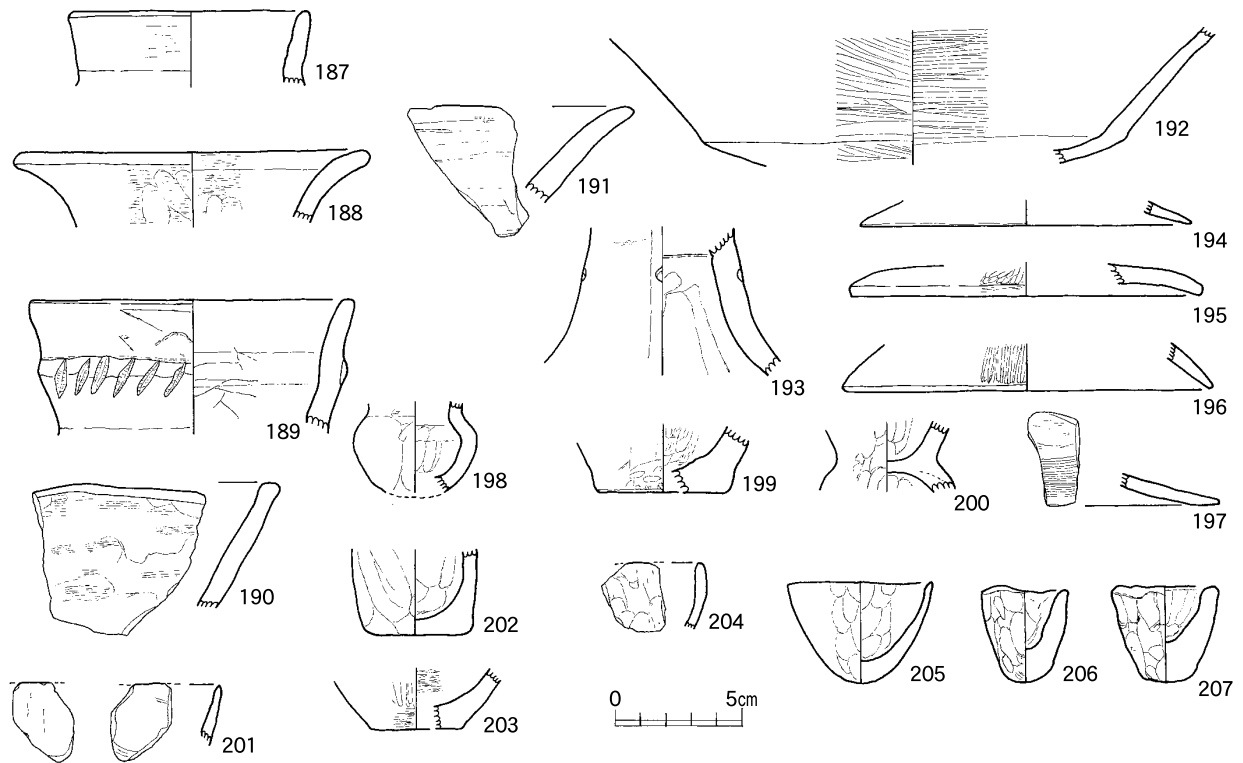
甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・小型土器・手づくね土器がある。

甕形土器(175~186)の口縁はくの字状に外反するものと、まっすぐ伸びるものがある。175は直径が34.5cmあり、頸部で屈曲し、口縁端へまっすぐ伸びている。屈曲部にはヘラ押圧のある三角突帯が貼付けられている。176は口縁直径が29.5cmで頸部にヘラ押圧のある三角突帯が貼付けられる。177~179もくの字状に外反し、これらの口縁部にはいずれも外面にスガが付着している。底部は180~183のようにハの字状の低い脚台が付くものと、184~186のようにあげ底気味のものがある。直径は7.3~9cmと小さいものが多い。調整はヘラナデであるが、口縁外面は横方向、胴部から下の外面は縦方向が多い。

壺形土器(187~189)は口縁直径が9.5cmと小さく、頸部で強く屈曲し、やや開きながらまっすぐ伸びるもの(187)と、口縁直径が14cmで強く外反するもの(188)、口縁直径が12.7cmで外へ開く口縁の途中にヘラ押圧のある低い半円形突帯が貼付けられるもの(189)とがある。いずれもヘラナデで仕上げている。

鉢形土器(190・191)は外へ開きながらまっすぐ伸び、端が丸いものと、強く外へ反るものがある。

高坏形土器(192~197)の坏部は浅い底部から外へ屈曲してやや反りながらまっすぐ開くもので、内外とも横方向のヘラミガキで仕上げているが、内面の剥脱が目立つ。193は筒部で貫通しない円形の穴が2か所にあるが、この割合から5つ位あると思われる。194~197は直径が13~14.5cmある脚部で、裾部は細くなって低い形でまっすぐ延びるもの(194・197)、丸みをもって低くなるもの(195)、ハの字状に開くもの(196)とがある。



第43図 C地点出土の土器(2)

第4表 成川式土器観察表(1)

図番	器種	出土区	口径	高さ	底径	外面の調整	内面の調整	色調	焼成度	胎土	
114	甍形土器	2 号 堅 穴 住 居 跡	33.0cm	35.3cm	8.7cm	ハケナデ	ナデ	淡茶褐色(外にスス、内にコケ)	普通	火山ガラス、白色石の多い砂質土	
115	甍形土器		34.0cm			横ナデ	ハケナデ	外:淡茶褐色(外は赤っぽい) 内:淡茶褐色(一部黒褐色)	良	火山ガラス、白色石の多い砂質土	
116	甍形土器					ハラ横ナデ	ハラ横ナデ	外:赤褐色 内:黒褐色	良	火山ガラス、白色石の細かい砂質土	
117	甍形土器					ハラ縦ナデ	ハラ横ナデ	外:黒褐色(ススが厚く付着) 内:淡茶褐色	良	黄白色石、火山ガラス、茶色石などの細い砂質土	
118	甍形土器					ハラ横ナデ	ハラ横ナデ	淡茶褐色(外にスス)	良	火山ガラス、白色石、茶色石の多い細かい砂質土	
119	甍形土器					ハラナデ	ハラ横ナデ	乳茶褐色(内は一部赤み、外はスス)	良	火山ガラス、白色石	
120	甍形土器		35.0cm	33.2cm	6.0cm	ていねいなハラナデ	ハラナデ	淡茶褐色	良	黄白色石、白色石	
121	甍形土器		29.8cm			ていねいなハラ横ナデ	ていねいなハラ横ナデ	淡茶褐色(外は一面スス)	良	火山ガラス、白色石など4mm大の礫の多い砂質土 茶色石、黄白色石	
122	甍形土器		29.0cm			ていねいなハラ縦ナデ	ハラナデ	茶褐色	普通	白色石、角閃石多 大きな石あり	
123	甍形土器		24.4cm			ハラ縦ナデ	ハラ横ナデ	外:暗茶褐色(スス付着) 内:黒灰色	普通	火山ガラス、黄白色石、白色石など、6mm大の小石あり	
124	甍形土器					ハラ横ナデ	ハラ横ナデ	外:黒褐色(スス厚い) 外:黄色っぽい淡褐色	普通	火山ガラス、白色石、石英、黄白色石、茶色石など、 4mm大の小石あり	
125	甍形土器		34.0cm			ていねいなハラナデ	ていねいなハラナデ	淡茶褐色 (外はスス付着)	良好	火山ガラス、黄白色石、茶色石などの細かい砂粒	
126	甍形土器				7.6cm	ハラナデ	ハラナデ	茶褐色(内は灰がかかる)	良	白色石、火山ガラスの多い砂質土 4mm大の石あり	
127	甍形土器				8.6cm	ハラナデ	ハラナデ	乳茶褐色	普通	火山ガラス、白色石、茶色石など4~5mm大までの 礫を多く含む砂質土	
128	甍形土器				8.0cm	ハラ縦ナデ	ていねいなハラ縦ナデ	外:ピンクがかった乳茶褐色(一部赤みあり) 内:明茶褐色	良	火山ガラス、茶色石、黒色石、白色石など 5mm大ほどの小石が非常に多い粗砂	
129	甍形土器				4.2cm	ハラ縦ナデ	ハラ縦ナデ	乳茶褐色部分的に黒色化	良	白色石、茶色石を含む4mm大の石の多い粗土 火山ガラス多	
130	甍形土器				6.6cm	ハラ縦ナデ 白粉、圧痕あり	ハラ縦ナデ	外:淡茶褐色 内:白っぽい淡茶褐色こげ	良	白色石、火山ガラス、角閃石などの石多	
131	甍形土器				8.6cm	ハラナデ	ていねいなハラナデ	淡黄色	普通	白色石、火山ガラス	
132	壺形土器		16.4cm			ミガキに近いていねいなハラナデ	ハラ横ナデ	淡茶褐色	良	火山ガラス、白色石	
133	壺形土器		18.0cm			ていねいなハラ横ナデ	ハラ横ナデ	淡茶褐色	普通	白色石、黄白色石、火山ガラスの多い細かい砂質土	
134	壺形土器		19.0cm			ハラミガキ	ハラミガキ	明茶褐色 外はやや黒み	良	白色石、火山ガラス、角閃石などを含む砂質土	
135	壺形土器					ミガキに近いていねいなナデ	ハラ横ナデ	オレンジがかった明茶褐色	普通	火山ガラス多 茶色石、灰色石などの細かい石の多い砂質土	
136	壺形土器					ハラ横ナデ	ハラ縦ナデ	外:茶褐色 内:淡茶褐色	良	火山ガラス、白色石、茶色石、黄白色石、 石英などの多い砂質土、6mm大のものあり	
137	壺形土器				5.0cm	ハラ縦ナデ	ていねいなハラナデ	茶褐色(底が黒っぽい)	良	火山ガラス、茶色石、白色石などの多い砂質土	
138	壺形土器				3.8cm	ケズリに近いハラ縦ナデ	ていねいなハラ縦ナデ	黄色っぽい明茶褐色(内側とも灰色部分が多い)	普通	茶色石、白色石多い 火山ガラス	
139	壺形土器					ミガキに近いハラ縦ナデ	ハラ縦ナデ	茶褐色(外にはチョコ色・黒色もある)	良	火山ガラス、白色石などの細石粒 6mm大の石も含む	
140	埴形土器		7.3cm	9.1cm	2.2cm	横ナデ 部分的にミガキ	ハラナデ	茶褐色	良	黄白色石、石英	
141	台付鉢形土器					ハラ縦ミガキ	ハラ縦ミガキ	外:黒褐色 内:乳茶褐色	普通	火山ガラス、白色石などの小石多	
142	台付鉢形土器					ハラミガキ	ハラ横ミガキ	明茶褐色	良	白色石、黄白色石、火山ガラスを含む砂質土	
143	手づくね土器		7.4cm			ていねいなハラ横ナデ	ハラミガキ	明茶褐色	良	火山ガラス、白色石などの細かい石	
144	手づくね土器		6.6cm			ハラナデ	ハラ横ナデ	淡茶褐色	普通	火山ガラス、白色石、石英など含む細かい土	
153	甍形土器		B 地 点	28.4cm			ハラ横ナデ	ハラ横ナデ	外:黒褐色 内:赤みがかった淡茶褐色	良	火山ガラス、角閃石、白色石、灰色石、 茶色石など細石多い砂質土
154	甍形土器						ハラ横ナデ	ハラ横ナデ	明茶褐色	普通	白色石、火山ガラス、茶色石
155	甍形土器						ハラ縦ナデ	ハラ横ナデ	外:黒褐色 内:乳茶褐色	良	火山ガラス、白色石などの細かい土
156	甍形土器					ハラミガキ	ていねいなハラ横ナデ	淡茶褐色	良	火山ガラスの多い細かい土	
157	甍形土器					ハラ横ナデ	ハラナデ	黄褐色(外にスス)	普通	火山ガラス、白色石などの細かい土	
158	甍形土器					ハラナデ	ハラナデ	黄みがかった淡茶褐色	良	火山ガラス、茶色石、白色石、角閃石などの砂質土	
159	甍形土器	11.6cm				ハラナデ	ハラナデ	灰がかった淡茶褐色	良	火山ガラス、白色石などの礫の多い砂質土	
160	甍形土器	10.0cm				ハラ横ナデ	ハラ横ナデ	茶褐色(外の表面は灰色がかかる)	良	黄白色石、火山ガラス、石英などの粗い砂	
161	甍形土器	10.4cm				ハラナデ	ハラ縦ナデ	茶褐色	良	白色石、金雲母、黄白色石、角閃石などの砂粒多	
162	甍形土器	5.0cm				ハラ縦ナデ	ハラナデ	灰がかった明茶褐色		火山ガラス、白色石の多い砂質土、7mm大の石あり	
163	甍形土器	8.6cm				ハラ横ナデ	ハラ横ナデ	外:茶褐色 内:暗灰褐色(こげ)	良	白色石、火山ガラスなどの細かい砂粒の多い砂質土	
164	甍形土器	8.8cm				ハラ縦ナデ	ハラ縦ナデ	淡茶褐色(スス付着)	良	火山ガラス、白色石、石英、茶色石 など5mm大の石多く含む	

第5表 成川式土器観察表(2)

図番	器種	出土区	口径	高さ	底径	外面の調整	内面の調整	色調	焼成度	胎土
165	壺形土器	B 地 点			6.0cm	ヘラ縦ミガキ	ヘラ縦ナデ	外：明茶褐色、一部黒褐色赤褐色 内：黄みがかった灰褐色	良	火山ガラス、白色石、角閃石などを含む5mm大の石多
166	壺形土器				7.8cm	ヘラ縦ナデ 底：白粉	ヘラ縦ナデ	黄みがかった淡茶褐色	普通	火山ガラス、白色石、黄白色石などの細かい石
167	壺形土器				8.0cm	ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラナデ	黄みがかった淡茶褐色	良	火山ガラス、白色石などの小石の多い砂質土
168	埴形土器				9.2cm	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	外：淡茶褐色 内：黄みがかった乳茶褐色	普通	火山ガラス、白色石、茶色石などの細石を多く含む砂質土
169	鉢形土器			21.6cm		ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	外は灰がかり黒班あり 淡茶褐色（内にこげ、剥脱）	普通	火山ガラス、白色石、茶色石などの砂質土
170	大型鉢形土器					ミガキに近いていねいなヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	外：黒褐色 内：茶褐色	良	火山ガラス、茶色石、白色石などの細石を多く含む砂質土
171	台付鉢形土器					ヘラナデ	ヘラ横ナデ	乳茶褐色	普通	火山ガラス、茶色石、白色石などの細かい石
172	高坏形土器			30.4cm		ヘラミガキ	ヘラ横ミガキ	黄みがかった明茶褐色（内にスス）	良	火山ガラス、白色石、茶色石などの砂質土
173	手づくね土器			5.2cm		ヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	良	火山ガラス、茶色石、白色石などの小礫含む砂質土
174	手づくね土器					ヘラナデ	繊維状ハケナデ	にごった明茶褐色（外に黒班）	普通	火山ガラス多、細かい砂質土
175	甕形土器			34.4cm		ヘラ横ナデ	ていねいなヘラナデ	茶褐色（外：スス付着）	良	火山ガラス、角閃石、石英などを含む5mm大の小石
176	甕形土器			29.6cm		ていねいなヘラ横ナデ	ていねいなヘラ横ナデ	明茶褐色（外：スス付着）	良	白色石、火山ガラス、茶色石などの細かい土
177	甕形土器					ヘラナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色（外：スス付着）	普通	白色石、火山ガラスの多い砂質土
178	甕形土器					ヘラナデ	ヘラ縦ナデ	茶褐色（口唇にスス）	良	白色石、角閃石、火山ガラス
179	甕形土器				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	内外ともに口唇付近にスス付着	普通	火山ガラス、角閃石、白色石などを含む砂質土	
180	甕形土器			6.6cm	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	良	角閃石を含む細かい土	
181	甕形土器				ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	良	茶色石、火山ガラスなどの砂粒	
182	甕形土器			8.2cm	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	黄褐色	良	石英を含む2mm大の軽石	
183	甕形土器			8.2cm	手づくね風 でこぼこヘラナデ	手づくね風 ヘラナデ	茶褐色	良	白色石、石英、火山ガラス	
184	甕形土器			8.5cm	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	茶褐色	良	火山ガラス、白色石、茶色石、長石などを 含む8mm大のものあり	
185	甕形土器			8.0cm	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	乳茶褐色（一部ピンクがかる）	普通	火山ガラス、石英、黄白色石などの細砂粒を 含む砂質土、5mm～8mm大の礫あり	
186	甕形土器			7.4cm	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	茶褐色、黒褐色	普通	石英、角閃石	
187	壺形土器		9.4cm		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	赤っぽい淡茶褐色	普通	石英、火山ガラス	
188	壺形土器		13.4cm		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	普通	石英、火山ガラス、白色石	
189	壺形土器		12.6cm		ヘラナデ	ていねいなヘラナデ	淡茶褐色	良	石英、角閃石、火山ガラス、白色石	
190	鉢形土器				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色（外に黒班あり）	良	火山ガラス、石英、角閃石、白色石	
191	鉢形土器				ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	内：スス付着	普通	火山ガラス、角閃石、茶色石、石英などの細かい砂粒	
192	高坏形土器				ヘラ横ミガキ	ヘラ横ミガキ	外：淡茶褐色 内：灰黒褐色、黒褐色、茶褐色	良	火山ガラス、茶色石、白色石の多い砂質土	
193	高坏形土器				ていねいなヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	乳茶褐色	普通	火山ガラス、黄白色石、白色石、石英 など4mm大の礫あり	
194	高坏形土器			13.0cm	ていねいなナデ	ていねいなナデ	乳茶褐色	普通	細かい精製土	
195	高坏形土器			13.8cm	ヘラミガキ	ていねいなヘラナデ	明茶褐色（端にスス）	普通	白色石、火山ガラス、金雲母、角閃石	
196	高坏形土器			14.5cm	ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	乳茶褐色（外の一部は淡茶褐色）	良	白色石、火山ガラス、石英などの多い細かい砂	
197	高坏形土器				ヘラミガキ	ハケ横ナデ	明黄褐色	普通	石英、角閃石などの細かい石	
198	小型土器壺				ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	外：黒褐色 内：淡茶褐色	普通	白色石、火山ガラスなどの細かい砂粒	
199	小型土器			5.2cm	ていねいなヘラ縦ナデ	粗いヘラ縦ナデ	淡茶褐色	良	火山ガラス、白色石などの細砂	
200	小型土器 （台付鉢）				ヘラナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	良	火山ガラス、茶色石、石英	
201	小型土器				ミガキに近い縦ナデ	横ナデ	乳茶褐色	普通	白色石、茶色石、火山ガラスなどを含む3mm大もある	
202	小型土器			4.0cm	ていねいなナデ 磨滅している	ていねいなナデ 磨滅している	淡茶褐色	普通	細かい土	
203	小型土器			3.6cm	ヘラナデ 底：ていねいなヘラナデ	ていねいなヘラ横ナデ	茶褐色	良	石英、白色石、火山ガラス、角閃石 などを含む5mm大の礫多	
204	小型土器				ヘラナデ	ヘラ縦ナデ	灰白色	普通	白色石、火山ガラスなどの細砂	
205	手づくね土器		5.6cm	4.0cm	0.7cm	ていねいなナデ	ナデ	外：黒色部分的に淡茶褐色 内：淡茶褐色	普通	火山ガラス、黄白色石
206	手づくね土器		3.4cm	3.6cm	0.7cm	指頭ナデ	指頭ナデ	黄褐色（黒班あり）	普通	火山ガラス、白色石などの細かい石
207	手づくね土器		4.0cm	3.8cm	1.5cm	指頭ナデ	指頭ナデ	淡茶褐色	良	火山ガラス多 白色石、茶色石など細かい石

小型土器（198～204）には壺形と鉢形がある。198は壺形を呈する。口縁部を欠いているが、肩が張り頸部がくびれ、丸底となるもので、内外ともヘラナデである。199・202・203は平底であり、壺形か鉢形か不明である。199・203は底から外へ広がって口縁へ向かう器形を呈しているが、202はあまり外へ広がらず直に近く立ちあがる器形を呈する。201は小さい口縁でやや外へ広がって口縁へ向かっており、口縁の作りは手づくね風である。200は台付鉢形土器の形をし、脚台は内側に貼付け痕がみられる。204はやや内反する鉢形を呈している。これらはいずれもヘラナデであるが、ていねいにナデているものも多く、201の外面などはミガキに近い。

手づくね土器（205～207）はいずれも鉢形を呈しているが、丸底となるものと、平底のものともがあり、口縁部はでこぼこしている。205が薄いのにに対し、206と207は厚い作りである。205は手づくねではあるが、ていねいにナデている。

第7節 近世以降

時期がはっきりしないが、A地点で溝状遺構1条と古道4条、B地点で溝状遺構1条と古道2条、C地点で古道1条が検出されている。

1 溝状遺構

1) 溝状遺構1

A地点の古道2と古道3・4の間にあるもので、用地外から現道へと斜めに続いている。幅150cm、深さ53cmで、長さ7mが検出されている。断面は下部は逆台形を呈しているが、上のほうは広がっている。下から明黒褐色土、黒褐色土、灰褐色火山灰、アカホヤ火山灰混じりの茶褐色土と堆積しているが、上から2番目の灰褐色火山灰は大正3年の桜島噴火時のものと思われる。このことから、この溝状遺構は大正時代以前の江戸あるいは明治時代頃のものと思われる。

2) 溝状遺構2

B地点の古道5の西側にあるもので、幅45～70cm、深さ5～8cmの断面が逆台形をしている。長さ7mが検出された。

2 古道

1) 古道1

ほぼ現在の道路と並行するように幅20～35cmの硬化面が、6.5mにわたって検出された。

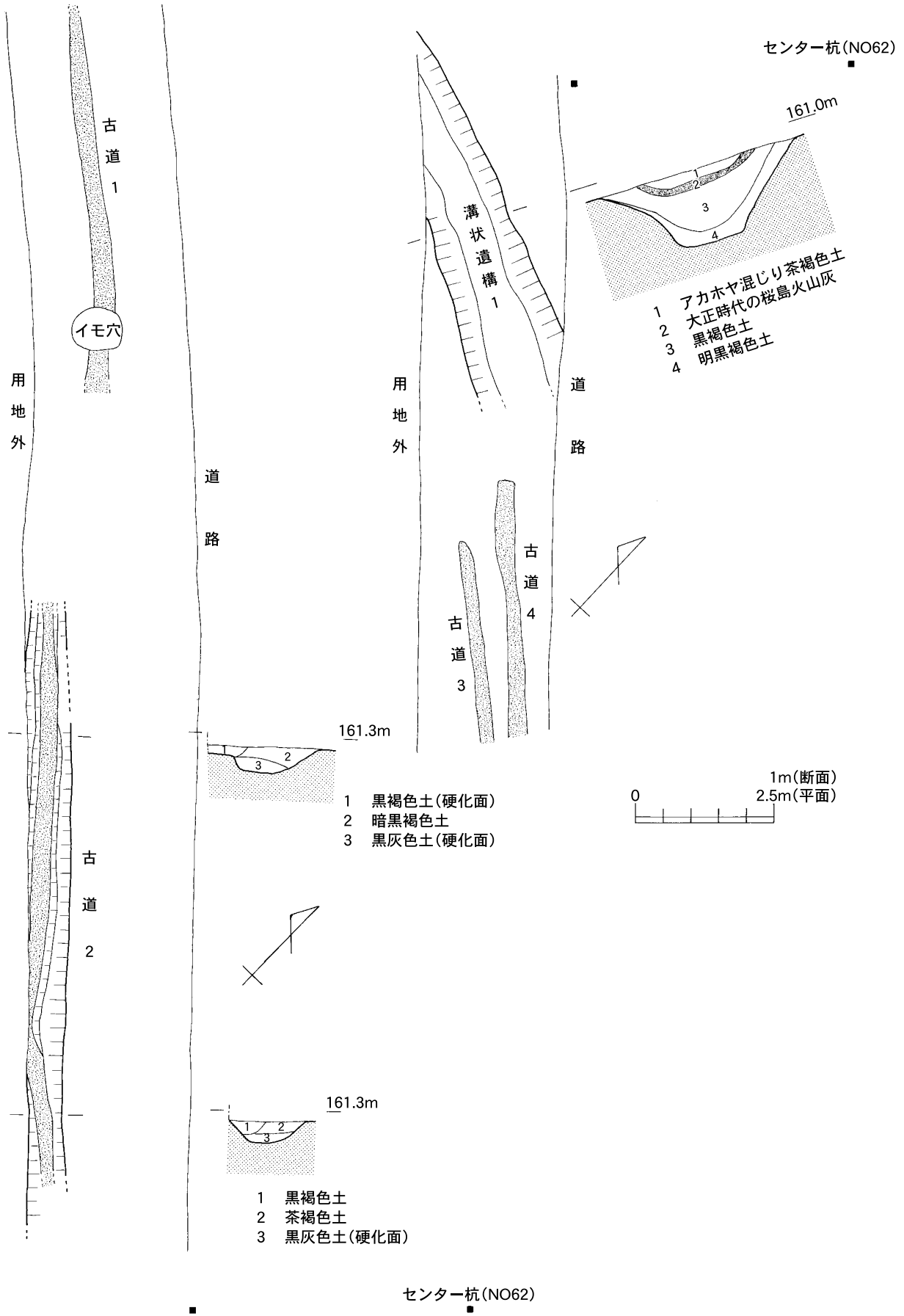
2) 古道2

古道1の東側で南西側が用地外になっているため全容は不明だが、幅80cm、深さ15～25cmほどの溝状遺構が10mにわたって検出された。埋土は最下層が硬化面となっている黒灰褐色土、その上が暗黒褐色土あるいは茶褐色土となっている。南西側には幅30～40cmほどの新たな掘り込みがあり、黒褐色土がはいっているが、西側では硬化面となっている。

このことから、この溝状遺構は数回にわたる道路跡と思われ、方向からして古道1へつながるものと思われる。

3) 古道3・4

現在の道路と並行するように、2条の硬化面が検出された。古道3が幅20cmで、検出長は3.6m、古道4が幅20～35cmで、検出長は4.6mである。これらも、その方向からして古道1や古道2につな



第44図 溝状遺構と古道 (A地点)

がるものと思われる。

4) 古道5

B地点で検出された硬化面で、幅が40～45cmあり、長さ4.8mが検出されている。

5) 古道6

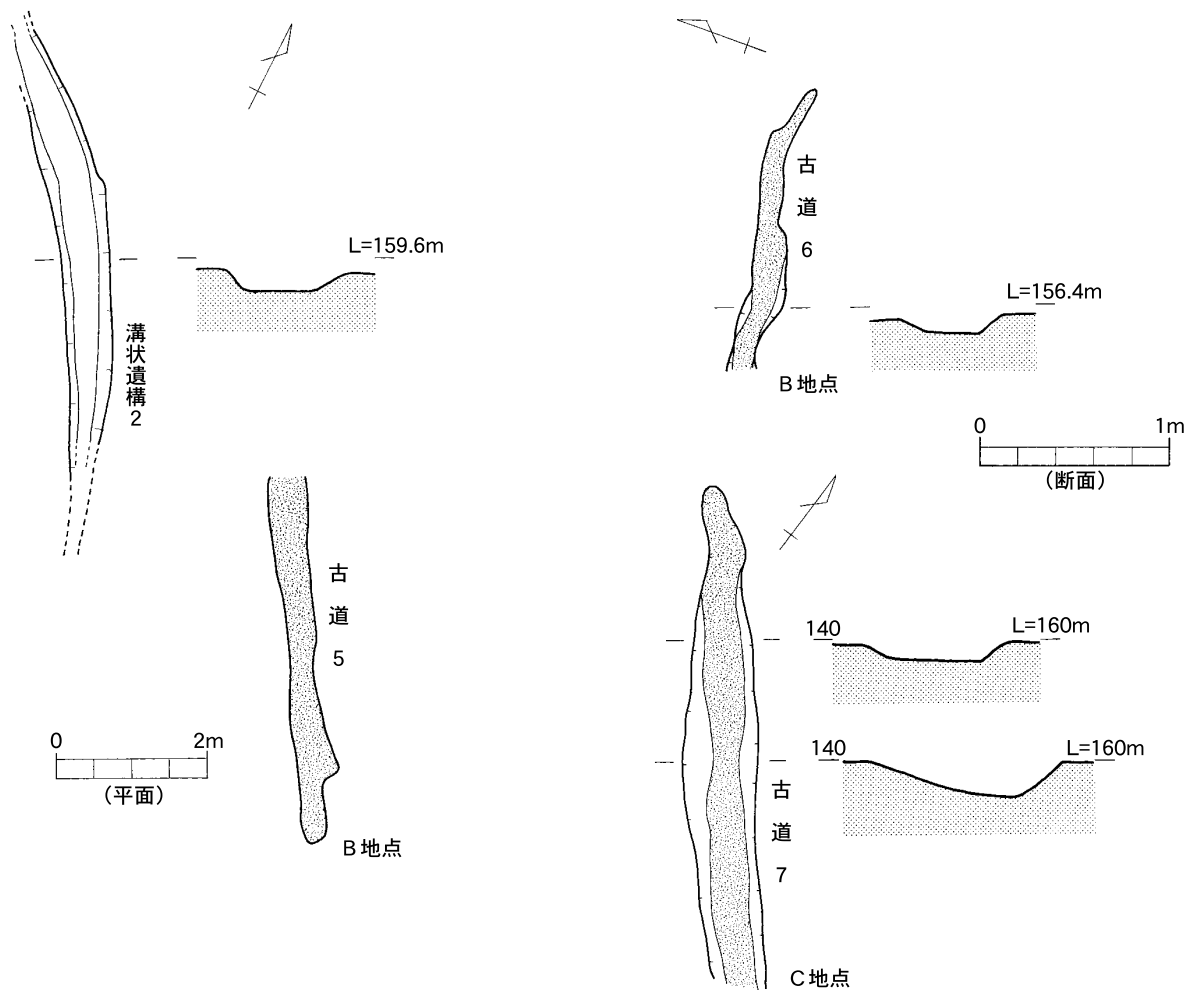
B地点で検出された硬化面で、一部分は幅50cm、深さ7cmほどの断面が逆台形の溝状を呈している。硬化面は幅が25～40cmあり、長さ3.8mが検出された。これだけが現道と直交しており、人家や畑・山への道となっていたものと思われる。

6) 古道7

C地点で検出された硬化面で、ほとんどが幅80cm、深さ10～12cmの断面が逆台形の溝状を呈している。硬化面は幅が40～50cmあり、長さ6.5mが検出された。

3 小結

古道はほとんどが現在の道路と並行し、硬化面の幅が似ていることから、現在の道路と同じような役目を果たしていた道跡と思われる。また、溝状遺構1と古道との関係は古道2の延長部が溝状遺構の断面に出ていないことから、古道2と古道3あるいは古道4、さらには古道5・7が結びつくことを前提とすれば、古道は溝状遺構より古いことになり、古道の年代も明治時代以前となる。



第45図 溝状遺構と古道 (B・C地点)

第V章 まとめ

二子塚A遺跡は海岸から約10kmはいり込んだ山間部にある細長い台地上に立地しているが、同じ台地上には隣接して二子塚B遺跡・同C遺跡も周知されている。県文化財課が最近公表している遺跡地名表によると、A遺跡が縄文・古墳時代の、B遺跡が縄文時代晩期の、C遺跡が弥生時代中・後期の遺跡とされている。本報告書ではっきりしたようにA遺跡では縄文時代早期・晩期の遺物とともに、弥生時代前期の土器も出土している。また、竪穴住居や土坑から成る古墳時代の集落が発見された。さらに、A・B・C3か所の地点においてもそれぞれに遺物の出土密度に差があり、出土地点もそれぞれに微妙な時期差がある。

ひとつの遺跡がいつ形成され始め、それがどのように引き継がれていくのかを表面採集や確認調査、一部の本調査によっては知ることができないことは、すでに多くの遺跡の発掘調査によってはっきりしてきた。当遺跡の調査も主体的にはひとつの道路の拡幅工事である故、先に記したように従来いわれていた時代と異なるものも出てき、場合によっては全く出てこない場所もあるのである。したがって、ここで記すことについても遺跡のというより遺跡のうちの調査した地点のことを記しているのだというほうが正確かもしれない。

今回は大きく5時期の生活跡が確認されたが、縄文時代・古墳時代以外の出土品は少ないため、ここでは2小節に分けてまとめてみたい。

第1節 縄文時代の二子塚A遺跡

当遺跡では早期と晩期のものが出ているが、いずれの時期も出土量は少なく、中には1個体あるいはせいぜい数個体だけの出土しかない時期が多い。このことによって遺跡を語ることの無意味さは先に記した通りであるが、ここでは本調査の成果としてまとめてみたい。

早期の土器は第Ⅰ類から第Ⅷ類まで8種の土器が出ているが、^(註1)塞ノ神式土器を除くと、いずれも出土数は少なく定着的生活を営んだとはとうてい考えられない。しかしながら繰り返し繰り返し、この地が生活地として選ばれたことは、吉田式→石坂式→桑ノ丸式→妙見式→押型文→塞ノ神式と、連続とはいえないものの、かなり密な期間の土器型式が出土していることからうかがうことができる。つまり、約9,000年ほど前から6,500年ほど前まではキャンプ的短期間の生活が繰り返し行われ、その後数千年もの間、空白の期間が生じた。塞ノ神式土器の時期は積極的に定住ということはいえないが、それ以前に比べるとやや安定した生活がされたようである。そして2,700年ほど前であろうか、入佐式土器の時期にまた安定した生活が営まれたことは、深鉢・浅鉢・まり形土器・台付鉢形土器などその時期の多様な土器が出土していることから想定できる。さらにまた、2,300年ほど前の弥生時代初頭に再びキャンプ的生活が営まれている。

出土した各種の石器は、砥石（特に43）のように古墳時代に下る可能性のあるものもなくはないが、ほとんどは縄文時代のものと思われる。ところが、早期のものか晩期のものかは出土状況がはっきりしないためここでははっきりしない。ただ、器種・形態などからして石鏃・石匙・スクレイパー・石核・磨製石斧・礫器・砥石などは早期、スクレイパー・打製石斧・砥石・敲石・磨石・石

皿などは晩期の可能性がある。特に多数出ている抉り入りの打製石斧は、ホルンフェルスという同じ石材を用いており、他にも同石材の多くの剥片が出土していることから当遺跡で製作、あるいは刃の修復作業などをしていたことが考えられる。出土例の少ない抉入石器は所属時期が不明だが、薄い石器で抉り部分に擦痕がみられることから、皮や繊維等を対象としたそいだり、なめしたりする道具の可能性がある。類例石器の出土した遺跡でのあり方の比較によって今後用途等を検討していきたい。スクレイパーのなかで12・13などはサム・エンドスクレイパーや石錐の用途が考えられる。石核は石英という特殊なものを用いているが、これからどのようなものを作ったのかは不明である。

石材のなかで打製石斧や剥片に多くホルンフェルスが用いられていることから、この石材の産地が近くに所在していることが予測できる。黒曜石には腰岳産・三船産のものなどが用いられているが、同じ九州島東海岸の姫島産のものはない。逆に、安山岩のなかに西北九州系のものが含まれているのは注目される。

軽石製品のなかで2つの孔が穿たれたものは、この間に紐づれなどの使用痕がないことから実用品としての使用は考えられない。2孔を利用した祭祀用品と思われるが、具体的使用法は考えにくい。他の2点も用途は不明だが、1点はかなりすれていることから、土器表面などをこすっている可能性もある。

第2節 古墳時代における二子塚A遺跡の特質

二子塚A遺跡で発見された古墳時代の遺構・遺物は南九州の古墳文化を考える上にいろいろな問題を与えている。①竪穴住居跡の構造②宮崎平野の影響を受けた土器と成川式土器の比率③2号住居跡にみられる甕形土器の比率の高さ④布留式土器系の影響⑤小型土器の多さ。この他にもいくつかあるが、それらは個々の項目のところで触れたい。

1 竪穴住居跡の構造

3軒の竪穴住居跡が検出された。狭い幅の調査であるため形態・規模などの全容は不明であるが、古墳時代に一般的にみられる方形のものが1軒（2号）と、内部に突出部がみられるものが2軒（1・3号）ある。

方形あるいは円形の竪穴のまわりに一段浅いいくつかの方形の突出部が付く特殊な形態をした住居跡は、その形から「花卉形（状）住居跡」、あるいは地域性から「日向型間仕切り住居跡」などと呼ばれている。^(註2)このような形態の住居は弥生時代中期後半に出現し、古墳時代前期まで造られ、その分布は日向市から宮崎平野、さらには肝属川流域、薩摩半島まで南九州の広い範囲にわたっている。古墳時代になると、鹿児島県では小田（隼人町）、名主原（吾平町）、塘（金峰町）などの遺跡で発見されている。

当遺跡の2軒の形態から考えれば、一段と深い方形の竪穴のまわりに突出部がとりついたというよりは、設計の段階ですでに外の方形の輪郭から内側へ間仕切りの突出部はいるように設定していたと考えたほうが良からう。とすれば花卉形（状）とか、花びら形といった出来あがりの形態からつける名称よりは設定の目的から名づけた間仕切り住居と呼ぶほうが適切である。今後、このような視点からこの形態の住居を考えていく必要がある。

2 成川式土器と宮崎平野の土師器

南九州において古墳時代の土器は総括的に成川式土器と呼ばれ、全国の他地域とはかなり違う特異な形態・製作技法をしていることが知られている。成川式土器の大きな特長のひとつに甕形土器が球体でなく長胴形を呈し、丸底でなく脚台が付くということあげれる。ここでもそのようなものが多く出土し、特に長胴形甕は主体的である。ところが、底部になると脚台付きのものと平底のものが半々くらいの割合で出土している。多くの甕形土器が出土した2号竪穴住居跡ではその比率は7:1と平底のものが圧倒的に多いが、3号竪穴住居跡や、住居跡以外で出土したものでは1:2と逆の状況を示す。

この違いが時期差なのか、使用する人の系統差なのかは不明だが、1号・3号と2号を比べた時、坩形土器等には時期差のある可能性がある。1号竪穴住居跡は甕形土器の口縁にかきあげのハケナデがないことから最古の成川式土器ではないが、壺形土器の底が丸底であること、口縁部が伸び底が丸くなる小形丸底壺の器形などからして4世紀代の可能性がある。2号竪穴住居跡の甕形土器は1号竪穴住居跡とあまり変わらないが、くの字状のものだけでなく、まっすぐになるもの・内反するものなどがあることからやや新しい。壺形土器も丸底のものはほとんどいっしょだが、平底のものもあり、これも新しいのであろう。小形丸底壺も平底となり、5世紀前半頃だろうか。また、台付鉢形土器に内面ヘラミガキがあることから5世紀後半に下る可能性もある。さらに、125のように6世紀あるいは7世紀にまで時期の下るものがあることをみると、2号竪穴住居跡のように時期が新しくなると宮崎平野の影響が強くなることを示している。

ところで、成川式土器の広がりやどのあたりまで達しているのかについては、これまであまり関心をもって研究されていなかった。筆者は平成13年の鹿児島県考古学会秋季大会において「古墳時代の国境—土器の違いを中心として」と題してその一端について述べたことがある。^(註3) その際は西海岸における肥後系土器の南下現象と、人吉盆地系土器の始良郡への進入について主として触れた。

今回、二子塚A遺跡の調査では、さいわいにもこの問題における東海岸における様相を知ることができた。従来から、肝属平野においては瀬戸内あるいは東九州系の土器がはいり込んでいることが知られていたものの、それは主としては搬入品あるいは影響化のもとに作られたとされていた。そして成川式土器はどこまで広がっているのかという点についてはあまり関心をよせられていなかったといわざるをえない。^(註4) そうしたなかで、二子塚A遺跡の成川式土器の甕形土器には宮崎平野の影響が強く及んでいる特性のあることがわかった。

3 独自性と他地域の影響

古墳時代の南九州は従来、墓の特殊さが重視され、その違いによってある文化圏があるようにいわれてきた。^(註5) 大隅半島の東側でいえば高塚古墳のある地域、地下式横穴墓のある地域、墓地の発見されない地域となり、当遺跡のある地域は高塚古墳のある地域の周辺である。こうした墓の分布圏と住居形態の分布はまた異なり、さらに土器の分布圏はまた違うといった複雑な様相がこの地域では顕著にみられるのである。

甕形土器の底部にいわゆる成川式土器の影響と宮崎平野の両者があり、それが時期によって変わっていくのは先に記した。さらに畿内系土師器の影響は壺形土器(135・158)や坩形土器・高坏形土器・台付鉢形土器・手づくね土器などにみることができる。高山町などでは畿内系土師器の影

響が強く与えられている遺跡があるのを考えれば、当遺跡の出土状況は少ないといえるかもしれない。それは須恵器が1点も含まれていないことからいえる。反面、成川式土器に特長的な卍形土器・高坏形土器に丹塗りをするものがほとんどないということは、あってもおかしくない時期であるだけに不思議である。

こうした様相は畿内の影響の強い墓が近くにあるにもかかわらず、少し内陸部にはいるといくらか違った様相があらわれるということを示しているのかもしれない。

〔註〕

1. ここで、Ⅷ類として、その他とした土器は下剥峯式土器の可能性もある。そうすると、あとで記した順序でいくと石坂式と桑ノ丸式の間にはいることとなる。
2. 名称については「内部突出型住居跡」・「間仕切り土壁住居跡」・「日向型変形住居跡」などとも呼ばれている。
3. 池畑耕一「古墳時代の国境—土器の違いを中心として」『鹿児島県考古学会研究発表資料—平成13年度秋季大会』鹿児島県考古学会 2001
4. 中村直子氏は鹿児島県における古墳時代の土器を分析するなかで、4地域に分けて、土師器と、成川式土器との関係について言及している。その中で肝属地区においては成川式土器のみの遺跡、土師器のみの遺跡、両者を共有した遺跡があると記している。
中村直子「古墳時代における南部九州在地土器と土師器との関係性」『鹿児島大学プロジェクト報告書 新しい関係性を求めて』2004
5. 乙益重隆氏がかつて南九州の古代文化を地下式横穴と地下式板石積石室、さらには成川遺跡の土坑墓をもとにした立石土坑墓の3地域に分けて解釈した論は、長い間支持されてきた。そのため、土器や住居形態など生活による違いはかえりみられない状況が続いてきた。
乙益重隆「熊襲・隼人のクニ」『古代の日本』3九州 角川書店 1970

写真図版



調査前全景
上：A地点
中：B地点
下：C地点



C地点の調査
上：旧石器出土状況
中：縄文土器出土状況
下：集石



縄文時代の遺物出土状況（左上・右上：A地点，左下・右下：B地点）



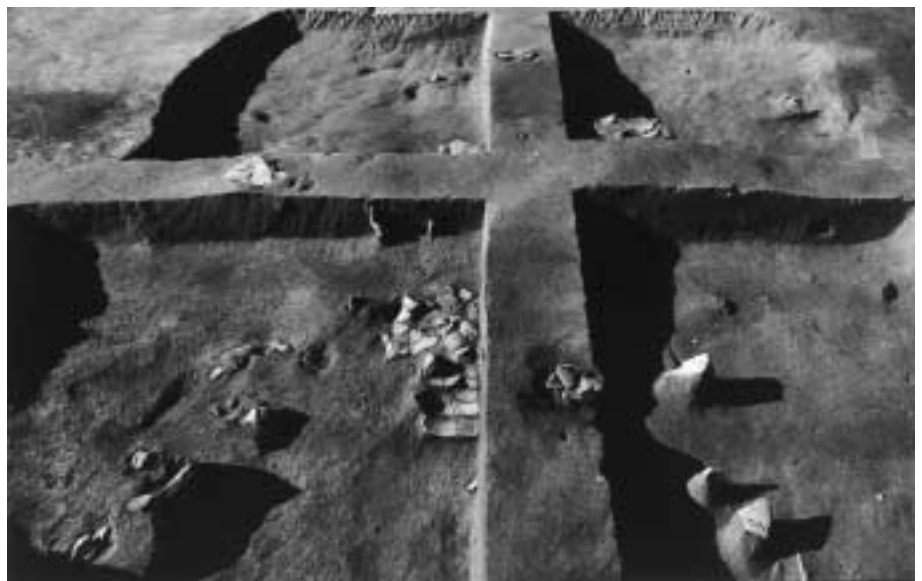
縄文時代の土坑
上 : 検出状況
中 : 断面
左下 : 半掘状況
右下 : 完掘状況



1号竖穴住居跡（上：完掘状况，左下：検出状况，右下：烧土）



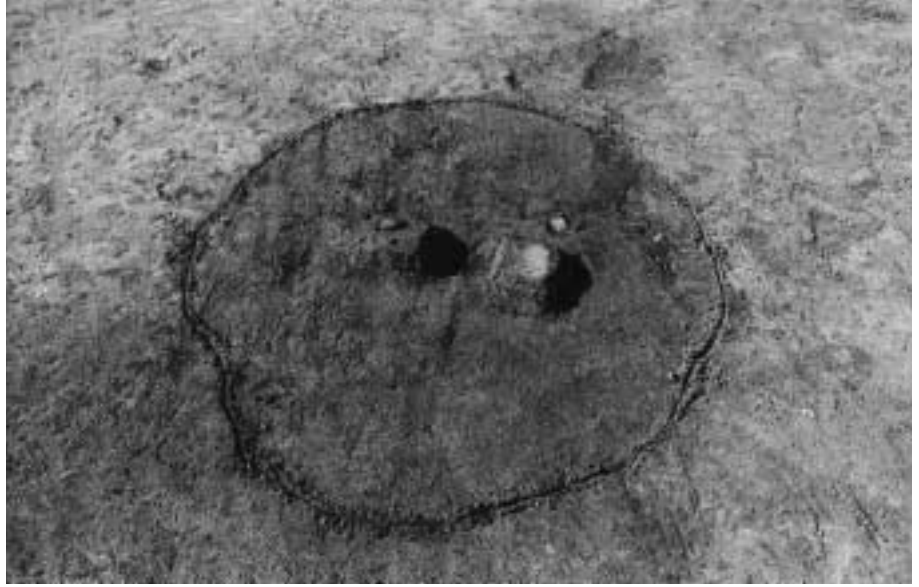
1号竪穴住居跡
上：貼床
中：遺物出土状況
成川式土器出土状況
(下)



2号竪穴住居跡
上：検出状況
中：遺物出土状況
下：遺物出土状況
と断面



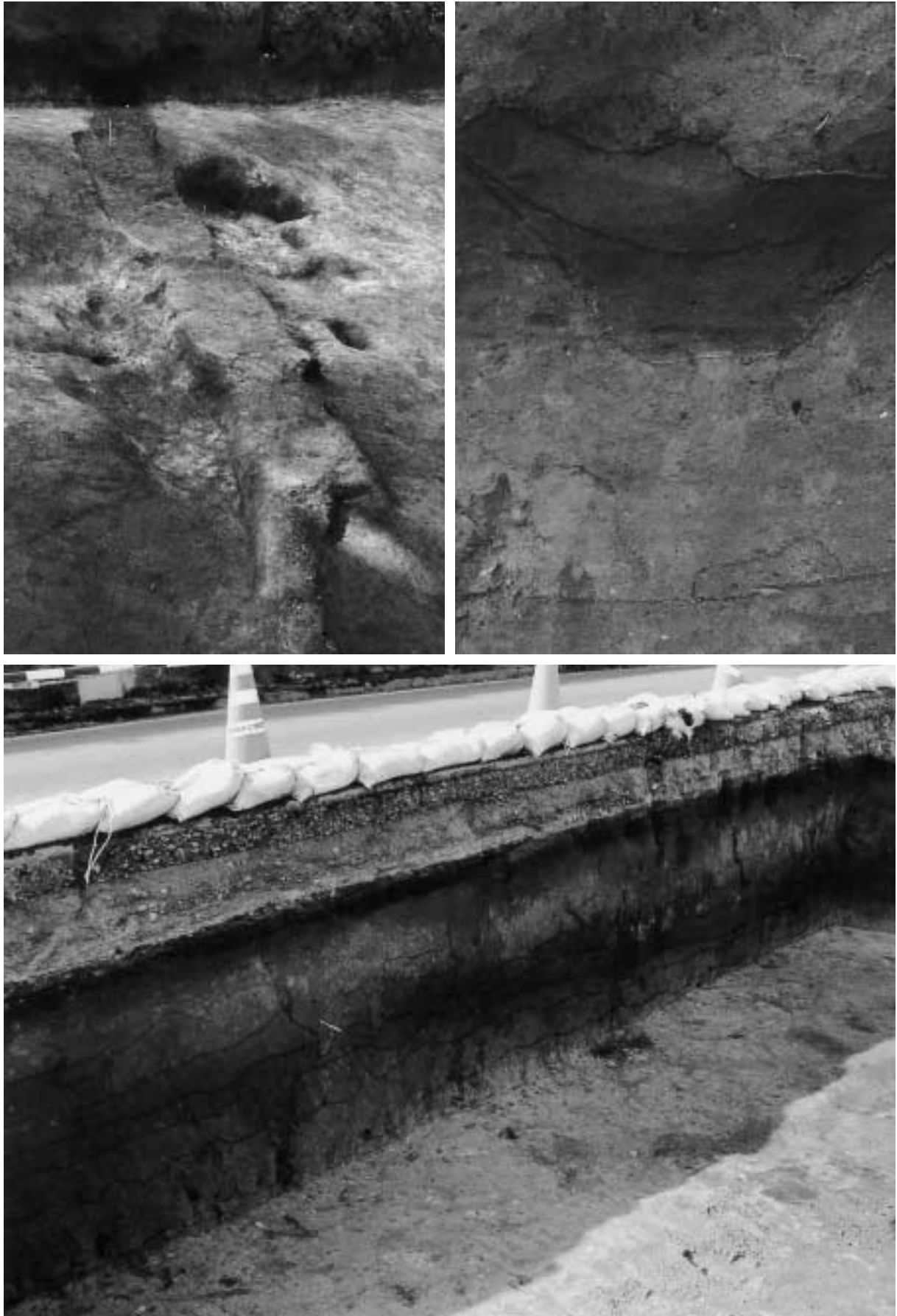
3号竖穴住居跡（上：検出状況，下：完掘状況）



古墳時代の土坑
上：検出状況
中：半掘状況
下：完掘状況



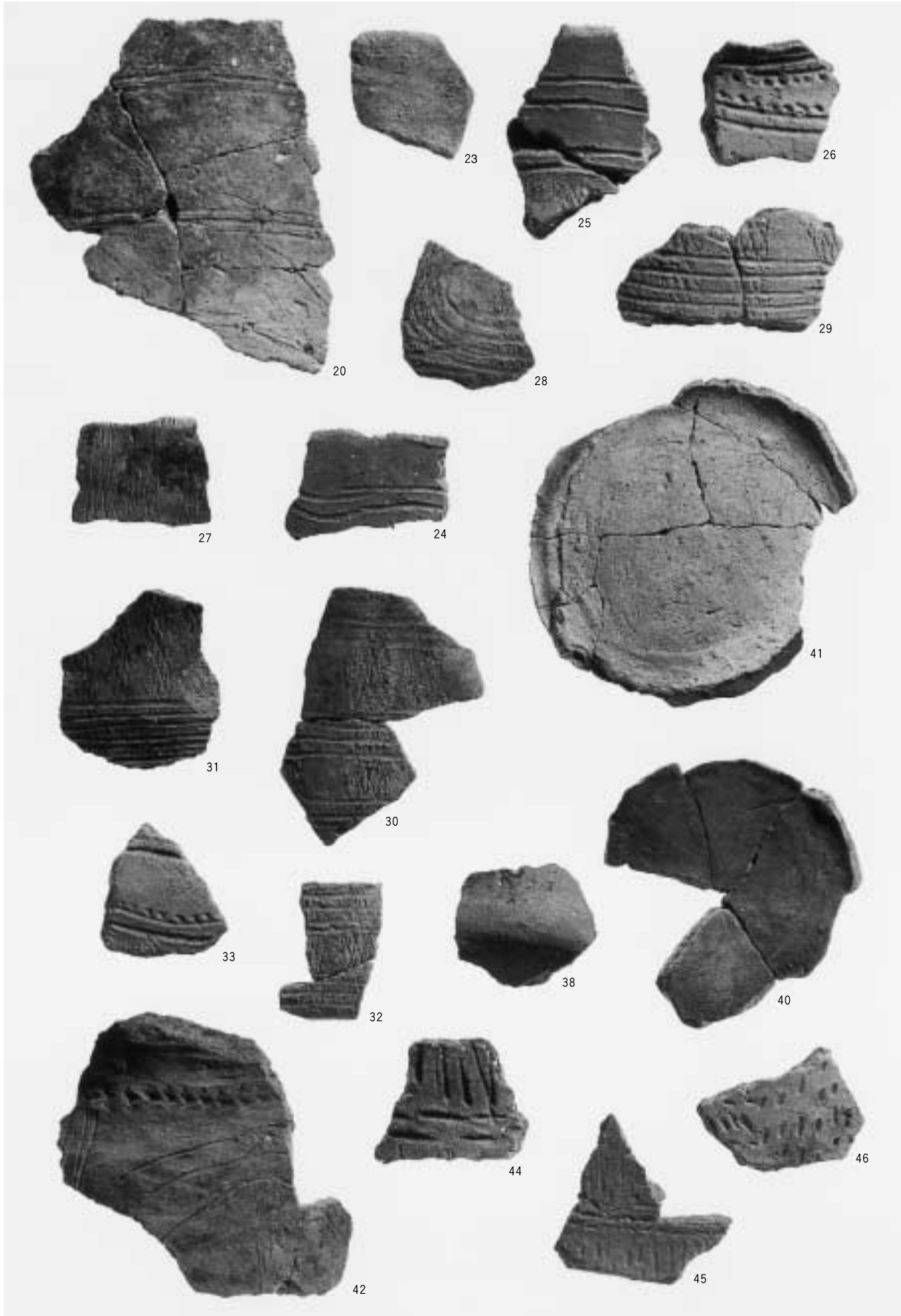
古道2（左上：検出状況，右上：完掘状況），Ⅱ層の土器出土状況（左下），A地点基本層序（右下）



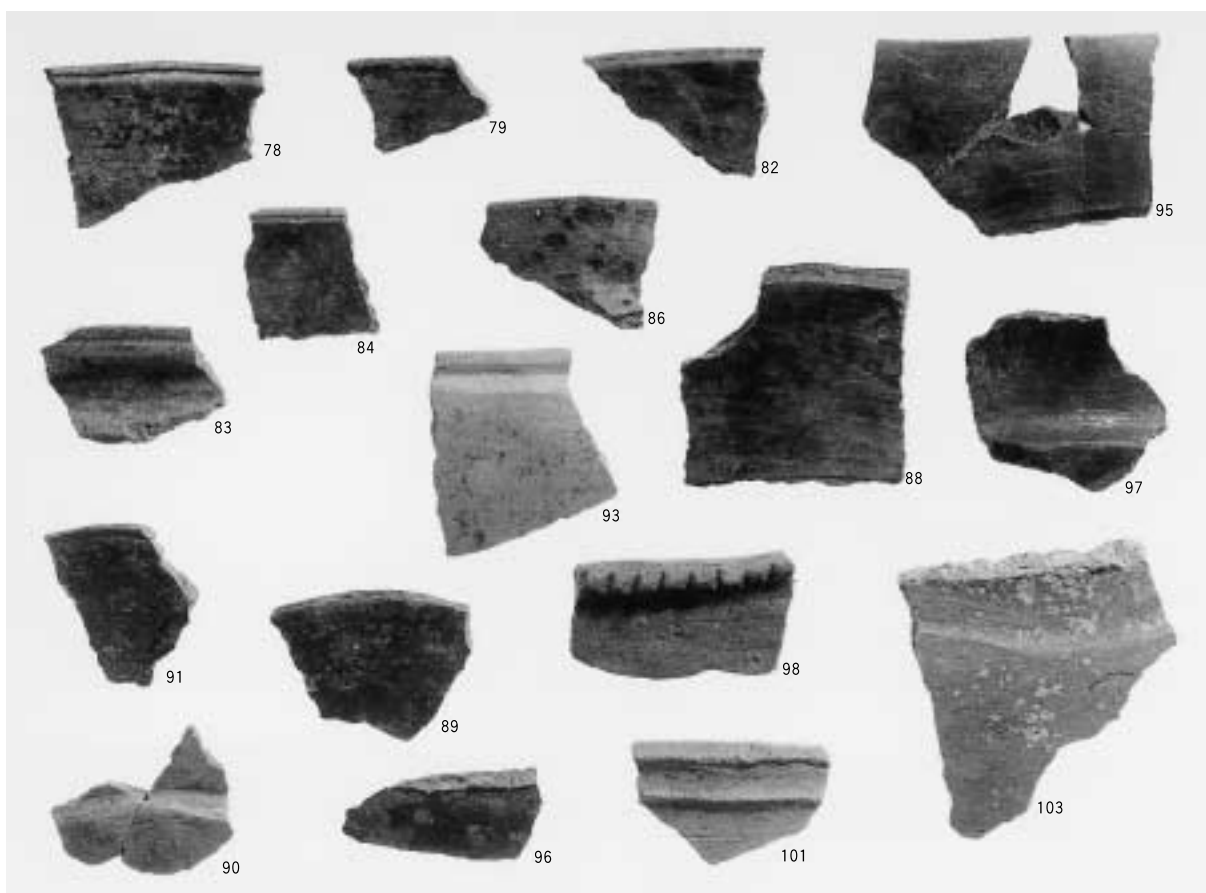
古道 6（左上：完掘状況，右上：断面），B地点の地層（下）



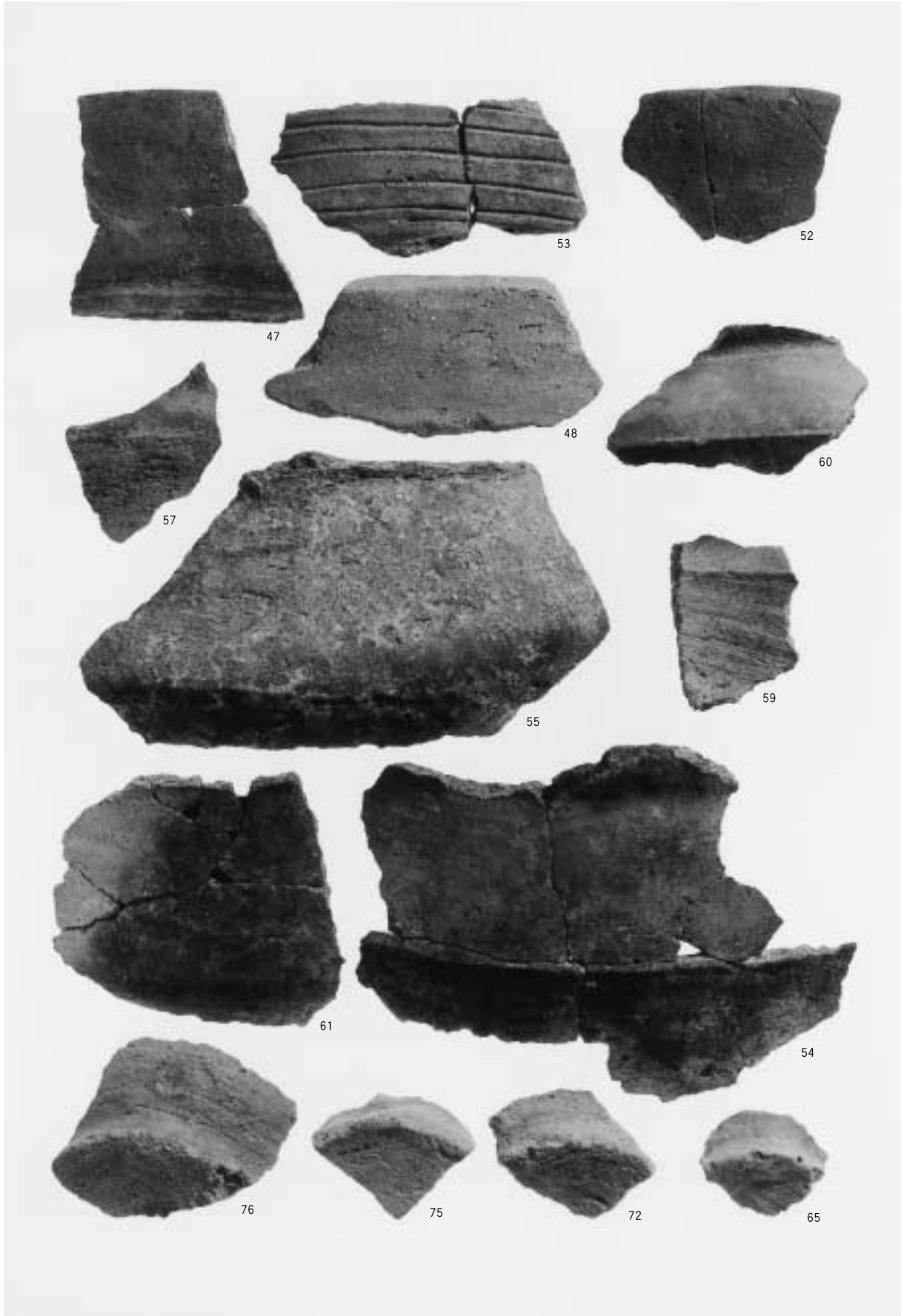
繩文土器(1)



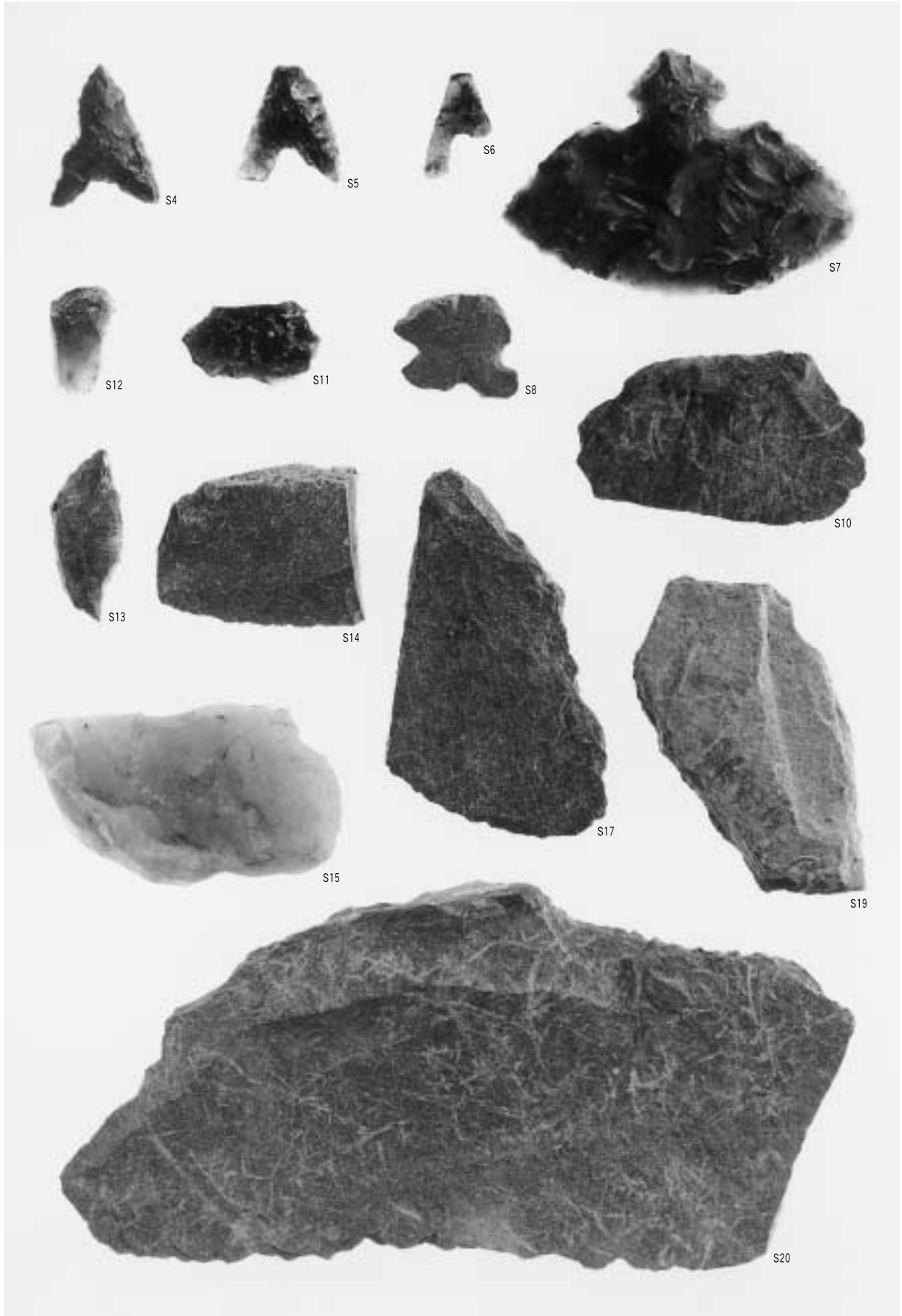
繩文土器(2)



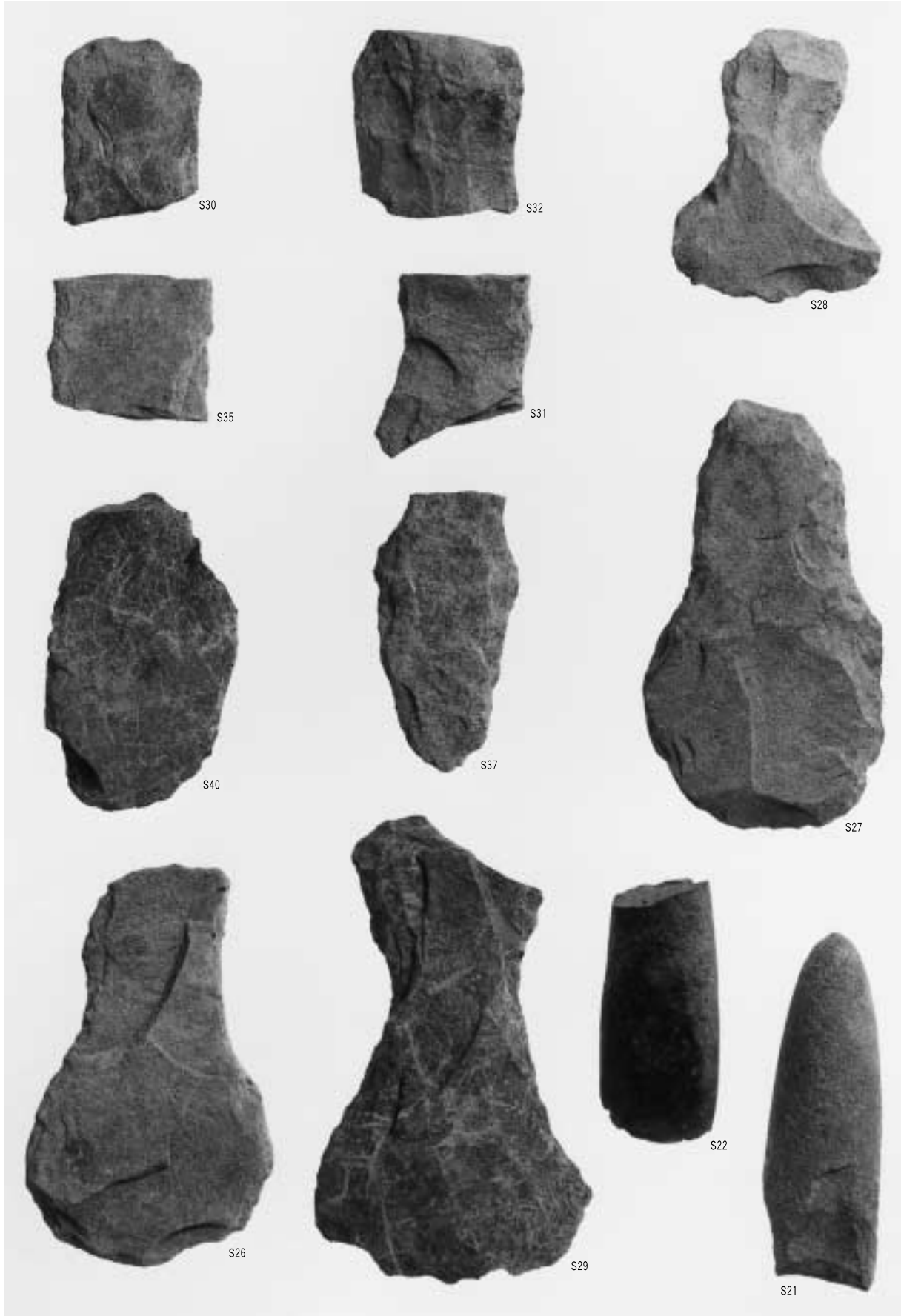
繩文土器(3)



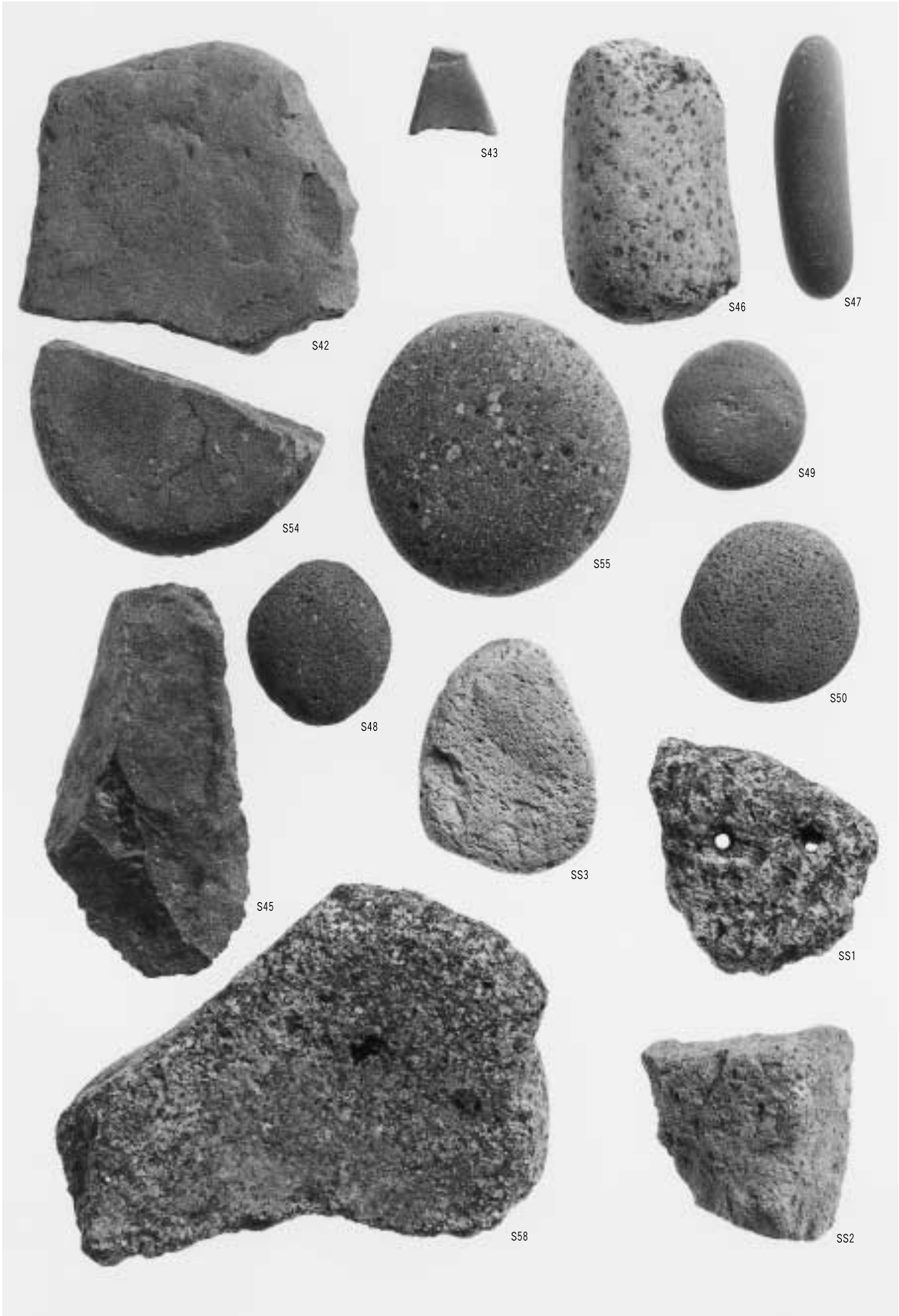
繩文土器(4)



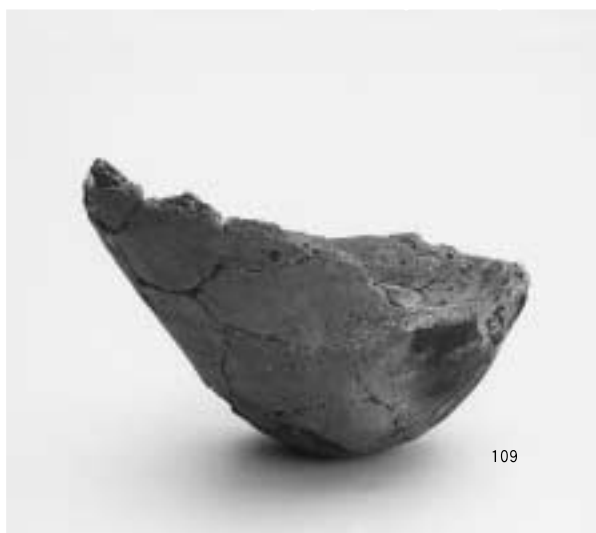
石器(1)



石器(2)



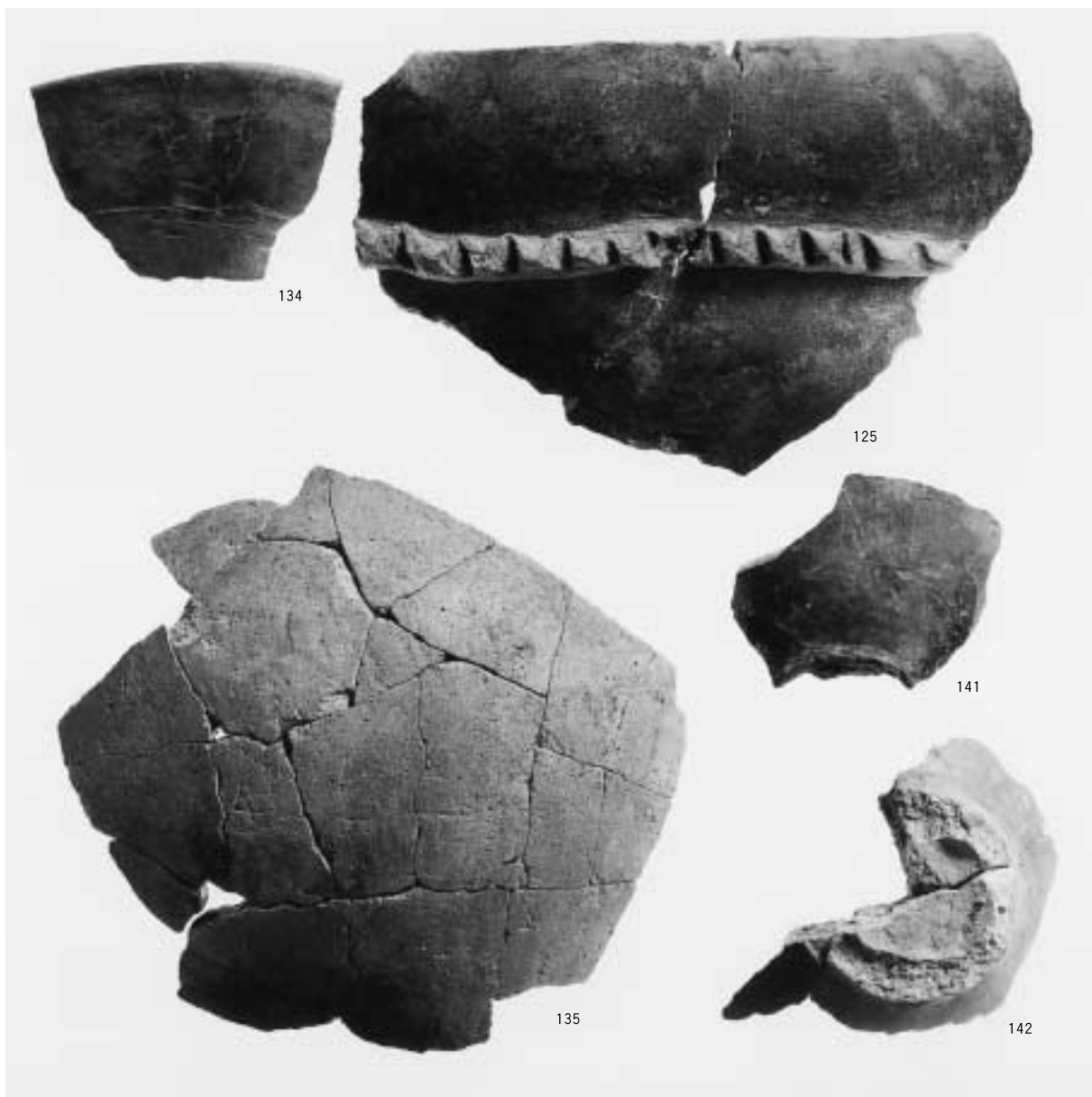
石器(3)



1号竖穴住居跡出土土器



2号竖穴住居跡出土土器



2号竖穴住居跡出土土器



3号竪穴住居跡出土土器とミニチュア土器

あ と が き

志布志湾岸は古墳時代前半、九州でも有数の巨大古墳が所在した地として知られ、中でも大崎町にある横瀬古墳は5世紀後半には九州最大の古墳であったことがわかっている。いっぽう、この頃、現在の鹿児島県一帯は墓の形・内容だけでなく、使用する生活用具（土器・鉄器など）や住居形態などに独自の文化を営んでいたようである。

二子塚A遺跡はこうした地の中でも山間部に位置する遺跡であり、いわば当時の中央文化と南九州独自の文化との境界にあたる地で、土器など考古資料において注目される遺跡であった。

本報告書は調査に携わらなかった編者が遺跡の立地環境もわからないままに出土品だけをもとにまとめたもの故、発掘調査であらわれた生の生活環境を見出せていないのは当然のことといえる。この点に関しては、調査にあたった人々に対しては誠に申し訳ないといわざるを得ない。とはいえ、このような一冊の報告書としてまとめることができたのは、発掘の成果を真摯にまとめられた調査員、現場で忠実に出土状況を残された発掘作業員の皆さん、出土品を古に復元された整理作業員の皆さんのおかげである。今後、これらの御恩に報いるためには、この成果を学術的にまとめていくのが編者の責であると自戒しているので、不十分な部分があればご容赦願いたい。（池畑）

○発掘作業に従事した人

今給黎シズエ、出田国男、上村茂、大河内敦朗、大河内泰子、岡元操、久保敬二、黒石節子、櫻井タミ子、立花キヤク、田畑セツ子、寺園実、中村洋子、西高チヅル、西濱栄、西浜武夫、栢山醇、東水流勇、東平一美、東平鉄夫、藤井義子、諸木春夫、吉永耕二

○整理作業員・浄書に従事した人

川路加代子・新中泰代・野崎裕子・芝昭子・福山霧子・山元宏子・渡邊公兒子

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（84）

県道黒石串良線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二子塚 A 遺跡

発行 2005年3月

編集 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1
TEL (0995)48-5811

印刷 株式会社イースト朝日
〒891-0122 鹿児島市南栄3丁目30-7
TEL (099)266-5522